

V 研究開発の実績と成果2 各校園および各分野・教科等における研究

1. 幼・小・中それぞれの教育課程

(1) 幼稚園の教育課程と本年度の研究の重点

1) 幼稚園の教育課程

平成15年度から3年間、附属小学校とともに幼・小連携の教育課程開発の研究を進めてきた。研究主題は「関わりあって学ぶ力を育成する教育内容・方法の研究開発」で、その研究の過程において、「関わりあって学ぶ力」を意識的に育みながら、幼稚園から小学校への滑らかな接続を具体化していく事を目指して実践を重ねてきた。その実践の裏づけのもと、入園から修了までの園での生活全体を通して培われる学びの道筋を「5つのステージ」からとらえなおしていった。

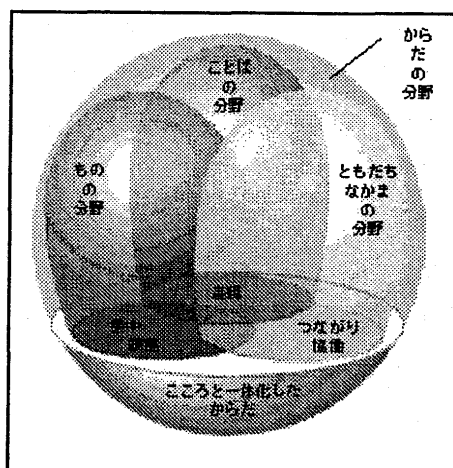
「ステージ」とは、個々の子どもの生活する姿をその子どもの生活の舞台（ステージ）としてそのままとらえていくもので、生活の中で行きつ戻りつしながら発達していく個々の子どもたちの生活を捉える指標である。以下の5つに分け、その5つをさらに大きく3つにくくり、子どもたちの生活を押さえている。

生活をとらえる指標 ステージ

ステージA	ステージB	ステージC	ステージD	ステージE
幼稚園の生活に出会い、その中で自分なりに安定していく	幼稚園での生活の仕方がわかり、安定して生活を広げていく	生活の中で関わりあいがある、心がゆれる	ともだちとの関わりが深まり、生活する楽しさを味わう	一人ひとりが充実してすごし、なかまと共に生活を創り出していく
出会い・安定のステージ		葛藤・探求のステージ	協力・創造のステージ	

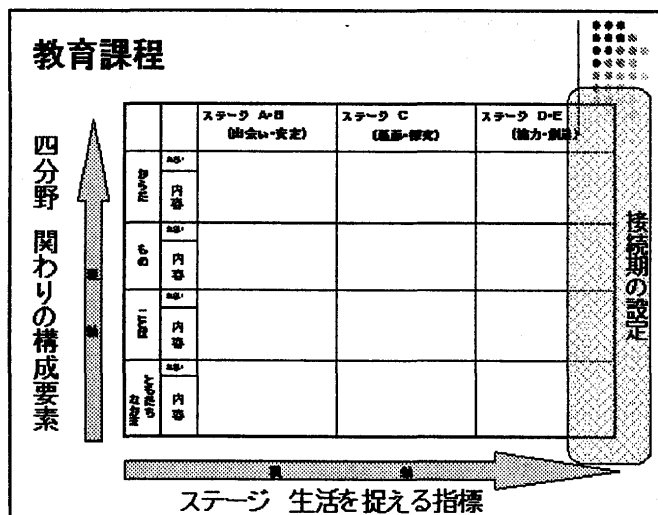
次に、「関わり」の起源、「関わり」の対象、「関わり」をつなぐものの3つの観点から、幼稚園生活の中の「関わりあい」を成り立たせている構成要素を探っていった。その中で浮かび上がってきたのが、「からだ」「もの」「ことば」「ともだち・なかま」の4つの視点である。

この4つ「からだ」「もの」「ことば」「ともだち・なかま」を幼稚園での実践を組み立てていく上での「保育分野」として位置づけ、日々の保育実践の中で繰り広げられている教育内容（教育要領に示されている5領域の内容）を分析・整理し、この4つの保育分野からとらえ直した。



幼稚園の生活は、4つの保育分野の内容が、相互に関連をもちながら織りなすものである。従って、4つの保育分野の内容は、教科のように並列してそれぞれに指導していくのではなく、入園から修了までの全生活を通して、幼児が主体的に体験・活動を選び取って積み重ねていく中で、総合的に指導していくものである。

4つの保育分野を意識して実践を重ね、その実践を省察していくなかで、4つの保育分野の関係を左図のように捉えることにした。心と体が密接に結びついている幼児期の発達特性から、「からだの分野」が土台になって、〈からだの安定〉（安心して自分らしく振る舞えるようになること）を基盤にして、「からだ」「も



の」「ことば」「ともだち・なかま」の内容を関連させながら育んでいこうとしている。

「ステージ」と保育分野の双方の考え方を結合させて、横軸にステージ、縦軸に4分野を配置して、本園の教育課程を編成した。

また、小学校への滑らかな接続を目指すとともに、幼稚園の仕上げの段階として、年長の後半を接続前期と位置づけ、「なかま」の分野を中核にすえ、実践を重ねている。

以下に示すものは、それぞれのステージにおける4分野のねらいをまとめたものである。このねらいのもと、教育内容を整理したものが、本園の教育課程である。

	出会い・安定のステージ (ステージA・B)	葛藤・探求のステージ (ステージC)	協力・創造のステージ (ステージD・E)	
からだ	<ul style="list-style-type: none"> 自分の気持ちを素直にからだで表現する からだを動かすと楽しいことを知る 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の気持ちとからだの感覚(能力)のずれを感じる 人と自分のからだの違いに気づく 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の気持ちとからだの調和がとれるようになる 心とからだで、人と呼応して関わることを楽しむ 	小 学 校 教 育
もの	<ul style="list-style-type: none"> 身の回りにあるいろいろなものと出会い、興味を持つ 	<ul style="list-style-type: none"> 迷ったり悩んだりしながら、ものとの関わりを深める 	<ul style="list-style-type: none"> ものとの関わりを通して、工夫し、生活を豊かにする 	
ことば	<ul style="list-style-type: none"> 自分の思いをからだやことばで表す 体験を通してことばと出会う 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の心の揺れをことばで表出する ともだちとの葛藤の場で、ことばを介して伝え合おうとする 	<ul style="list-style-type: none"> ことばに対する豊かな感覚をもつ 自分の思いを伝え、相手の思いを受けとめ、ともだちとのことばのやりとりを重ねる 	
なかま	<ul style="list-style-type: none"> 安心感を持ち、ともだちと一緒にいる心地よさを感じる 	<ul style="list-style-type: none"> ともだちとの関わりが深まる中で、自分との違いを感じ、ぶつかったり、悩んだりする 	<ul style="list-style-type: none"> それぞれが自分らしくありながら、共に生活する楽しさ・充実感を知る 	

2) 今年度の研究の重点

今年度は、先の研究開発(H13幼・小連携研究)における「関わりあって学ぶ」の、その先に生み出されていく「協働」ということをめざして実践を重ねてきた。5歳児後半(私たちは、この時期を「接続前期」ととらえている)における「協同的な活動」は、幼児教育の今日的な課題でもある。同じ「きょうどう」ではあるが、本学において12年間を通して「協働」という字を使っている。それは、関わりあう者の異質性を積極的に認め、その相互作用に重きを置いているからである。

「接続前期」のそれぞれの違いを生かしあうような充実した協働的な活動、協働的な学びが展開するためには、3歳児から何を大事にしてどのような保育を積み重ねていけばよいのか、今年度の実践事例をもとに、協働的な活動への道筋を明らかにすることに重点を置き、研究をすすめてきている。

(2) 小学校の教育課程と本年度の研究の重点

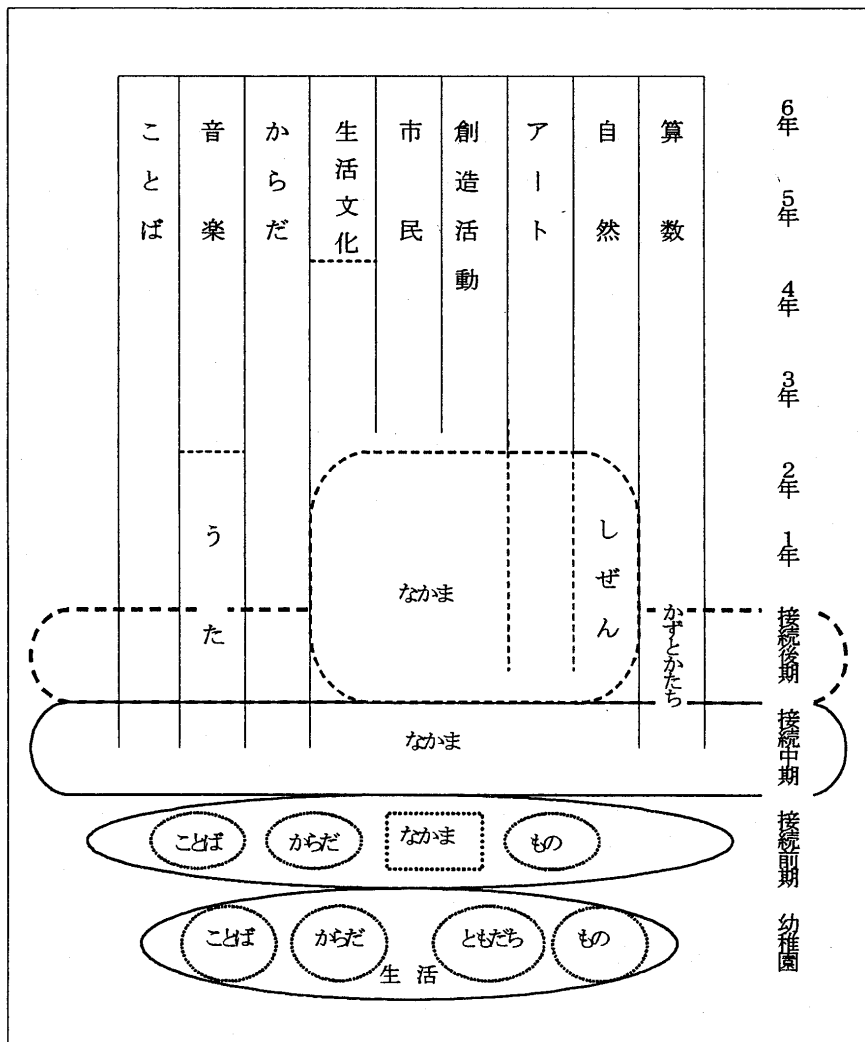
1) 小学校の教育課程表と運用図

実践している幼・小9年間の教育課程表は次の通りである。今年度の実際の運用図は下に掲げた。

幼3～5歳9月	ことば		もの		ともだち		からだ			総 時数
接続前期	ことば		もの		なかま		からだ			
接続中・後期	ことば		かずとかたち			なかま			からだ	253
小1 2／3学期	ことば 144		さんすう 96	しぜん 48	うた 32	なかま 132			からだ 72	528
小2	ことば 210		さんすう 175	しぜん 105	うた 52	なかま 192			からだ 105	839
小3～小4	ことば 175	市民 105	算数 175	自然 105	音楽 70	創造活動 175	アート 70		からだ 105	980
小5	ことば 175	市民 105	算数 175	自然 105	音楽 70	創造活動 140	アート 70	生活文化 70	からだ 105	1015
小6	ことば 175	市民 105	算数 140	自然 105	音楽 70	創造活動 175	アート 70	生活文化 70	からだ 105	1015

※1 単位時間は40分、時数は年間総時数。低学年までは時数配分せず、柔軟に運用している。

教育課程運用図



・この図は幼稚園の保育分野から積み上げる形で作られたものである。

・この図で示したのは、時間枠としての運用状況であり、個々の学習分野は相互に関わりあって展開される。

・接続中期は、子どもの生活に即して「なかま」を中核に据えて活動を展開する。

・接続中期以降も子どもの考えに寄り添った「なかま」の活動を行うが、「ことば」「かずとかたち」「うた」「からだ」は、この時期から分化して扱う時間も持つことを表している。

・低学年の「なかま」では、「しぜん」や「アート」のねらいを意識した活動も行われる。

・「創造活動」は、学年協力担任制により、子どもと担任教師が話し合って計画を練り、活動が創り出される。

2) 今年度の研究の重点

学校は集団で学ぶところである。子どもたちは、人との関わりの中で、自分の思いや考えを表現したり、他者の感情や考えに出会ったりしながら、学びを深め広げていく。ところが、子どもたちの実態を見してみると、人との関わりを面倒くさがる様子が感じ取れる。

人との関わりが希薄になってきている今こそ、協働的な学びが必要となってくる。そこで、「協働して学びを生み出す子どもを育てる」という研究主題を設定し、現実の問題に向き合いながら、今後の初等教育のあり方を追究しようとしている。

平成15年度までの3年間、文部科学省の研究開発学校の委嘱を受け、「関わりあって学ぶ力を育成する教育課程の研究開発」に取り組んだ。幼稚園と小学校の連携教育を中心にして、9年間の教育課程の見直し、新たに「接続期」を設けてカリキュラム開発をした。実践を通して見えてきた子どもたちの変容を踏まえて、保育分野と学習分野の「学びの概要」を作成した。それを受けて、今年度から「学びの概要」を中学校まで伸ばして、適時性と連続性を考慮した12年間のカリキュラム作りを進めている。

今年度の研究の重点は、次の通りである。

- 授業実践による子どもの「協働して生み出す学び」の検証
- 学習分野相互の関わり、中学校への接続に留意した学びの概要の整備

3) 主な研究内容

①「学習分野」研究 ～「教科」から「学習分野」へ～

これまでの「関わりあって学ぶ力」に焦点をあてた教育課程の編成において、新しく「学習分野」を立ち上げ、目標・内容・方法を子どもたちの学びに合わせて柔軟に組み立てるようにした。幼稚園と小学校のなめらかな接続に配慮し、ボトムアップ型の教育課程の編成を考え出したのである。

従来の「教科」という枠組みを思い切って取り払うことで、子どもたちの願いに応じて学習内容を選定し、一人ひとりの学びの道筋を重視しながら学習を展開できるようにした。

それは、他分野との関係を視野に入れる重要性を再認識することにもなった。同時に中学校の教科にどう接続するかという新たな課題を生むことにもなった。その成果の一端は、各学習分野が幼・小・中12年間の「学びの概要」として提案している。

②「学年」研究 ～学びの適時性・連続性の検証～

本校は長年にわたり、「学年協力担任制」および3年生以上の「教科担任制」を行ってきた。この考え方は、本校の授業の持ち方の隙間になりそうな部分を埋めて子どもの意識の流れを大事にしようとするものである。かつ一方では教師の専門性を最大限に生かし、子どもの連続した豊かな学びを支援しようとするものである。

今年度は学年担任が定期的に研究会議を開き、学習分野相互の関わりを明らかにしながら、それぞれの学年(年齢)に必要な学びを、その前後学年を視野に入れて探っている。その際に、例えば「コミュニケーションを楽しむ子どもを育てる」(2年)「表現が行き交う教室」(3年)のような学年の重点目標を設け、研究授業を繰り返しながら、子どもたちの育ちを見取ろうとしてきた。また、幼稚園および中学校との接続研究は、隣接する学年(1年・6年)が中心となって、接続を意識した学びの適時性・連続性の検証をしているところである。

(3) 中学校における教育課程と本年度の研究の重点

1) 教育課程の実際

ア 教育課程表および運用表

●●中学校 教育課程表（平成17年度）表中下段の数字は現行の学習指導要領による

	教 科											総 合	
	必修教科の授業時数										選択 教科 に 対 し て 授 時 数	総合 の 授 業 時 数	総 授 業 時 数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健 体育	技術・ 家庭	外国語	つなぐ			
第1学年	131 140	99 105	96 105	99 105	44 45	44 45	86 90	67 70	99 105	45 0	30	140	980
第2学年	96 105	99 105	96 105	99 105	34 35	34 35	86 90	67 70	99 105	45 0	60	165	980
第3学年	96 105	82 85	96 105	78 80	34 35	34 35	86 90	34 35	99 105	45 0	131 140	165	980
計	323 350	280 295	288 315	276 290	112 115	112 115	258 270	168 175	297 315	135 0	221 230	470	2940

本研究にあたっては教育課程を上のように構想している。本教育課程では、全体を「教科」と「総合」の2領域に分けた。「教科」領域は従来の必修教科、選択教科に、今後身につけさせたい資質能力を育む新教科を加えて構成する。「総合」領域は道徳・特活や総合的な学習の時間を包括するものとして捉え、「道徳・特別活動」、「総合Ⅰ」「総合Ⅱ」で構成し、時間割上は「総合カリキュラム」として運用している。（表2 運用表参照）

中学校においては、学習内容が専門的な分化へ向かう入り口であり、系統的な展開を行うため、教科領域の各区分については、小学校における学習分野と連携しながらも、教科として運用している。今年度は、幼・小連携研究で作成した「9年間の学びの概要」に続く中学校での3年間の内容を加え、「幼・小・中12年間の学びの概要」を作成した（p.45各分野・教科等における研究と学びの概要、およびp.76参照）。これにより、共通の視点で12年間の学びを考える土台ができ、連携カリキュラムの開発に向けて進み始めたと考えている。

実際の運用は、1単位時間を45分とし表2のような運用をしている。このうち、OWNは集中的な選択学習期間で、それぞれの学年で年間2回あり表中ではその合計週数を示している（③参照）。また、新教科（つなぐ科）については、本年度はまだ試行段階で、表2の中で第1学年の国語と数学の時間の一部を使って、メディア学習に関する内容について試行を始めたところで、時間割上はまだ位置付いていない。

表2

学 年	教 科											総 合			計
	国 語	社 会	数 学	理 科	音 楽	美 術	保 体	技 家	英 語	選 択		道徳 特活	総 合 I 学年総合	総 合 II 自主研究	
										選択	OWN				
1 年	5	3	3.5	3	1.5	1.5	3	2	3.5	0.7	2 週		3.6	1	31.3
2 年	3.5	4	3.5	3.5	1.5	1.5	3	2	3.5	0.7	3 週		3.6	1	31.3
3 年	3.5	3	4	3.5	1	1	3	2	4	1.7	4 週		4.1	0.5	31.3

2) 今年度の研究の重点

① 協働の視点、適時性・連続性への配慮をとり入れた授業づくり

今年度の授業における取り組みとしては、研究主題である「協働して学びを生み出す」生徒を育てる

視点や、学習内容・方法における「適時性・連続性」の視点を、積極的にとりいれた授業実践を行ってきた。「協働」の視点は各教科の授業などでも提案がなされ、実践を通して授業改善に結びついている。「適時性・連続性」については「12年間の学びの概要」を作成することにより、子どもたちがどのような学びを幼・小・中の12年間に行っているかが一覧でき、中学校での授業のあり方を再認識することができた。これら共通の視点で授業を研究していくことは、必然的にカリキュラムの連続性につながり、子どもたちにとっては、学校種が変わってもスムーズに移行していくことができると考えている。「12年間の学びの概要」は継続的に実践を進めることで検証していきたい。

② 小・中の接続期について

小・中の接続期における学習のあり方については、「学びの概要」から見えてくるものや、昨年度中学校で行った子どもたちの意識調査を参考に進めている。調査からは、小学校から中学校へ進学する段階での子どもたちにとって、ギャップや不安を強く感じる教科として、英語と数学があげられたが、実際に入学してみると、9割近い生徒が数学（算数）と理科について小学校と比べると授業が難しくなったと感じている（平成16年度本校研究協議会紀要参照）。

これらをふまえ、数学科などでは、接続期カリキュラムの設定を小学校の卒業期にかかるような時期にするよりは、中学校入学直後に実施する方が効果的であると考え、その時期の授業内容の検討を始めた。検討の視点は、連続性に重点を置いて進めている。また、他の教科においても、教科の特性を考慮しながら、小学校と連携し、合同授業の実施や小学生の活動に対するアドバイスを行うなどしながら接続期の設定を検討し、検証していくことになっている。この際に、各教科・学習分野における接続期は学年で一律に設定するのではなく、子どもの発達にあった形で設定したいと考えている。

③ OWNプランの取り組みと無学年制の試行

「OWNプラン」は、年間の一定期間において、生徒が教科選択をし、その学習内容に応じて授業時数も柔軟に設定し、「自分の時間割」をもって取り組むものである。「自分自身の必要性によって、学びの内容、場、時・順序、仲間などを自分で考えて設定できる学習形態」を、Open, What・When・Where・Whom, Needの頭文字をとって、OWNプラン（「自分自身」の意も含む）と名づけた。

OWNプランの学習集団は、学級単位ではなく生徒が作成した時間割によって、構成される生徒で形成される。つまり時間ごとにいっしょに学習するメンバーが異なり、選択課題では1つの講座を異学年の生徒が履修することもある。したがってOWNプランでは小学生の参加は違和感がない。小学生にとっては中学校での学習を体験する場面にもなる。平成17年11月に1学年において実施したOWNプランでは、試行的に1単位時間の授業に参加するにとどまったが、昨年度に引き続き附属小学校の6年生の児童が、中学生と一緒に授業を受けた。異年齢学習集団による良さや問題を探りつつ、学年の枠組みを超えて学び合う無学年制への展開を視野に入れつつ試行を進めたい。OWNの趣旨では、単に教科を選択して時間割を作るだけでなく、解決にかかる時間の見通しも持ちながら時間数を決定することも重要なポイントと考えている。今後は、企画段階から小・中両校で連携しながら、実施時期を検討しながら、内容・方法を含め自分の時間割をつくるよさを共有していきたい。

④ 新教科「つなぐ科」について

新しい時代に生きる子どもたちに必要な資質能力を身につけさせる観点から、コミュニケーション能力や協働的問題解決能力、表現とメディア活用能力、論理的思考力の育成などを目指した新教科を設置する方向で検討を始めた。本年度は国語と数学の一部の時間を使って、メディア学習や論理的批判的思考を生活題材（商品販促ポスター他）を用いることで、実生活とつなぎながら試行を進めつつ、全体の構想をまとめた。新教科の構想については101ページで述べる。

(4) 幼・小・小・中の接続期カリキュラム

1) 幼・小接続期カリキュラムの概要

「子どもたちが、これからの社会を生きていく上で、幼・小の接続の時期につけたい力とは何だろうか」「この時期に、教師がどう関わって、どんな子を育てていくのか」この問題意識のもとに平成13年度から幼・小合同の連携研究が始まった。幼稚園入園から小学校卒業までの9年間の連続した学びの姿を探り、子どもの発達に即したカリキュラム作りをした。

幼・小の連携研究の成果を整理すると、次のようになる。

① 接続期を設定したこと

接続期とは、幼稚園の年長後期から、1年生の1学期をひとまとまりの時期として、とらえたものである。この時期の子どもたちの間には、人との関係や周囲の環境が大きく変化するに伴って、さまざまな不安や期待、緊張が生じやすい。そこで、子どもたちの思いを教師がよりていねいに受け止め支えながら、主体的に学ぶ姿勢を育むことの重要性を認識して設定した。

接続期は、さらに細かく前期・中期・後期の三つに区分した。

○前期…幼稚園年長の10月～3月卒園

○中期…小学校入学～ゴールデンウィーク前

○後期…ゴールデンウィーク明け～7月

三期に分けたことで、今までの幼稚園・小学校の二分法では難しかったことが、協議しやすくなった。特に中期の活動は、内容や方法、環境等について、いっしょに考え実施した。さらに、互いに保育や学習を参観しあい協議を重ねる中で、次のような具体的手立てを講じてみた。

○保育室や教室の生活・学習環境の工夫

○小学校の時間枠の捉え方の工夫

○からだを使った活動の重視

② 保育・学習分野をおこしたこと

保育・学習分野とは、生涯を見通したときこの時期の子どもの成長に必要なことがらを、大きなカテゴリーで分類したものである。そこには適時的・連続的な要素が含まれている。分類の根拠には、幼児・児童の生活実態から生ずる問題点や社会的要請による教育課題、学問的背景などが挙げられる。

接続期の保育・学習分野の構成を、次のようにした。

◇接続前期 …「ことば」「もの」「なかま」「からだ」

◇接続中・後期 …「ことば」「かずとかたち」「なかま」「からだ」

接続前期・中期の保育・学習分野は、個々に取り出して指導するのではなく、さまざまな体験や活動の中で総合的に導かれるものである。子どもたちの活動は、各分野の内容に当たるものが複雑に絡まりあって展開される。接続後期になると、内容を深めたり、活動の質を高めたりするために、学習分野として取り出すことがらが多くなる。(39ページ、小学校教育課程運用図参照)

研究の最終目標は、幼・小双方の教育の目的の違いや独自性を大事にしつつも、子どもの発達を考慮しながら、なめらかに接続するカリキュラムをつくることにあった。活動内容や方法を明確にするとともに、子どもと教師の信頼関係、時間、空間といった環境構成のありようも大事だということを確認した。そして、接続期の各保育・学習分野の目標を整理し活動内容を吟味しながら、カリキュラムとして「学びの概要」を作成した(紙面の都合上省略)。今年度も該当学年が実践をくり返しながら、カリキュラムの修正を重ねている。

2) 小・中接続期カリキュラムの構想と初年度の研究

「小・中接続期カリキュラム」については、「H9小・中連携研究」の経験はあるものの実質的にこれから開発していくことになる。小中の接続期を考えていくためには、学級学年の生活面や生徒会活動などの連続性と、各分野・教科における学習面の接続と両面から、連続性と適切な段差のあり方を検討していく必要がある。

① 学習面の接続

【H16年度生への調査】

表1	楽しみ	不安
国語	3.7	3.9
社会	7.3	16.6
数学	12.8	30.1
理科	7.3	12.6
音楽	3.7	1.0
美術	6.4	1.9
保体	11.0	1.9
技家	6.4	4.9
英語	41.3	27.2

表2	あまり変わらない	少し難しくなった	とても難しくなった
国語	50.0	44.5	5.5
社会	31.8	55.5	12.7
数学	16.5	60.6	22.9
理科	11.0	53.2	35.8
音楽	60.0	33.6	6.4
美術	31.8	59.1	9.1
保体	39.4	57.8	2.8
技家	28.4	60.6	11.0
平均	33.7	53.1	13.2

左の表1・2は平成16年度の中学入学生について、「進学にあたって楽しみにしていた教科、不安に思っていた教科（表1）」と、「実際入学してどうだったか（表2）」を調査したものである。多くの子が「ついて行けるか不安だった」と答えており、特に数学や英語の数値が高かった。入学前にこうした不安を和らげ

るとともに、進学後は一人一人へのよりきめ細かな支援が大切になる。また、実際に入学後の印象もほとんどの教科で50%以上が「難しくなった」と感じており、特に理科と数学は約80%の子どもたちが難しくなったと感じていた。内容が高度になるので当然とも言えるが、「難しいけれどもおもしろい、理解できる」という反応になるようにしていきたい。さらに、来年度の接続に向けて、平成17年度小学6年生に調査した（5月に実施）結果では、次のように、やはり数学や理科で比較的高いが、現在の6年生は社会についてもやや不安意識が強い様子が見られる。

H17年度6年生	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保・体	技・家	英語
とても不安だ	9.4%	16.4%	39.1%	10.2%	6.3%	12.5%	11.7%	7.8%	20.5%
少し不安だ	39.8%	46.9%	30.5%	53.9%	34.4%	45.3%	46.1%	56.3%	38.9%
不安はほとんどない	50.8%	36.7%	30.5%	35.9%	59.4%	42.2%	42.2%	35.9%	40.9%

学習分野と教科の接続は、全教科で行うが、こうした状況をふまえるとき、少なくとも数学・理科については、他教科以上にその接続のあり方を意識していく必要がある。小・中接続期の学習面については、これらのデータをふまえ、また「協働して学びを生み出す子ども」を育てるという共通ビジョンも視野にいて、いくつかの教科で特に接続期を意識したプロジェクトを推進していくことが必要ではないか。学習面の接続については、「学びの概要（初年度案）」を見直していくとともに、相互の教師が授業を参観しあい、授業に参画し合うことを通して、各教科の授業レベルでの指導法等の接続を、進めていく必要がありそうだ。

② 生活面の接続

一方、小・中間の移行にともなう子どもたちの不適応への対応には、小学校と中学校の学校文化、特に教師の子どもへの接し方や、環境設計を含めて学校生活の支援のあり方を問い直すことが重要であると思われる。本年度、生活・学ぶ心のサポートWGが策定した「基本的生活力」の一覧を山椒氏つつ、子どもたちの自立（自律）や自治的な学校生活を進めていく力を育てる視点から、小中の学年・学級指導、学校行事等の運営、生活・生徒指導等を見直していくことで、接続カリキュラムを構築していきたい。

2. 各分野・教科等における研究と「学びの概要」

(1) 保育分野

1) 研究開発において設定した重点課題

① 協働について

- ・一人ひとりの特長や違いを活かして、認め合い、役割を担い合う集団の育ちを支える教師の働きかけと環境構成を明らかにする。

② 適時性・連続性について

- ・幼児の興味関心を広げ、深める活動内容と教師の働きかけを明らかにする。
- ・一人の幼児の中での経験の連続性・適時性を探る。
- ・幼稚園での子どもたちの「学び」の姿を認め、小学校以降へとつなげていくことが出来るようにする。

2) 重点課題の設定の理由

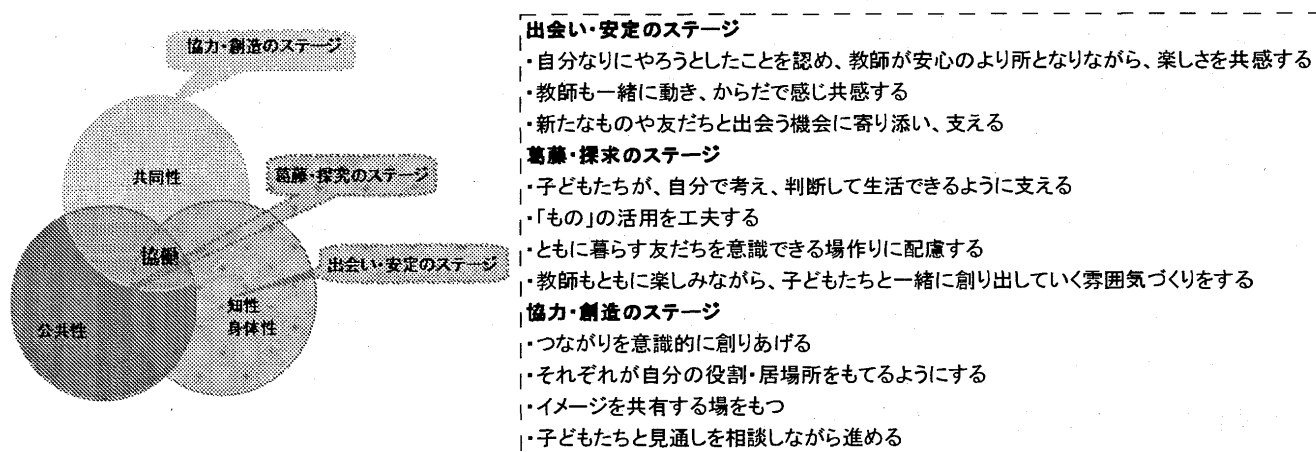
- ・協働的な関わりを生み出していくためには、教師が一人ひとりの子どもたちの発達の状況を見極め適切な環境を構成し、働きかけていくことが必要であると考えたため。
- ・一人ひとりの発達のありようが様々である幼稚園段階では、個々の子どもの経験の連続性・適時性をしっかり押さえていくことが、クラスや学年といった集団の育ちを考える上でも重要であると考えたため。
- ・幼稚園での経験が小学校以降へとつながっていく、ボトムアップの研究が望ましいと考えるため。また、平成13年度の幼小連携の研究で作成した学びの概要の見直しのため。

3) 課題達成に向けた研究の具体的な方法

- ・5歳児の保育内容の充実に努める。実践を丁寧に取り返し、次の実践に活かす。
- ・3・4歳児の保育実践を見直す。(事例研究・園内カンファレンス・外部講師の指導)
- ・幼児の遊びや生活の姿から、小学校以降へとつながる「学びの芽」を見だし、図式化する。

4) 17年度の研究成果

- ・研究の2つの柱である「協働」「適時性・連続性」については、H13年度の研究の方向性をさらに進化、発展させていくことで明らかにしていくことを確認した。
- ・実践事例を取り返し、協働の3つの資質・能力との関係を明らかにしながら、各ステージにおける教師の働きかけ、環境の構成の要点についてまとめ、実践に活かすようにした。



- ・幼稚園における子どもたちの様子から、小学校以降の学習分野につながるであろう学びの姿を、教育課程から見だし、「学びの芽」とした。幼稚園における「学び」の総合性を重視し、4つの保育分野（からだ・もの・ことば・ともだち／なかま）を視点に整理したものと、H13年度幼小連携研究で作成した学びの概要に照らし、学習分野ごとに分類したものと2種類作成した。4つの保育分野はどの学習分野ともほぼ総合的につながっていることが明らかになった。

5) 今後の課題

- ・各ステージの積み重ねを考慮した教師の働きかけ・環境構成の要点の整理。協働への道筋の明確化。
- ・幼稚園の「学びの芽」を各学習分野の「学びの概要」に活かすための小・中学校教師との連携。
- ・幼小連携での学びを小中連携に活かしていくための工夫。

(2) ことば・国語・英語

1) 研究開発において設定した重点課題

①協働について

協働して学びを生み出すときの「聞き手」の関わりに焦点を当てる。学習の中で、特に「聞いて応じて返す」営みに注目し、学びの姿を追究し授業づくりを工夫していく。

②適時性・連続性について

「聞いて応じて返す」営みには、発達段階によって、質的な変容が見られるであろう。応じる場面では、「理解」「分析」「判断」「再構成」など様々な思考が働き、思考力と切り離しては考えられない。小1から中3までの授業実践や実態調査を行うことで明らかにしていく。

2) 重点課題の設定の理由

コミュニケーション能力の育成の必要性が叫ばれ、表現する力をいかに伸ばすかが、いろいろな形で研究されてきている。一方で、コミュニケーションには、聞いてそれに反応したり言葉を返すことがなければコミュニケーションとして成立しない。それこそが協働の営みの土台（礎）となるものである。そこに焦点を当てて研究を進める。

3) 課題達成に向けた研究の具体的な方法

①「聞いて応じて返す」営みを学習の具体場面からすくい上げ、どのようなやりとりが見られるか考察する。同時に、協働の具体的な様相を見とり検証する。

②学年ごと（小1から中3）の「聞いて応じて返す」営みを支える諸能力の調査を行う。

4) 17年度の研究成果

H13幼小連携研究の幼稚園と小学校をつなげたことばの「学びの概要」から、中学校の国語・英語へのつながりを考えた「学びの概要」を作成した。小学校、中学校双方の立場から、必要なことばの力や活動要素を再度洗い直し、学年段階での重点指導項目を作った。

また、適時性、連続性の観点から「学びの概要」の区切れを再検討した。これまでの本学と附属の共同の語彙研究・音声言語指導研究の調査をふまえ、小4と小5の差が顕著で小5から中1までが一区切りの段階として考えられることから〈3～5才〉〈5才接続前期・中期〉〈接続後期1・2〉〈小3・4〉〈小5～中1〉〈中2・3〉という区切れを仮に設定し、連続性を考えていくことにした。

一年次の基礎データとして「聞く力」の調査を小3から中2で行った。分析、今後への活用は次年度の課題とする。また、中学校英語では、英語を使った協働という狭義の捉え方から一步広げて、英語の活動を通して協働を実践するという考え方のもとに研究を進めた。

5) 今後の課題

①小6から中1への接続期の時期（前期・中期・後期）や内容・方法等の検討。小学校ことばから中学校国語への接続カリキュラムを開発する。また、小学校ことばと中学校英語の接続を検討する。

②「聞く力」の調査結果の分析と授業やカリキュラムに生かす方策の検討。

③関係把握の力について英語の学習とのつながりも含め検討する。

④授業実践の中で協働する姿（応じる姿）を見とり、協働が深まるための方法や内容を探る。

(3) 市民・社会科

1) 研究開発において設定した重点課題

①協働について

子どもが価値判断や意思決定する場面を、授業の中で設定し、相手を説得する切実さを感じるように場面設定を工夫し、討論を中心にした授業を展開する。このような学習では、子どもたちの目的は、社会についての情報や知識を得ることではなく、これからの社会に対する自分の考えを分かってもらいたいことであり、自分の考えで友達を説得し、そのための根拠を得たいことになる。必然的に、子ども同士の関わりあいが生み出され、そこに協働する学びが生まれる。

②適時性・連続性について

小学校では、地理と公民の内容は、中学校のように明確には分けられない。5年生の「くらしと産業」は、地理的な内容と思われがちである。しかし、「工業生産の意味を考える」学習で工業の負の側面に目を向けてその是非を考え政治的に方策を考える公民的な学習になる。この小学校「市民」の考え方を、中学校でも盛り込んで学習を展開するのである。

歴史的な内容について、小学校では人物とそこから見える歴史的な景観を、中学校では時代の特色と因果関係を考えることを、それぞれ主なねらいにしている。内容は似ていても、それぞれのねらいと学び方において違いがあるので、「繰り返し学ぶ」意味がある。地理的な内容については、小学校の「提案する」、「経営的な視点」、「意思決定」などの視点を、中学校の都道府県やその他の地理的内容でも取り込んでいる。このようにすれば、その土地に暮らす人々の立場や、国土全体からの広い観点から考え、切実な気持ちを持って学習を深められると考えた。学び方でも類似していて連続性がある。

2) 重点課題の設定の理由

「公民的資質の基礎を養う」ことが小中一貫して社会科の目標である。しかし、公民という言葉に馴染みがないせいか「公民的資質」の意味が分かりにくい。そこで、次のように考えてみた。現代社会が抱える課題は価値観の相違によって、解決が困難になる問題が多い。それならば、今後必要とされる公民的資質とは、益々加速する社会や環境の変化に対する適切な社会的価値判断力や具体的な意思決定力と考えられる。この二つを、学校で優先的に養う「市民的資質」と定義し、重点化することにした。

3) 課題達成に向けた研究の具体的な方法

社会的価値判断力は、異なる価値観を知り、ぶつけあい、自分で判断し、視野を拓けることを繰り返すことによって伸びるだろうという仮説のもと、価値判断力や意思決定力を育てるためには、「教材および学習活動」を検討する上で、指導者が場面設定型授業を構想する。

4) 17年度の研究成果

中学校での地理的分野の学習（特に身近な地域の調査、都道府県の調査）では、地理的な見方や考え方に基づいて根拠を示すという意思決定・価値判断力の基本となる学習に取り組めた。

5) 今後の課題

①今後は、小学校の学習との関連を考慮しながら、とりわけ「経営的な視点」「意思決定」をどのように連続、発展させるか、おそびそのための場面設定の内容をどうするかが課題である。

②場面設定学習は、多面的な考え方があることを気づかせるが、それが社会的な価値判断力を伸ばしたかいなか検討が十分ではないまた、意思決定力をどのように評価し、判断するか、その基準についても一層検討したい。

③接続期の定義が曖昧な上、そこで連続して培いたい資質や能力、それを生かす学習形態や方法などを明らかにしたい。

(4) 算数・数学

1) 研究開発において設定した重点課題

①協働について

個の考えを深めるために、

- ・課題に対し、自分で見通しを持ち自分なりの考えで解決し、図や式、ことばで説明する。
- ・自分の考えと友達の考えを比較し、共通点や相違点を見つける。
- ・出された様々な解法の中から、課題場面に適したより良い方法を、話し合いを通して選び出し、数学的な考え方を見出す。

②適時性・連続性について

各発達段階に応じた、数学における論理的な思考を考えていきたい。

2) 重点課題の設定の理由

1) ①については、授業構成の中で以前から、個の考えを深めるために、集団で練り上げる場面を設定してきている。集団の大きさは、2人、4人、クラス全体、さまざまであるが、児童・生徒どうしの関わりを通して、友人の考え・友人の学び方を取り入れる柔軟さを培い、コミュニケーションの有効性に気づかせていきたい。

1) ②については、各発達段階に於いて使える手段は異なっているが、正しいと保証できていることを使って、新たな事柄が正しいと示すという論理の流れは変わらない。そういう観点で、発達段階にあった論理展開能力を探り、それにあった指導法を確認していきたい。

3) 課題達成に向けた研究の具体的な方法

重点課題を意識した研究授業を組み、子どもの変容の記録をとり、学びの概要を見直していく。

算数数学における12年間を通したカリキュラム「お茶の水カリキュラム」を創り、検証する。「12年間の学びの概要」はその基になるものである。

4) 17年度の研究成果

「12年間の学びの概要」ができた。領域間・学年間の指導内容の位置づけがより明確になった。

適時性の研究が進んだ。小中同時同教材の授業を、公開研究会で提案できた。さらに、子どもたちの意見を比較したい。

5) 今後の課題

- ・小中の「接続期プログラム」の具体的な授業作りをする。
- ・「12年間の学びの概要」を充実させるため、実践・検証する。

(5) 自然・理科

1) 研究開発において設定した重点課題

①協働について

子どもの「協働」を促進するための場の設定・特に異学年で学習するという学習形態の工夫。

②適時性・連続性について

適時性・連続性を考慮した化学分野の「学びの概要」を作成、実践する。

2) 重点課題の設定の理由

子どもたちの間に協働作用を生じさせるためには、指導者側の工夫が不可欠である。特に異学年が一緒に学習する形態の場合、上位学年の子どもにとってのメリットがわかりづらく「協働」となりにくい。そこで、異学年間の協働が生じる学習形態において、特に上の学年の子どもにとっての学びが見えれば、多様な子どもとの協働の重要性が明らかになることが期待される。

現行の学習指導要領を小学校・中学校で通してみると、いくつかの齟齬が見られる。そこで、小学校・中学校の自然・理科の授業における項目や学習する概念・スキルを見直し、適時性・連続性をふまえて学習内容を再構成することで、無理のないステップアップによって自然事象に対する興味・関心の持続や科学的概念の育成に効果があれば、この研究の意義は大きいといえる。

3) 課題達成に向けた研究の具体的な方法

- a 小中の自然・理科教員の定期的な会合とメールによる意見交換
- b 身につけさせたい知識や学び方を出し合い、一緒に検討した上で「学びの概要」を作成。
- c 小4と中1の合同授業の計画と実施

4) 17年度の研究成果

* 合同授業により学習動機の向上、知識観の変容などの「協働」作用が見られた

水が沸騰するときに見える泡の正体が、空気だと考えているという報告をもとに、本校の中学1年生で同様な調査をしたところ、ほぼ同じ結果が確認された。そのため、状態変化の学習において、それが水蒸気であることを理解できることを意識して授業を行っている。また、小中合同授業について、とくに上級学年である中学1年の生徒のモチベーションに関しての調査を行っており、現在その結果を集計中である。

* 適時性・連続性をふまえて小中の学習内容を再構成し、「学びの概要」を作成し一部実践できた。

複数の単元で学ぶことに共通した、大きなくくりでの概念をとらえ、「いろいろな物質の性質を調べること」「見えなくてもものは存在する」ことの二つの柱を考えることにつながった。現行の学習指導要領を、適時性・連続性の点で見直していくと、大きく3種類の改善点が見られ、それぞれに対する処方をしながら再構成することができた。

5) 今後の課題

○化学分野の「学びの概要」について実践を加えて改良する：

生物分野と地学分野についてのカリキュラムの再構成を行い、「学びの概要」を作成する。

○評価の策定： 特に生物分野については接続期を意識して作成する。

(6) うた・音楽

1) 研究開発において設定した重点課題

①協働について

「社会の一員として責任ある表現者」＝生涯音楽を愛好し、どんな人々（文化）をも差別せず、受けとめ認めることのできる表現者を育む。そのための学習形態・環境を工夫する。特に、多様な音楽表現を聴きあい、対話し、新たな学習への参加を促すような場を、12年間継続的に設定し、子どもの変容をみる。

②適時性・連続性について

幼児期 年少～年長前期	接続期 年長後期～小1 7月	低学年 ～小2	中学年 小3～小4	高学年 小5～6年2学期	接続期 6年3学期～中1前期	中学前期 ～中2前期	中学後期 ～中3後期
----------------	-------------------	------------	--------------	-----------------	-------------------	---------------	---------------

発達段階を考慮し、上記の区切りを考えた。また次の2点を大切に継続していくことにした。

- ・五感を通して感じる経験を積み重ねること
- ・表現の相互交流の場を積み重ねること

今年度は特に以下の点に絞って研究を深めることとした。

日本音楽を中心とした、12年間のカリキュラムを提案する。

音楽分野のプロとの出会い・交流が表現の質を高めると考え、適切な出会いの場を設定する。

2) 重点課題の設定の理由

「H9小・中連携研究」以降、「選ぶ・見通す・計画する・共感する・批判する・評価する」といった活動を、授業に多く取り入れてきた。しかし、生活力が弱まり幼くなったと言われる今の子どもに合っているのだろうか。参画・運営する能力が下がったという声もあり、学習活動や教師の働きかけが適切であったかを見直す必要がでてきた。教師間では、「よき聴き手」「からだで感じる子」を育てることが、豊かな表現者としての源だという共通認識を持った。そこで、日常の授業を具体的に振り返り、幅広く音楽を捉え（ミュージッキング）て、12年間を通したカリキュラムを新たに提案することにした。

3) 重点目標に向かっての研究の具体的な方法（今年度）

①授業を互いに参観し、そこで営まれる協働と、適時性、教師の働きかけを、つぶやきや感想、子どもの表情や教師のリフレクションから省察する。

②プロの方の演奏を聴き、その後の子どもの意欲や興味、変容を追う。

江戸囃子（2／3年）、五嶋みどりレクチャーコンサート、雅楽コンサート（5／6年）、三味線ワークショップ（中学生）等

③日本音楽に関する学習活動を今年度の実際を検証し、提案する。

4) 17年度の研究成果

①3名の教師が授業研究を行い、異なる分野の先生方も含め協議会を行い、多様な視点で授業を振り返ることができた。研究会に参加して下さった先生方からは、からだを通して育むという主張がビデオやワークショップで理解でき、共感するとの声を多くいただいた。

②プロの演奏を生で間近に聴き、演奏者の技だけでなく、その人を貫く姿勢を肌で感じとることができた。それは子どもの内的表現を揺さぶり、新たな問いや、なってみよう自分を生み出し、またより多様な表現を受けとめるからだをつくりだしたように感じる。

③日本音楽に関してはお茶の水モデルとも言える小中9年間の流れが確認できた。

5) 今後の課題

①幼～中に関わる教師の専門性を生かした交換授業や単元による異年齢交流授業を試みる。

②子どもの表現行動を継続して追い、責任ある表現者として欠かせない経験とは何かを明らかにする。

(7) アート・美術

1) 研究開発において設定した重点課題

①協働について

表現力を磨くためのコミュニケーションのあり方を考え、授業実践のなかでコミュニケーション能力を育む。

②適時性・連続性について

幼小中における連続したアート・美術の重点課題を明らかにし、個々の発達に適した造形要素の取り入れ方を工夫する。

2) 重点課題の設定理由

①協働について

アート・美術の教育は「もの」「こと」「場所」とのコミュニケーションを基盤に成り立つ。さらに「ひと」との関わりあいを通じて、「協働」意識が芽生える活動を仕掛け、コミュニケーション能力を育むことによって表現力を磨くことにつなげたい。

②幼小中における指導観の違いを明らかにした上で、個々の発達に適した造形要素との出会いや学びを実現させたい。

3) 課題達成に向けた研究の具体的な方法

①「ひと」との関わりあいを重視して進める造形表現活動を意識的に取り入れる。

グループ編成やその人数の変化による活動の変化も検証する。

②授業実践報告を通じて、互いの指導観の違いを明らかにする。

4) 17年度の研究成果

小中の指導観の違いが徐々に見えてきた段階である。小中互いに発達の特徴を伝え合う中で、その段階に適した造形要素の取り入れ方を工夫してきた。また、小中合同授業を行い、発達の違いを生かした学習を試みることができた。ただ、連携授業を行うにあたり、必然性のある年齢差や活動内容などは今後も検討していく必要がある。個々の適時性に関しては、アンケート調査や抽出児を決めるなど、さらに踏み込んだ研究姿勢が必要である。

5) 今後の課題

小1から中3までの9年間の学びの中で、同一要素で授業を組み、指導観の違いを具体を通じて明らかにするとともに、カリキュラム上に適時性として位置づけていく。

【同一要素のテーマ案】

①自分を見つめる ②生活をデザインする ③共同の表現（協働する場）

(8-1) からだ・保健体育(体育)

1) 研究開発において設定した重点課題

①協働について

今年度は、幼・少・中の3校種が連携するにあたり、それぞれの校園が抱える子ども達の身体に関する問題点について話し合うことから出発した。その結果、保健体育(体育)にとって、協働とは「一人一人の違いが相互に作用し合い、葛藤場面を超えて新しい学びを創造すること」と捉え研究を進めることとなった。

②適時性・連続性について

これまでに実践してきた学習単元をスパイラルな学習が必要な学習単元と積み重ねが必要な学習単元に整理し、より効果的な学びの系統性を明らかにする。そして、学校種間・学年間のスムーズな移行や適切な段差について考えたい。また、内容分野としては、身体接触に焦点をあてながらすすめることとした。

2) 重点課題の設定の理由

これまでの「関わり合って学ぶ」という実践研究を活かして、さらに創造的な力が育つような実践を行いたい。

3) 課題達成に向けた研究の具体的な方法

異学年や異質な集団による学習場面を設定し、特に身体接触をとまなう種目を各発達段階に応じて取り上げて実践研究をする。今年度は各学校園の実践を振り返り、各教材の有用性を検証しながら幼・小・中12年間の系統性を明らかにする。

4) 17年度の研究成果

まず、年度当初より、3校園で協力し行ってきた公開保育や研究授業で相互の交流を図り、園児・児童・生徒の様子や指導に関わる担当教員の環境をみることができた。これは研究を進める上でとても大切なことであり、各担当教員の相互理解を作る基盤ができたといえる。

その上で、幼稚園から小学校中学校の接続を考えた「学びの概要」を作成した。この「学びの概要」では、育てたい資質能力を「生涯にわたって進んで健康な体作り、運動を楽しもうとする態度・技能を育てる」とした。また、めざしたい子ども像も、明確にすることができた。

小学校の研究授業後の話し合いでは、授業全般の中で、お互いに補助し合うなどの活動から、他者と協調し協力して取り組む事は出来ていたが、技能を学習する場面では、年齢的に時期尚早ではないかという意見も出された。中学校研究授業後の話し合いでは、体育大会で各学年で扱う種目の協働場面や適時性についてその妥当性が問われた。それぞれ、各種目の適時性を明確にしながら、12年間の各教材の系統性を再考するために有効な話し合いとなった。

5) 今後の課題

①17年度(本年度)

各学校園段階での教材開発と学習方法

②18年度

1年目の成果を踏まえ、教材の修正や改善を行う。

③19年度

幼稚園・小学校・中学校(高校)までの間に、効果的な学習内容や時期、学習の積み重ね方を仮説的に提示する。

(8-2) からだ・保健体育（保健）

1) 研究開発において設定した重点課題

①協働について

保健分野にとって、協働とは「一人一人の違いが相互に作用し合い、みんなと創ること」と捉え、子どもの心の育ちや心の健康が協働の学びを創り出すという仮説を立て研究を進めることになった。

②適時性・連続性について

これまでに実践してきた学習単元をスパイラルな学習が必要な学習単元と積み重ねが必要な学習単元に整理し、より効果的な学びの系統性を明らかにする。そして、学校種間・学年間のスムーズな移行や適切な段差について考えたい。

2) 重点課題の設定の理由

これまでの「関わり合って学ぶ」という実践研究を活かして、さらに創造的な力が育つような実践を行いたい。特に保健分野では、子どもたちの実態を踏まえ、より豊かな人間関係を創り出す必要があると考え、心の健康に焦点を当てることにした。

3) 課題達成に向けた研究の具体的な方法

①今年度は各学校園の実践を振り返り、幼・小・中12年間の系統性を明らかにする。

②中学校で先行している「心の健康」の授業実践を小学校で試行し、「心の健康」の単元の適時性や小中連携プログラムの開発を行なう。

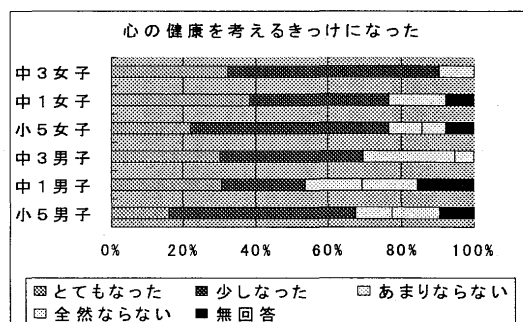
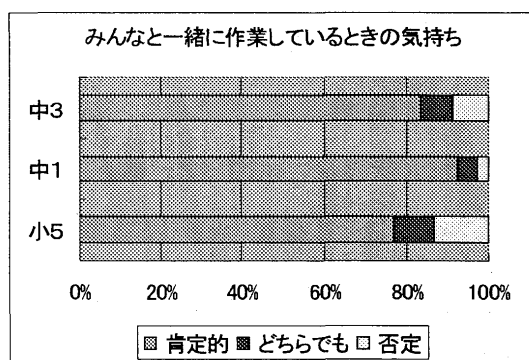
4) 17年度の研究成果

①幼小中での心に関わる保育・学習内容を系統的にまとめ、「学びの概要」を作成した。

②コラージュワークを組みこんだ授業プログラムは一昨年度は中学3年生で、昨年度は1、2年の自由選択で実施した。コラージュは心理療法の一つであるが、授業では、コラージュという作業を体験することで得られる心の解放や、自分のコラージュの作品に対する他者からの言葉かけから得られる心地よさを体験し、リラックスする脳の仕組みについて学習することをねらっている。今回、指導の適時性を考えるためにこの授業プログラムを小学校5年、中学1年生に実施し、授業後のアンケートで、適時性を明らかにしようと試みた。その結果以下のようなア。「授業をみんなと一緒に作業している時の気持ち」は、肯定的な感想が小中学生とも7割を超え、コラージュの授業はどの学年でも受け入れられることがわかった。イ。「この授業が心の健康を考えるきっかけになったか」では、学年が上がるにつれ増え、かつ女子の方が高いという性差が対象学年のいずれでも顕著になった。今後結果を踏まえ、更に実施学年や内容等を検討していくことが課題である。

5) 今後の課題

幼稚園・小学校・中学校（高校）までの間に、効果的な学習内容や時期、学習の積み重ね方を仮説的に提示できる様に、1年目の成果を踏まえ、教材の修正や改善を行っていきたい。



(9) 生活文化・技術家庭

1) 研究開発において設定した重点課題

①協働について

関わり合う中で協働の意味をつかみ、生活課題解決の力を養う

②適時性・連続性について

主体的に生活をつくる為のミニマムエッセンシャル・ライフスキルと選ぶ目を育てる指導内容の開発

2) 重点課題の設定の理由

生活文化・技術家庭の学びは、生徒が生活に生かしてこそ意味がある。生活は個人や家庭内に留まっているのではなく、社会との関わりの中で考える視点が必要である。自分を取りまくものと関わりながら、生き方につながる学びを支える知識・知恵・技と選ぶ目を育てる指導内容を開発したいと考えるから。

3) 課題達成に向けた研究の具体的な方法

- ・実態調査、授業後調査
- ・授業実践、評価（協議）

4) 17年度の研究成果

①調理実習後に実施した調査の自由記述から、協働の姿が伺えた。

ア、小学校（2005年7月・9月、5・6年225名）

- ・自分ができるときをし、また時に、お互い譲り合えた
- ・人の安全をお互い記にしながら調理できた
- ・1人では大変なことも、みんなといっしょだとできる
- ・仲間の中で自分の考えをはっきり言えるようになった

イ、中学校（2005年10月、2年34名）

- ・1人に頼らないで全員で考えてやるようになった
- ・授業（調理実習）を重ねる毎にコツが分かりより協力の輪も広がった
- ・話を聞くようになり、人のいいところ（調理の腕など）を取り入れるようになった
- ・自分が何をしたら他の人が動きやすいかを考えるようになった

②実態調査（2005年10月、小5・6年252名、中2131名）から適時性を読みとる要因が伺えた。

一例を述べると、

- ・ブレーカーが下り、戻した体験があると答えた小学生は37%、中学生は56%
- ・買い物をするときに表示を読んで選ぶのは、小学生25%、中学生33%

身体の発達（身長が高くなる）などを意識した指導内容や、社会のニーズに対する応えるなどが見えてきた。さらなる実態調査の必要性を感じた。

③研究授業の実践

小学6年 2005年4月「くつ下で校内を歩いてみると」

中学2年 2006年1月「ミニマムエッセンシャル卵料理」

5) 今後の課題

- ・児童生徒が学びを日々の生活に生かし、実践を促す手だての検討
- ・ミニマムエッセンシャル・ライフスキルを児童生徒の主体的な学びにするための教材開発

(10) 【幼・小・中12年間の学びの概要】

1) 幼稚園・保育分野

幼児期に見られる学びの芽

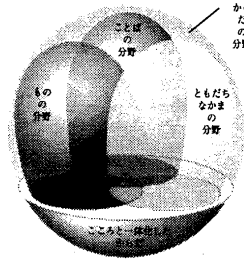


4つの保育分野を視点にした総合的な捉え

- 園内の環境(季節)を充分活かして遊ぶ
- 動植物をいたわり、その命の大切さを実感する。
- ものごとに関心をもち、探究・追究
- 自然に親しむ中で、その不思議さ・美しさを!
- ものの性質、量感、形などを感じる
- ものの性質を活かし、遊びに取り入れる
- ものを活用し、イメージを形にする
- ものを大切に扱う
- 体験したことを再現する
 - 生活に必要な習慣を身につける
- からだで関わりあう
- 自分の気持ちと体の調和がとれる
- イメージを共有する
- からだで音やリズムを感じる
- 力を出し切る
- からだを使って繰り返し取り組む
- イメージを動きで表現する
- からだの感覚が自分のものとなってくる

- ▲人の話をよく聞く(聞く姿勢)
- ▲聞いたことを理解する
- ▲ことばで聞いたことを想像する
- ▲ことばのもつリズムや面白さを実感する
- ▲身の回りの文字・数字に親しみ、生活の中で必要に応じて使う

- ▲自分の考えや思いをことばで表現する
- ▲わからないことを人にたずねる
- ▲内容に応じたことばのやりとりをする
- ▲相手に分かるように話す



- ◆自分とは違うともだちの思いに気付く
- ◆ともだちとアイデアを出し合いながら遊びを充実させる
- ◆ともだち一人ひとりの持ち味・興味・関心の違いを認め合う
- ◆役割を担い、人の役にたつ喜びを感じる
- ◆気持ちを合わせてなかまと共に一つのことに取り組む
- ◆決まりの大切さに気付き、守る
- ◆ルールのある遊びを楽しむ
- ◆ともだちと呼吸をあわせる(リズムを感じる・一緒に動く・一緒にうたう)

■ からだの分野 ● ものの分野
▲ ことばの分野 ◆ ともだち・なかまの分野

幼児期に見られる学びの芽



学習分野・教科を見通した捉え

自然・理科

- からだを使って繰り返し取り組む
- 園内の環境(季節)を充分活かして遊ぶ
- 自然に親しむ中で、その不思議さ・美しさを!
- 動植物をいたわり、その命の大切さを実感する
- ものごとに関心をもち、探究・追究
- ものの性質、量感、形などを感じる
- ものの性質を活かし、遊びに取り入れる
- ものを活用し、イメージを形にする
- ものを大切に扱う

かずとカタチ・算数・数学

- ものごとに関心をもち、探究・追究
- 自然に親しむ中で、その不思議さ・美しさを!
- ものの性質、量感、形などを感じる
- ものの性質を活かし、遊びに取り入れる
- 身の回りの文字・数字に親しみ、生活の中で必要に応じて使う
- ともだち一人ひとりの持ち味・興味・関心の違いを認め合う

市民・社会

- からだの感覚が自分のものとなってくる
- ものごとに関心をもち、探究・追究
- 自然に親しむ中で、その不思議さ・美しさを!
- 自分の考えや思いをことばで表現する
- ▲わからないことを人にたずねる
- ◆ともだち一人ひとりの持ち味・興味・関心の違いを認め合う
- ◆ともだちと呼吸をあわせる(リズムを感じる・一緒に動く・一緒にうたう)

からだ・保健体育

- イメージを共有する
- からだで関わりあう
- 自分の気持ちと体の調和がとれる
- イメージを動きで表現する
- からだの感覚が自分のものとなってくる

ことば・国語

- ▲内容に応じたことばのやりとりをする
- ▲聞いたことを理解する
- ▲ことばで聞いたことを想像する
- ▲ことばのもつリズムや面白さを実感する
- ▲身の回りの文字・数字に親しみ、生活の中で必要に応じて使う

音楽

- からだを使って繰り返し取り組む
- からだの感覚が自分のものとなってくる
- イメージを共有する
- からだで関わりあう
- 自分の気持ちと体の調和がとれる
- イメージを動きで表現する
- からだの感覚が自分のものとなってくる

生活文化・技術家庭

- からだを使って繰り返し取り組む
- からだの感覚が自分のものとなってくる
- イメージを共有する
- からだで関わりあう
- 自分の気持ちと体の調和がとれる
- イメージを動きで表現する
- からだの感覚が自分のものとなってくる

アート・美術

- からだで関わりあう
- からだを使って繰り返し取り組む
- 自分の気持ちと体の調和がとれる
- からだの感覚が自分のものとなってくる
- イメージを動きで表現する
- ものごとに関心をもち、探究・追究
- 自然に親しむ中で、その不思議さ・美しさを!
- ものの性質、量感、形などを感じる
- ものの性質を活かし、遊びに取り入れる
- ものを活用し、イメージを形にする
- ▲自分の考えや思いをことばで表現する
- ▲人の話をよく聞く(聞く姿勢)
- ◆自分とは違うともだちの思いに気付く
- ◆ともだちとアイデアを出し合いながら遊びを充実させる
- ◆ともだち一人ひとりの持ち味・興味・関心の違いを認め合う

アート・美術

- からだで関わりあう
- からだを使って繰り返し取り組む
- 自分の気持ちと体の調和がとれる
- からだの感覚が自分のものとなってくる
- イメージを共有する
- からだで関わりあう
- 自分の気持ちと体の調和がとれる
- イメージを動きで表現する
- からだの感覚が自分のものとなってくる

■ からだの分野 ● ものの分野
▲ ことばの分野 ◆ ともだち・なかまの分野

2) ことば・国語・英語

① ことば・国語

目標 人との多様な関わりの中で思いや考えを伝え合い創り出す力を養う。
思考力や想像力及び豊かな言語感覚を養う。
日本語の持つやさしさやおもしさを体験し、ことばを大切にすることを養う。

ことばの力			他者と関わり、伝え合い協働する				ことばで感じる・想像する				ことばで考える				ことばを楽しむ			
学習の場	3,4,5才	5才後継前・中期	5才後継後期	3～4年	小5年～中1年	中学2～3年	小学校帰国	中学校帰国	小学校帰国	中学校帰国	小学校帰国	中学校帰国	小学校帰国	中学校帰国	小学校帰国	中学校帰国		
「協働して学び生き生きと出す子どもの姿」 養育・能力	他者の話を聞いてたり、他者と話したりすることを楽しむ	人の話をよく聞く。相手に分かるように話す内容に合ったことばのやりとりをする。わからないことを人にたずねる。	話されたことの意味を考えながら最後まで聞く	自分の言いたいことを伝える	自分の言いたいことを伝える	自分の言いたいことを伝える	自分の言いたいことを伝える	自分の言いたいことを伝える	自分の言いたいことを伝える	自分の言いたいことを伝える	自分の言いたいことを伝える	自分の言いたいことを伝える	自分の言いたいことを伝える	自分の言いたいことを伝える	自分の言いたいことを伝える	自分の言いたいことを伝える		
「協働して学び生き生きと出す子どもの姿」 養育・能力	知ることを楽しむ	ことばで関わることを想像する。物事の因果関係や思い、様子を、自分と他者の思いに気づく。	ことばを受け止め、様子や気持ちを思い浮かべる。	相手の状況や気持ちを思い浮かべる。	相手の状況や気持ちを思い浮かべる。	相手の状況や気持ちを思い浮かべる。	相手の状況や気持ちを思い浮かべる。	相手の状況や気持ちを思い浮かべる。	相手の状況や気持ちを思い浮かべる。	相手の状況や気持ちを思い浮かべる。	相手の状況や気持ちを思い浮かべる。	相手の状況や気持ちを思い浮かべる。	相手の状況や気持ちを思い浮かべる。	相手の状況や気持ちを思い浮かべる。	相手の状況や気持ちを思い浮かべる。	相手の状況や気持ちを思い浮かべる。		
「協働して学び生き生きと出す子どもの姿」 養育・能力	ことばに興味を持って考える	ものごとに関心をもち、探求・追求する。関心したことばを理解する。自分の考えや思いをことばで表現する。	疑問を持ち、順序や構造的なわけを確かめようとする。	ことばの働きを知り、順序や筋道を、事柄のつながりや因果関係を考えられる。	ことばの働きを知り、順序や筋道を、事柄のつながりや因果関係を考えられる。	ことばの働きを知り、順序や筋道を、事柄のつながりや因果関係を考えられる。	ことばの働きを知り、順序や筋道を、事柄のつながりや因果関係を考えられる。	ことばの働きを知り、順序や筋道を、事柄のつながりや因果関係を考えられる。	ことばの働きを知り、順序や筋道を、事柄のつながりや因果関係を考えられる。	ことばの働きを知り、順序や筋道を、事柄のつながりや因果関係を考えられる。	ことばの働きを知り、順序や筋道を、事柄のつながりや因果関係を考えられる。	ことばの働きを知り、順序や筋道を、事柄のつながりや因果関係を考えられる。	ことばの働きを知り、順序や筋道を、事柄のつながりや因果関係を考えられる。	ことばの働きを知り、順序や筋道を、事柄のつながりや因果関係を考えられる。	ことばの働きを知り、順序や筋道を、事柄のつながりや因果関係を考えられる。	ことばの働きを知り、順序や筋道を、事柄のつながりや因果関係を考えられる。		
「協働して学び生き生きと出す子どもの姿」 養育・能力	ことばのおもしろさを楽しむ	ことばの持つリズムや面白さを実感する。友だちと呼吸を合わせられる。	話することや、ことばの心地よさをリズムを楽しむ。	ことばを相手に使って、相手とつながることができる。	ことばを相手に使って、相手とつながることができる。	ことばを相手に使って、相手とつながることができる。	ことばを相手に使って、相手とつながることができる。	ことばを相手に使って、相手とつながることができる。	ことばを相手に使って、相手とつながることができる。	ことばを相手に使って、相手とつながることができる。	ことばを相手に使って、相手とつながることができる。	ことばを相手に使って、相手とつながることができる。	ことばを相手に使って、相手とつながることができる。	ことばを相手に使って、相手とつながることができる。	ことばを相手に使って、相手とつながることができる。	ことばを相手に使って、相手とつながることができる。		
「協働して学び生き生きと出す子どもの姿」 養育・能力	ことばの思いや考えを伝え、相手の思いや考えを知り、互いの良さを活かす。	ことばの思いや考えを伝え、相手の思いや考えを知り、互いの良さを活かす。	ことばの思いや考えを伝え、相手の思いや考えを知り、互いの良さを活かす。	ことばの思いや考えを伝え、相手の思いや考えを知り、互いの良さを活かす。	ことばの思いや考えを伝え、相手の思いや考えを知り、互いの良さを活かす。	ことばの思いや考えを伝え、相手の思いや考えを知り、互いの良さを活かす。	ことばの思いや考えを伝え、相手の思いや考えを知り、互いの良さを活かす。	ことばの思いや考えを伝え、相手の思いや考えを知り、互いの良さを活かす。	ことばの思いや考えを伝え、相手の思いや考えを知り、互いの良さを活かす。	ことばの思いや考えを伝え、相手の思いや考えを知り、互いの良さを活かす。	ことばの思いや考えを伝え、相手の思いや考えを知り、互いの良さを活かす。	ことばの思いや考えを伝え、相手の思いや考えを知り、互いの良さを活かす。	ことばの思いや考えを伝え、相手の思いや考えを知り、互いの良さを活かす。	ことばの思いや考えを伝え、相手の思いや考えを知り、互いの良さを活かす。	ことばの思いや考えを伝え、相手の思いや考えを知り、互いの良さを活かす。	ことばの思いや考えを伝え、相手の思いや考えを知り、互いの良さを活かす。		

言葉で学び生き生きと出す子どもの姿・能力		他者と関わり、伝え合い協働する				ことばで感じる・想像する				ことばで考える				ことばを楽しむ					
聴取	応答	応答	主張	発表	調整	想像	感受	想像	共通	転換	史料	調整	比較	分類	再構成	調和	創作	ユーモア	転換
小学校帰国	相手の話の中心を聞き取り、自分なりの考えをもつて聞く	適切に答えたたり質問をしたりする	自分の思いや考えを分かり易く伝える	状況に依って工夫しながら話す	自分のいる場へ気づく	日本語の表現や生活様式などを感じ取る	様子や気持ちを思い浮かべる	相手の状況や物の気持ちを理解する	視点や立場を考慮して考える	読点や立脚点を考慮して考える	読点に沿って理解する	ことばの働きを知り、語と語、文と文、文章の論理をつかみ、理解する				自他の思いや考えの異同を知り、互いの良さを調べる	自分の思いや考えを自分のことばで表す	ことばの楽しみや考え、自分と他者の差を分かちあうことができる	増に応じて自らの生活に生かすことができる
中学校帰国	話しの中心を聞き取り、共通点や相違点を考える	賛成反対など立場を明らかにし、理解できず応答する	相手の主張を自分の考えを主張する	相手の主張を明らかにし、自分の文意で表現できる	目標をしっかりと達成までの課題を整理し、課題の達成の道筋を考へる	自他の良さを認めあう	ことばの美しさや、語彙の豊かさを意識的にイメージする	相手の状況、様子や気持ちを思い浮かべる	相手の状況や立脚点を考慮して考える	視点や立脚点を考慮して考える	読点に沿って理解する	共通点や相違点を明らかにし、理解を深める	ものごとを順序立てて考える	ものごとを順序立てて考える	目的に応じて言い換えてみる	言語や文化の違いを認識し、互いの良さを調べる	自分のことばで表現したり、協同して作り出す	増の雰囲気や気持ちを和らげたり、明るく表現したり、表現の仕方を生かす	増の雰囲気や気持ちを和らげたり、明るく表現したり、表現の仕方を生かす

言語生活	声で伝えあう、関わり合う	絵や文字で表す、伝える	読んで楽しむ	文字	ソーシャルスキル
3 4 5 接続前期	自分の考えや思いをことばで表現する ともなちとアイデアを出し合いながら遊びを充実させる わからないことを人にたずねる	体験したこととを再現する 生活の中で必要に応じて書いて伝える	絵本やお話を楽しむ	身の回りの文字に親しむ	気持ちと身体 の調和 がとれる
言語生活	ことば遣い	対話 対話 対話	スピーチ スピーチ スピーチ	プレゼン プレゼン プレゼン	ディスカッション ディスカッション ディスカッション
接続中後期 1～2年	気持ちよくことばを交わ せる	相手や簡単なわけを伝 える	見たいこと、気づいたこと、書いて伝えることを楽し む	文字の音 や読み方、 書き方を知 り、正しく身 につける	自分の気 持ちはこと ばで伝えら れる。あい さつを交わ せる。
3～4年	場に応じた 話し方を意 識する	相手の話 をきくと分 かるように 伝える	話したい ものの中心 がわかるよ うに伝える	構子や状 況がわか るように、 具体的に 記す	他の気持 ちを考え る。まわり と協調して 対話でき る。
言語生活・言語文化	ことば遣い	対話 対話 対話	スピーチ スピーチ スピーチ	プレゼン プレゼン プレゼン	ディスカッション ディスカッション ディスカッション
小5年～中1年	相手の受 け止めの考 え、場に応 じた話し方 をきくと分 かるように 伝える	相手の思 い、場に応 じた話し方 をきくと分 かるように 伝える	相手の思 い、場に応 じた話し方 をきくと分 かるように 伝える	相手の思 い、場に応 じた話し方 をきくと分 かるように 伝える	相手の思 い、場に応 じた話し方 をきくと分 かるように 伝える
中2～3年	相手の受 け止めの考 え、場に応 じた話し方 をきくと分 かるように 伝える	相手の思 い、場に応 じた話し方 をきくと分 かるように 伝える	相手の思 い、場に応 じた話し方 をきくと分 かるように 伝える	相手の思 い、場に応 じた話し方 をきくと分 かるように 伝える	相手の思 い、場に応 じた話し方 をきくと分 かるように 伝える

言語生活	声で伝えあう、関わり合う	絵や文字で表す、伝える	読んで楽しむ	文字	ソーシャルスキル
小学校編成	自分の考えや思いをことばで表現する ともなちとアイデアを出し合いながら遊びを充実させる わからないことを人にたずねる	体験したこととを再現する 生活の中で必要に応じて書いて伝える	絵本やお話を楽しむ	身の回りの文字に親しむ	気持ちと身体 の調和 がとれる
言語生活	ことば遣い	対話 対話 対話	スピーチ スピーチ スピーチ	プレゼン プレゼン プレゼン	ディスカッション ディスカッション ディスカッション
小学校編成	自分の考えや思いをことばで表現する ともなちとアイデアを出し合いながら遊びを充実させる わからないことを人にたずねる	体験したこととを再現する 生活の中で必要に応じて書いて伝える	絵本やお話を楽しむ	身の回りの文字に親しむ	気持ちと身体 の調和 がとれる

言語生活	声で伝えあう、関わり合う	絵や文字で表す、伝える	読んで楽しむ	文字	ソーシャルスキル
中学校編成	自分の考えや思いをことばで表現する ともなちとアイデアを出し合いながら遊びを充実させる わからないことを人にたずねる	体験したこととを再現する 生活の中で必要に応じて書いて伝える	絵本やお話を楽しむ	身の回りの文字に親しむ	気持ちと身体 の調和 がとれる
言語生活	ことば遣い	対話 対話 対話	スピーチ スピーチ スピーチ	プレゼン プレゼン プレゼン	ディスカッション ディスカッション ディスカッション
中学校編成	自分の考えや思いをことばで表現する ともなちとアイデアを出し合いながら遊びを充実させる わからないことを人にたずねる	体験したこととを再現する 生活の中で必要に応じて書いて伝える	絵本やお話を楽しむ	身の回りの文字に親しむ	気持ちと身体 の調和 がとれる

②中学校外国語（英語）

中学校外国語(英語)科 学びの概要

中学校 外国語 (英語)科	実践的コミュニケーション能力の基礎を養う			言語や文化にたいする理解を深める	
	外国語に慣れ親しみコミュニケーションを図る				
	積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を身につける	・話し手の意向などを理解する ・書き手の意向などを理解する	・自分の考えなどを話す ・自分の考えなどを書く	外国語(英語)を通して、言葉のルールや働き、また、言葉の果たす役割を考える [ことばと思考]	多様なものの見方考え方を理解し、それらを尊重する態度を身につける
言語活動とそれを支える言語材料(言語知識・言語文化)					
・言語材料について練習する ・具体的な場面や状況に合った表現で言語活動を行う ★挨拶と日常会話 ★ファーストフード店で ●天気予報 ●買い物 ●道を尋ねる ●電話での応答 ◆体調について ◆切符の買い方 ◆路線の乗り換え	<聞くこと> ①②③④ ・基本的な音声の特徴をとらえる ・具体的な内容や大切な部分を聞き取る ・質問や依頼などに応じる ・聞き返す ★電話番号を聞く(1) ●機内放送を聞く(4) ●スピーチを聞く、読む ◆英語の聞き違い(3)	<読むこと> ⑥⑦⑧⑨⑩ ・文字や符号を識別する ・熟読や音読をする ・あらすじや要点を読み取る ・伝言や手紙での対応をする ★インターネットで外国について知る(6) ★物語を読む(Reading) ●物語の脚本を読む(11) ●伝記を読む(11) ●物語を読む(Reading) ◆インターネットで検索(1) ◆伝記を読む(6) ◆新聞記事を読む(7) ◆名作を読む(8)	<話すこと> ①②③④ ・基本的な音声の特徴に慣れる ・自分の考えや気持ちを話す ・問答したり意見を述べ合う ・つなぎ言葉を用いる ★自分の持ち物について(2) ★家族を紹介する(3) ★自己紹介する(4) ★友だちを紹介する(5) ★一週間の予定(6) ★電話をかける(8) ●過去の出来事を伝える(1) ●過去の状態や気持ちを伝える、尋ねる(2) ●天気を表す(3) ●未来のことを述べる、尋ねる(4) ●レストランで注文する(5) ●入国カードを記入する(4) ●メールを打つ(4)	<書くこと> ⑥⑦⑧⑨⑩ ・語と語の区切りなどに注意して書く ・メモをとったり感想や意見を書く ・自分の考えや気持ちを書く ・伝言、手紙を書く ★言語材料(言葉のルールや知識)を理解する ⑮ ・音声のルール ・文法のルール ・文字や符号のルール ・語や表現の知識(900語) ★一般動詞とbe動詞 ★名詞の単数形・複数形、冠詞 ★疑問詞で始まる疑問文 ★現在進行形 ★助動詞can ★一般動詞の過去形 ●be動詞の過去形 ●There is(are)～の文 ●未来形 ●助動詞(will, shall, may, must, have to) ●SVC, SVOCの文 ●不定詞、動名詞 ●比較 ●受身形 ●接続詞(that, when, if, because) ◆現在完了形 ◆SVOCの文 ◆不定詞(SVO+不定詞、疑問詞+不定詞、It～to...) ◆形容詞的用法の現在分詞、過去分詞 ◆関係代名詞(who,	・日本語以外の言語の1つとして外国語(英語)を楽しむ ・外国語(英語)を知ることや契機にして、日本語を含む言語を相対化できる ・外国語(英語)を通して、世界のいろいろな人間や生活や文化を知る。 ・言語と文化の密接な関係を知る ⑯ ★文化によるジェスチャーの違いを知る(7) ★時差について知る(8) ●色のイメージの違いを知る(3) ◆習慣(風呂の入り方)の違い(3) ◆異文化(インド、ペルー)理解(4) ◆英語のことわざ ★●●英語の歌

<ことばの力>

保育園 ・幼稚園 「協働して学 びを生み出す 子ども」 の資質・能力	他者と関わり、伝え合い協働する								言葉で感じる想像する				言葉で考える				言葉を楽しむ					
	聴取		応答		主張		発表		調整		感受	想像	共感	批判	関係把握・分析			調和	創作	ユーモア	機転	
小学校低学年 小5年 ～中学1年 中学2～3年	聴取	読み解く	応答	主張	説得	発表	論述	見通す	調整	感受	想像	共感	転換	批判	論理	比較	分類	再構成	調和	創作	ユーモア	機転

<言語生活>

言語生活 保育園・幼稚園	声で伝え合う、関わり合う				絵や文字で表す、伝える				読んで楽しむ				文字			
	挨拶言葉遣い	対話	スピーチ	プレゼンテーション	記録メモ	絵便り	作文	読書	読書	読書	読書	読書	文字	書写	文法	ソーシャルスキル
小学校低学年	①挨拶言葉遣い	②対話	③スピーチ	④プレゼンテーション	⑤会議	⑥記録メモ	⑦手紙	⑧レポート	⑨意見文感想文	⑩メディア	⑪読書	⑫古典	⑬漢字	⑭書写	⑮文法	⑯ソーシャルスキル
小学校高学年 中学校	①挨拶言葉遣い	②対話	③スピーチ	④プレゼンテーション	⑤会議	⑥記録メモ	⑦手紙	⑧レポート	⑨意見文感想文	⑩メディア	⑪読書	⑫古典	⑬漢字	⑭書写	⑮文法	⑯ソーシャルスキル

(注) ★は1年生、●は2年生、◆は3年生を表す。(1)は教科書Lesson 1を表す。

<例> ★電話番号(1)は、電話番号が1年生の教科書Lesson 1で扱われていることを表す。

外国語(英語)科の表中の①②③…は、国語科<言語生活>に於ける①②③…との関連があることを示す。

3) 市民・社会

市民・社会「学びの概要」

目標

我が国の国土、歴史、そこで生活する人々の営みに対する見方・考え方を生かし、提案や意思決定の活動を通して、世界にも目を向けた責任ある市民としての資質を涵養する。

○責任ある市民としての資質とは

- (1) 我が国の国土や地域、歴史への理解と愛着を育て、社会事象に対する提案や意思決定活動を通して、生活を豊かにする産業や、民主的な政治についての理解を深め、それらの背景にある価値や意義を考え、よりよい社会を築こうとする。
- (2) 社会事象の見学・調査や、統計・年表などの資料の読みとりなどから、根拠を示す情報を収集したり、それらを再構成したりすることができる。
- (3) 社会事象に対する自分の考えを創造したり、既存の様々な考え方の中から、望ましい考え方を選択・決定したりすることができる。
- (4) 社会に参加する重要性を感じ、社会に参加しようとする気持ちをもつことができる。

市民的資質（価値判断力・意思決定力）の育成につながる諸能力						
3 / 5 才 接前 統期 中期 後期 1 年2 学期1	<div>生活の様々なことをからだで感じる。</div> <div>興味をもったことに自分の目で見たり、耳で聞いたり、からだ全体で感じたりする。</div> <div>自分の言いたいことが言える。</div> <div>自分がやってみたいことを決めることができる。</div> <div>自分なりの考えをもち、誰かに伝えようとする。</div> <div>自分がやってみたいことを迷いながら選んで決めることができる。</div> <div>校内の身近な地域の出来事や人々に興味・関心をもち、関わろうとする。</div> <div>自分で見たり聞いたり感じたりして、事象に気づき、不思議に思ったり疑問に思ったりする。</div> <div>自分が気づいたことや気づいたことから考えたり、伝えようとする。</div> <div>気づいたことや発見したこと、不思議に思ったことや疑問に思ったことを、自分で調べたり誰かに聞いたりしながら、考えようとする。</div>					<div>「学びの概要」の3年生以上の「市民的資質の育成につながる諸能力の観点別細目分類」は、「価値判断力・意思決定力を育成するために、このような学習過程（追究過程）を重要視しながら取り組んでいる。」ということ。</div>
市民的資質（価値判断力・意思決定力）の育成につながる諸能力の観点別細目分類						
	問題設定	情報収集・加工	話し合い・考えの修正	判断	実現への意欲	学習問題例
学 年	場面設定の課題から、自分の問題をもつ。	自他の考えをより確かにするために、情報を収集したり加工したりする。	根拠をもとにした自分の考えを伝え、反論や賛賞を得て、考えに修正を加える。	よりよい社会を築くために、広い視野から考え判断しようとする。	得た知識や学習方法を生活や次の学習に生かしたり、行動したりしようとする。	*いくつかの単元の「意思決定」する場面設定を示す。
3年	a 学校がある身近な地域に対する、児童の願いや思いをもとにした課題を設定する。 b 学校がある身近な地域に住む人々や区役所の願いや思いを考えながら問題に取り組む。 c 既存の知識や考え方を生かして、問題解決への見通しをもつ。	a 地域の観察から情報を得る。 b 地域に関する間接資料から情報を得る。 c 地域の人に接して情報を得る。 d 地域の事象をありのままに整理する。 e 地域の事象の傾向性を推測する。 f 地域の事象の意味を関係的に考える。	a 討論の楽しさを感じ、だで感じる。 b 資料にもとづいて、根拠や理由を明らかにしながら主張する。 c 自他の意見の相違点・共通点を理解する。 d 自分とは違う考え方や価値観があることに気づき、賛成や反対の意見を主張しながら、それらを生かして、より説得力ある考え方を考える。 e ポスターや新聞、パンフレットなど様々な表現方法での作品を用いて考えを主張する。	a 地域の様々な人々の願い、様々な相対する立場を比較・関連させて、いくつかの条件に適合するように判断する。 b 自分の主張が、現在・未来の地域の人々の生活にどのような影響を与えるのかを予想しながら考える。 c 単元のはじめの主張と最後の主張の変化に気づき、変化が起きた理由を考える。	a 地域の事象に関心をもつ。 b 資料を収集して地域見学の不足を補おうとする。 c 地域の人に積極的に関わって学ぼうとする。 d 地域の様子を資料化して伝えようとする。 e 地域の事象の傾向や、全体をつかもうとする。 f 地域の一員としてできること、やれることを考える。	○みんなが喜ぶ公園を作ろう。 ○町にもう一つ公共施設をつくらせたらどんな施設がいいだろう。 ○大塚の町にお客さんがたくさん入るスーパーを作ろう。 ○もしも、お茶小が火事になったら！消防士になってお茶小を助けよう。 ○よりよい町にするために自分たちはどんなことができるだろう。
4年	a 自分が住む区や都の範囲の社会生活に対する、児童の願いや思いをもとにした課題を設定する。 b 様々な価値観（社会の中のいろいろな争点）があることに気づき、それを学習問題化する。 c 既存知識や既習事項を生かして問題解決へ見通しをもつ。	(補足) 情報 a 直接観察より 情報 b 間接観察より 情報 c 人物より 情報 d 事実認識 情報 e 傾向性への認識 情報 f 統一的な認識 理方向				○水道水を飲まない人が増えている。どうしてだろう。だれもが飲みたくなる水道水を作ろう。 ○あと30年で埋立地がなくなってしまう。東京をごみの山から救うにはどうしたらいいだろう。 ○ゴミの有料化について考えよう。 ○昔から今の生活に持ってきたことはどんなことだろう。 ○他県の友達に「この3カ所に連れて行けば東京ってこんなところか」と思ってもらえるようにしたいと思う。3カ所を選んでみよう。
5年	a 国民生活とそれを支える産業の関わり合いや、国土の様子と産業との関連から課題を設定する。 b 国内の諸産業の未来の予想をもとにした、産業の発展と環境の保全の関連をもとにした、社会の中のいろいろな争点をもとにして、問題をつくる。 c 既存の知識や学習の仕方を生かして、考え方を修正し、論理的な主張ができそうな問題解決への見通しをもつ。	a 計画的な観察や見学から情報を得る。 b 幅広く間接資料を解説して情報を得る。 c 生産現場や遠隔地の人に接して情報を得る。 d 環境や産業について事実に基づいて整理する。 e 環境や産業の傾向性を推測する。 f 環境や産業の意味を関係的に考える。	a 討論によって考えを深めることの大切さを感じる。 b 討論を支える情報収集の充実をはかり、データを自分で作ることもチャレンジする。 c 立場を明らかにした討論を重視する。 d 反論を重視した討論を取り入れる。 e 二つまたは三つの立場を明らかにした討論を重視する。 f 同じ主張をする他者、または、違う主張をする他者と意見交換をしながら、お互いの考えを補強し合う。	a 個人的な利益と社会的な利益の葛藤を踏まえた話し合いを、自分の考えに取り入れて判断していく。 b 自分の主張が、現在・未来の国民生活や政治や国際社会、歴史上の人々の生活にどのような影響を与えるのかを予想しながら考える。 c 最後の主張の変化に気づき、変化が起きた理由を考える。	a 遠隔地へ観察や見学を企画しようとする。 b あらゆる方法で情報を得ようとする。 c 現場の人に積極的に関わって学ぼうとする。 d 産業の様子を資料化して伝えようとする。 e 環境や産業の全体をつかもうとする。 f 国土に生きる者としての役割を考える。	○お茶の水女子大学に和食料理屋の「ぞむ」を開店します。これぞ和食！と、皆がおどろくメニューをつくりまします。ただし、条件があります。全て国内で生産された食材や自給率100%の食材、以上2つの条件にあう食材を使って、メニューを提案しましょう。 ○自動車工場を造るなら、どのような地形の場所に造るのが良いでしょうか。 ○白神山地付近のある町では、観光を目的にした道路を造るか造らないかで町の中の意見が割れています。あなたならどうしますか。 ○諫早湾問題について考えよう。

6年	<p>a わが国の歴史や伝統、政治の問題、国際貢献等問題（社会の中のいろいろな争点）で人々の思いや願いを尊重しながら学習課題を設定する。</p> <p>b 当時の人々の思いや願いを尊重したり、現在深く携わる人々の思いや願いから、学習問題をつくる。</p> <p>c 既習の知識や学習の方法を生かして、考え方を修正し、論理的な主張ができそうな問題解決への見通しをもつ。</p>	<p>a 史跡など具体的な手がかりから情報を得る。</p> <p>b 幅広く間接資料を解説して情報を得る。</p> <p>c 過去の事実を知る人に接して情報を得る。</p> <p>d 想像力で補いながら歴史上の人物の思いや、歴史的な事象の状況を関連させて再構成する。</p> <p>e 歴史的な事象や制度の大きな流れや傾向性を推測する。</p> <p>f 歴史的な事象や制度の意味を自分の立場と重ね、関連的に考える。</p>	<p>d 相手の主張の内容や根拠を理解し、様々な立場から判断し、より広い視野から考えるようにし、留保条件をだして合意形成した解決策を模索する。</p>	<p>a 周囲から、過去の手がかりを探そうとする。</p> <p>b 幅広く昔に関する資料を、過去の状況と再現して伝えようとする。</p> <p>c 過去を知る人を尊重する。</p> <p>d 想像力や様々な方法で、過去の状況を再現して伝えようとする。</p> <p>e 歴史的な事象や全体像をつかんで、自分に取り入れようとする。</p> <p>f 歴史の流れの中にある自分の生き方や役割を掘り下げようとする。</p>	<p>○縄文時代と弥生時代では、どちらが人間にとって生きやすいのか、食料や人間関係から考えてみよう。</p> <p>○貴族の世の中から武士の世の中へ、時代の転換期に活躍した人物から新しいリーダー像を探そう。</p> <p>○西郷隆盛、大久保利通になって、新しい明治政府が目指す未来の国の姿を提案しよう。</p> <p>○東京都の老人福祉問題について考える。私たちの未来は・・・。</p> <p>○東京都が高齢化社会に向けて実行しなければいけないことはなにか？</p> <p>○本当の国際協力とは何だろう</p> <p>ーODAの実態から考えるー</p> <p>○明治の初めにあたって、よりよい国にする憲法をつくろう。</p> <p>○時事問題について考えよう</p>	
学年	<p>場面設定の課題から、自分の問題をもつ。</p> <p>○1年 ●2年</p>	<p>自他の考えをより確かにするために、情報を収集して適切に選択し、加工する。</p>	<p>根拠をもとに自分の考えを伝え、複数の他者との意見交換をもとに、考えを深める。</p>	<p>よりよい社会を築くために、広い視野から考え、判断しようとする。</p>	<p>得た知識や学習方法を生活や次の学習に生かしたり、行動したりしようとする。</p>	<p>＊いくつかの単元の「意思決定」する場面設定を示す。</p>
1分野	<p>○身近な地域の地理的な事象から特色や問題点を見だし、環境条件や社会条件と結びつけて課題を設定する。</p> <p>○都道府県について、共通テーマにもとづいて課題を設定する。日本全体や地域の地理的な事象から特色や問題点を見出し、環境条件や社会条件と結びつけて課題を設定する。</p> <p>●世界の国について、自分の関心に応じて、課題を設定する。</p>	<p>○野外調査、地図の活用方法を身に付ける。</p> <p>○都道府県や国の政策課題に関して、地図や統計、映像や実物など、地域に関する様々な資料を収集し、資料の特性をとらえて適切に選択する。調べたこととがら地図やグラフ化したり、レポートにまとめたりする。</p> <p>●国ごとの資料や統計を収集する。資料から調べたこととがら、適切に地図やグラフ化したり、レポートにまとめたりする。</p>	<p>○野外調査や収集した資料をもとに、自らの意見を形成する。他者と自分の意見を比較し合う。</p> <p>●国別の資料・統計をもとに、自らの意見を形成する。異なる立場との意見を比較し、合意を形成するにはどうしたらよいかを考える。</p>	<p>○コミュニティにおける問題を多面的に考察し、自分なりの解決策を提示するとともに、互いに評価を行う。</p> <p>○選択した道府県の課題を自分なりに分析し、解決策を提示するとともに、互いに評価を行う。</p> <p>●世界の国々や日本との関係性を多面的に考察し、自分なりの解決策を提示するとともに、互いに評価を行う。</p> <p>●日本の環境や社会における課題について、世界の国々との関わりから多面的に考察し、自分なりの解決策を提示するとともに、互いに評価を行う。</p>	<p>○身近な地域や都道府県の学習を通して、人間、場所、環境についての知識やとらえ方を、公共性をふまえた上で、未来のために役立てるよう適用する方法を学ぶ。</p> <p>●世界の国々の学習や日本の課題の学習を通して、人間・場所、環境についての知識やとらえ方を学び、公共性をふまえて、みんなが考えたことを役立てる方法を考える。</p>	<p>○「特派員レポート」新聞記事から一つの国を選択し、日本と比較して調べる。</p> <p>○「わたしたちのまちを紹介しよう」身近な地域の特色、課題を調べ、他の地域の人に紹介する。</p> <p>○「世界の国」人種・民族問題による紛争についてレポートする。</p> <p>●「都道府県調査」道府県を選択し、共通テーマについて調べた上で、互いに比較、関連づけをする。地域の課題をみつけ、解決方法を話し合う。</p> <p>●「日本の今後のエネルギー環境問題を考える」いくつかの立場から問題をとらえ、解決策を話し合う。</p>
2分野	<p>○歴史の年代編成の仕組みを理解し、歴史の大きな流れと時代の特色をとらえて、課題を設定する。</p> <p>●これまでに学習した歴史の大きな流れと時代の特色をふまえて、国際情勢も視野に入れながら、課題を設定する。また、現在の日本と外国の間の諸問題に通じる歴史的な背景をとらえて、課題を設定する。</p>	<p>○年表や歴史地図、統計、絵画・写真・文献・映像など、歴史に関する様々な資料を収集し、有益な情報を適切に選択して活用する。</p> <p>●年表や歴史地図、統計や絵画・写真・文献・新聞・映像など、歴史に関する様々な資料を収集し、有益な情報を適切に選択したり、異なる立場をもつ諸資料を的確に判断・分析したりして、活用する。また、加工する際は、自分が必要とする形式を工夫する。</p>	<p>○史料を多角的にとらえ、歴史的な人物や事象に対して自分なりに解釈し意見を形成する。また、他者の意見とも比較しながら、自分の意見を再考する。</p> <p>●史料を多角的にとらえるだけでなく、現代の視点も加えながら、歴史的な人物や事象に対して自分なりに解釈し意見を形成するとともに、他者との意見の相違点を明確にしたり、合意にむけて歩み寄ろうとしたりする。</p>	<p>○歴史的な事象を、時代背景や因果関係から多面的にとらえ、様々な立場に立つて解決策を提示するとともに、互いに評価を行う。</p> <p>○今日の日本と外国の関係や諸問題に通じる歴史的な事象を見だし、それが現在どのような問題を生み出しているかを考え、互いに評価を行う。</p> <p>●歴史的な事象や、時代背景や因果関係から多面的にとらえ、様々な立場に立つて解決策を提示するとともに、互いに評価を行う。</p> <p>○今日の日本と外国の関係や諸問題に通じる歴史的な事象を見だし、それを踏まえて自分たち自身がどうすればよい自分なりの解決策を提示するとともに、互いに評価を行う。</p>	<p>○今昔の相違を対比させながら歴史の変遷の過程における因果関係を理解し、現代の社会へ生かす方法を学ぶ。</p> <p>●今昔の相違を対比させながら歴史の変遷の過程における因果関係を理解し、現代の社会へ生かす方法を学ぶ。</p>	<p>○「班田収授法から荘園の広がり」公地公民の原則のくずれについて多面的に考察し、土地に関する政治のあり方を評価しよう。</p> <p>○「武士政権の誕生」義経の視点からこの時代の歴史的な事象をとらえ直し、武士政権の特徴を評価しよう。</p> <p>○「建武の新政」公家中心の政治に対する公家・武士の立場を多角的に考察し、後醍醐天皇の政治にうけて評価しよう。</p> <p>と</p> <p>○「正長の土一揆」民衆の一揆は許されるかどうかを話し合う。</p> <p>●「市民革命」王や僧・貴族・市民の立場から革命を評価しよう。</p> <p>●「ノルマントン号事件」船長は有罪か無罪かを話し合う。</p> <p>●「治安維持法」人権に関する政府のあり方を話し合う。</p> <p>●「満州国建設」昭和恐慌時の軍部と政府の考えを比較し、評価しよう。</p>
3年	<p>○民主主義の基本である国民権について、実際に国民が政治に対してどんなことをやっているかを考えながら課題を設定する。</p> <p>○人権学習をふまえて、裁判の持つ意味を考えて問題を設定する。</p> <p>○企業活動や消費者保護などの経済活動に関する法的な問題を設定する。</p>	<p>○収集した情報を分析し、さらに理解を深めるために、いくつかの主要な新聞記事やニュース番組を読み比べたり、専門家のお話を聞いたりする。</p> <p>○各省庁・各種団体などから収集した資料を加工し、適切に生かす。</p>	<p>○自分が集めた情報の処理や解釈の仕方について、複数の他者それぞれと意見を話し合い、伝達する情報を作成し、発信する。</p> <p>○資料をもとに、現代社会の課題を様々な立場から判断した上で、法が共生のための相互尊重のルールであることを認識し、ルールに基づいてどのように紛争を解決するのか主体的に学ぶ。</p>	<p>○自分の主張や考えが実際の社会で通用するのか、実際の社会で実行しようとしたときにどのようなことが問題になるのかなどを考え、具体的な解決策を提示する。</p> <p>○情報収集の際にお話を聞いた専門家の人から自分の主張や考えを伝え、異なる意見にも配慮しながらより広い立場から議論する。</p>	<p>○他校の生徒たちと共通の課題について意見交換をする。</p> <p>○模擬選挙などを校内で企画、運営し、社会との関わりの中で学びを深める。</p> <p>○地方自治など身近な問題を解決するための方策を提案し、実際に社会参加へ向けた行動を行う。</p>	<p>○投票率の低下を改善する方法を考えよう → 国民の政治への参加をもっと積極的に行うにはどうすればよいのか？</p> <p>○裁判員制度を考えよう。一人権学習をふまえて、国民権の意義をより深く考察する。</p> <p>○死刑制度を考えよう。一人権と社会や国権の関係は？</p> <p>○国の財政問題をどうすべきか、考えよう。一税制度や社会保障の実態をふまえて、少子高齢化が進む中で財政問題の視点を深める。</p>

4) 算数・数学

6 算数・数学部会学びの概要

- 目標
- ・体験や活動の中から数理的な課題を見つけ、それを算数・数学のことに通して考え、解決することで知識・技能を身につける。
 - ・自分の考え方や友だちの考え方を比べ、実践を通して確かめ、数学的な見方・考え方を広げる。
 - ・学習が自らの生活に関連していることに気づき、進んで生かそうとする。
 - ・学習したことをもとにして課題を発展させ、筋道を立てて粘り強く考える。

※3歳～接続前期（幼稚園）：幼稚園における経験や活動を通して育てたい学びの芽を書き出した。
 ※接続中期・後期（1年1学期）～中学3年：「キーワード」で主な学習目標を示した。

経験・活動を通して育てたい学びの芽		関わりあり子どもの姿			
3～5歳 接続前期	生活の中で数の呼び方を知り、使う 生活の中で数に親しみ数とものを対応させて理解してくる 数に対応するようになりものを分けたり集めたりする	生活の中でもものに触れたり扱ったりしながら量に親しむ、比べる （いっぱい、たかい） 生活の中で、操作をしながら量比べる 生活の中で量を出して比べる	生活の中で形に親しむ（同じ形のもの、違う形のもの） 生活の中で形を比べたり、まねしたりする	友だちが遊んでいることに興味を持ち、一緒に遊び、数や量、形に親しむ	友だちが遊んでいることに興味を持ち、一緒に遊び、数や量、形に親しむ
接続中期・後期	数を知る 具体物と数詞、数を対応させる 具体場面から数をイメージする 具体場面から数を抽象化する	比べる（直接比較） いろいろな量を直接比べる 図をかく 具体的な数を○などの半具体物に置き換えて表現する	図形 形をつくる 身近な形をよく見て写す いろいろな形を組み合わせて、ものの形を切ったりして、きれいな形、作りたい形を作る	数量関係 関数 数のかわり 計算のきまりを理解する 数の関係を比べ、きまりを見つける	友だちがしている活動のまねをして、数さがしや形さがしを行う 自分のみつけてきた数や形をみんなに伝える 友だちが見つけてきた数や形を知る
小1 1・2・3学期	数を理解する 数をいろいろな形で理解する 数構成をいろいろな形で理解する 数範囲の拡張に伴って十進数の理解の素地を培う 計算の仕組みを理解する 簡単な数の算術形式による計算を理解する 図に表す、読む 式の意味を理解する 式を用いて問題を解決する	量と測定 比べる 任意単位を基準に間接比較を理解する 普通単位を基準にした数値化による比較を理解する 図形の部分に目を向ける 平面図形を構成要素で見る 定規や三角定規を用いて色々な形を作図する	図形 形を操作する 色々な形（平面及び立体）に触れ形の特徴を実感する 色々な形の特徴を生かして具体的なものを構成する 色々な形の構成要素を意識する	資料の整理 簡単な表、グラフの表し方を理解する 図数の考え 現象から2量を取り出して、その関係を調べる 式を操作して関係を考える	今まで学習してきた算数の算数や友だちが出した質問を基に課題について、自分なりに考えることができる 絵や図やことば等を使って、自分の考えを友だちに伝える 友だちの考えを聞き、解決の方法を理解することができる 友だちとの解決の方法での意見交換を通して、新しい問題場面を考えることができる
小3 3・4年	数を使って考える 数範囲を広げ、記数法に基づいた計算方法の理解 図と算算決定 式の意味を理解し、問題場面を読みとり、適切な演算を決定する 数を広げる 整数以外の数を知り、その仕組みを整数の見方、考え方を理解する	測定と単位の意味を考える 測定の原理をさまざまな量（長さ・かさ・重さ・時間・広さなど）において理解する 測定器具を作り、測定に利用する	図形の部分に目を向ける 平面図形を構成要素で見る 定規や三角定規を用いて色々な形を作図する	図数の考え 現象から2量を取り出して、その関係を調べる 式を操作して関係を考える	既習算項や日常生活、友だちの疑問等から自分なりの課題を持ち解決に取り組む 自分の考えを図や式・ことばを使って友だちに分かりやすく伝える 友だちの考えを図や式・ことばから理解し、自分の考えと似ている点や違っている点を明確にする 学習したことを整理し合い、疑問やさらに知りたいことを出し合いながら新たな課題を見つける

自然・理科「新・お茶の水プラン(化学分野編)」～「学びの概要」改題～

活動や体験から学び、自然への関心を高めることができる 協働して観察や実験、考察を行ない自然の法則を正しくつかもつとする 科学に対する基礎的・基本的な知識・技能をもつ					
新しく学ぶ方法論			具体的な学び方		
科学的な考え方	関わり合う学び	分類	測定・定量	操作	内容
あそぶ 興味を持つ 発見する	まねる 発見を見せ合う、 教え合う	集める 大きさ、色、形で 分ける	感覚でとらえる (あたたかい、つめたい、くさい)	五感で感じる(見る、さわる、聞く、においをかぐ、味をう)	ろうそく 料理(加熱する) 卵がかたまる たき火を経験する(やきいも) 観察(自然をありのままに見る)から実験(自然に手を加えて調べる)へ
観察して気づく	友だちの表現のよさに気づき、取り入れる				水が凍っているの に気づく 窓の曇り、息が白くなる
問いを持って調べる	発見や疑問を伝え合い、共有し、課題を作る	つくつかないで分類する			電気を通す金属 鉄は磁石を引きつける
予想を立てて調べる			温度をはかる	火の危険を知り使いこなす、マッチを扱う アルコールランプで加熱する	水に溶かして見えなくなる様子を観察する 固体、液体、気体の状態を観察する
道具を使った計測の方法を知り、定量的に調べる	協力して実験に取り組む 考えを交流する		体積をはかる 重さをはかる	水の危険を知り使いこなす、マッチを扱う アルコールランプで加熱する メスシリンダーで水を量る	状態変化の様子を観察する 水の温度の変化を測定し、グラフにする
規則性に気づく(保存)	実験結果を共有し、規則性を導き出す			↓ 手を使って調べることから、頭を使って考えることへ ものが燃えるときの様子を調べる 空気のほたらきを知る	溶解 水に溶けてもものはなくなる どれだけ溶けるかを溶かしてみる いろいろなものが水に溶ける様子を観察し、溶ける量や様子を調べる 温めると溶けやすい
分析的に調べる(条件統一)	検証方法や考察を伝え合い、意見を対立させながら課題を解決する	試験紙でなかま分けする 見た目は同じ透明な水を分析的に判別する	上皿てんびんで重さをはかる	金属の変化を観察する ろうそくの燃焼と空気の関係について調べる スプイトで液体をたらす	酸性・中性・アルカリ性に分類する 身近な水を調べる

中 1	粒子で考える	物質をその性質によって分類する 有機物・無機物／金属・非金属で分類する 純物質・混合物で分類する 単体・化合物で分類する 物質の構造で分類する	電子てんびんで質量を測る 体積と質量から密度を求める 温度計やメスシリンダーのめもりを正しく読み取る	ろ過で物質を分離する コマゴメドペットで一定体積の液体をとる 気体が水素や酸素や二酸化炭素、アンモニア、塩素であることを確かめる ガスバーナーで加熱する	気体を発生させ、性質を調べる 未知の物質を調べる	物質が原子できていることを知っている 原子の記号、化学式を知る 分子でできる物質とそうでない物質があることを知る 原子・分子、物質のモデル化の便利さを実感する	イオンと中和 イオンのできかたを理解する 電離のしくみをモデルで理解する 酸、アルカリの正体がH ⁺ 、OH ⁻ であることを理解する 中和のしくみをイオンのモデルで理解する	水溶液から溶質を取り出す 溶ける様子を観察する 再結晶で物質を取り出す	状態変化 物質の三態をモデルで表現する 蒸留・分留によって物質を取り出す
説明できる モデルで考える	エネルギーと結びつける	班ごとに条件を変えて実験をし、各班のデータをまとめて一つのグラフにする これからのエネルギーの利用や環境保全について話し合う	体積を量り体積比を求める グラフを作成し、比例関係に気づく	酸化・還元 燃焼が酸素との反応であると知る 酸化物を還元して金属を取り出す 化学変化でエネルギーを取り出す	化学変化 化学変化で物質は別の物質になることに気づく 化学変化を原子分子モデルや反応式で表す 化学変化の前後で質量が変化しないことに気づく 化学反応は一定の割合で反応すると気づく 反応の速さがちがっても同じ化学変化と気づく	ボルタの電池をつくって電気エネルギーを取り出す	↑ 化学変化を原子の結びつきの変化としてとらえ始める		
中 2 ・ 中 3									

(音楽科の目標) 音楽を通して豊かな表現者を育む

6) うた・音楽

- ・からだ丸ごとで音を感じ、受けとめる感覚を育てる
- ・作品や演奏者と関わり、自分なりに楽しむ態度を養う。
- ・多様な音楽を仲間と共有する中で、互いの音楽世界を広げ、より豊かな響きを味わう。

		音に反応する まねる				
3歳 4歳 5歳	接続前期	あそびを楽しむ				
		拍を感じる				
		踊る				
接続中期 接続後期		一緒に歌う				
		見て、聴いて楽しむ				
		声の大小・高低を聞き分ける				
1年2学期から 低学年		手や足で拍を表す				
		思いつきを楽しむ				
		身体で感じて				
中学年		耳を澄ませて				
		歌う				
		響き合って				
高学年		楽器で演奏				
		つくる				
		友達に聴かせる				
接続期 6年3学期から		音の動き方の特徴を捉える				
		みんなでワツと歌う				
		アルトリコーダー				
中1年前期		アルトリコーダーによる聞き取り問題				
		(合唱の編曲)				
		簡単な和音伴奏づくり				
中1年後期から		和音の響き				
		ベース音の響き				
		自分達のイメージを生かして愛好曲を広げる				
中2年前期		卒業式の全校合唱				
		三味線ワークショップ				
		アルトリコーダーを中心としたアンサンブル				
中2年後期から		コードネームによる伴奏づくり				
		(合唱の編曲)				
		(有志による合奏参加)				
中3年		音楽プロデュース活動				
		自分自身の深い聞き取りから楽曲の構造を分析する				
		卒業式の全校合唱				

協働して学ぶポイント			
主体的に学ぶ (選ぶ・見通す)	他者と関わりあう (共感・批判・評価)	多様な表現が行き交う場の設定	
		あそび	コンサート
自分なりに興味を持つ	あれいいな おもしろい 嫌い まねる		
	一緒に遊ぶ楽しさを味わう		
遊びのルールを知る			
遊びのルールを守る			
自分の思いつきを表す	仲間と協力して あそぶ		
自分の好きな曲を選ぶ 自分の好きな遊びを選ぶ	友達と協力して あそぶ		
こだわる	友達の意外な面を発見する		
自分の考えたものを表す 自分の考えたものを発表する 友達の表現を受け止める	なるほど		
見通しをもつ 計画を立てる	仲間と話し合って 計画を立てて進める		
友達の表現を受け止める 自分の意見を述べる	聴きあう		
他者の意見を受け止める 表現したいことを主張する	互いの表現を受け止める		
自分の発表を振り返る 友達の表現から学ぶ	互いの表現を評価しあう		
他者の意見を取り入れる			
いいところを自分に 取り入れようとする			
自分の計画・表現を評価する			
新たな表現欲求を持つ よりよい計画を立て実行する	互いに工夫し、 よりよい表現を探索する		
音楽について説明する言葉 (音高、リズム、テンポ等) 変声について 合唱の組み立て	条件に適した歌を選ぶ	歌う歌について、根拠を出し合って 話し合える	合点うみ いでとん いのな 話うで し視歌
長調の音階の構造 コードネームの理解 日本の音楽 三味線音楽 三味線の構造 伴奏のパターン	知識の学び方 音楽をイメージしながら知識を学ぶ	ブヘルア 小のン グエサ ル夫ン ー	愛好曲 クラス合唱
合唱の効果的な練習 合唱表現の工夫の仕方	伴奏パターンの組み合わせによる 演奏効果を理解して工夫する	的位ク なのラ 練主ス 習体単	合唱祭
沿って各パートの で表し、楽曲全体 ラフィカルに表現	学び合う仲間づくり 互いに聴き合う 計画的組織的な活動	音楽プロデュー ス活動	音楽プロデュー ス活動による音楽会開催
音楽プロデュース活動 主体的に音楽活動の場をつくり出す	音楽企画運営 音楽行事企画運営 (様々な環境に合わせて) (テーマの設定と大集団による表現を組織)	的位ク なのラ 練主ス 習体単	合唱祭
音楽環境改善 (音が人に与える影響)	クラス合唱曲の 主体的な選曲・編曲・練習・準備等	クラス合唱 全校合唱 の組織化	合唱祭

7) アート・美術

アート・美術科の目標

- ・からだ全体で感じ、思いを大切に、自分らしい表現を楽しもうとする。
- ・造形的な表現活動を通して、自分なりの見方、感じ方、考え方を養う。
- ・造形的な表現活動によって、生活を楽しんだり、豊かにしたりしようとする。
- ・造形的な表現活動を通して、関わりあうことにより、自他の違いやよさを認め合い、高め合おうとする。

育みたい資質・能力				
	からだで感じて		つくる喜び	生活を豊かに
	身体	思い		
3歳 4歳 接続 前期	からだに関わろうとする 目・耳・鼻・舌を働かせる 触り心地を楽しむ	えがいたり、つくったりしようとする つくって遊ぶ えがくことを楽しむ 色や形に親しむ		生活そのものを楽しむ わくわくする なりきること 季節を感じる
接続 中期 後期	様々な素材にふれる からだで分かってもらう からだで表そうとする	見たものを表現しようとする 進んでえがいたり、つくったりしようとする 想像して表現しようとする		造形的な表現活動によって 生活を楽しもうとする 造形的な表現で自分のこと
低 学 年	からだの動きを楽しむ ・動きを身体で表す ・からだごと包まれる体験 ・変身遊び	自分の思いを持つ ・好みで選ぶ色、形、材質 ・表したいものを決める	えがいたり、つくったりする 楽しさを味わう ・好きなものを表す ・体験したことを表す ・つくりかえる ・協同でつくる	造形的な表現活動によって 進んで生活を豊かにしよう ・空間をかざる ・季節のかざりをつくる ・楽しい計画を考え、実 ・楽しく食事する
中 学 年	内なるからだ意識する ・身体に聴いて表す ・ボディースケールからの表現 ・特殊な場に身を置く	自分の思いを表現しようとする ・納得のいくまで表現する ・思いを元によりよく表現しようとする	材料・道具の特性を生かして 表現しようとする ・素材を生かして表す ・場所を生かして表す ・想像の世界を広げる ・見えないものを表す ・大きいもの、小さいものづくり	造形的な表現活動によって生 しみ身の周りを豊かにしよう ・学校行事を盛り上げる飾り ・学校生活に必要なことを呼びかけ ・役にたつものを考えてつく
高 学 年	内なるからだを表現を 関連づけようとする ・身体感覚を鋭く働かせて表す ・フィールドワークによる表現	自分の思いにこだわり、表現する ・心惹かれるものを集めて表す ・好きな場所を生かして表す	造形的な表現活動を通して、 自分を見つめようとする ・対象を把握して表す ・想像力を働かせて表す ・既成概念をはずして表す ・これまでの自分をふりかえり、まとめて表す	造形的な表現のよさを捉 持的に生活に取り入れよう ・日々の生活や社会を見つめて、よりよ ・学校に役立つ卒業記念品制
【絵と彫刻】				
中1	対象をじっくり観察する ・観察して表す ・発見する ・自然を感じる ・美しさを感じる ・季節を感じる ・形や色を感じる ・遠近感を感じる ・立体感を感じる (量感、塊感、動勢)	主題を発想する ・主題を自分で決められる ・体験をもとに想像する ・よさを感じとって表す ・美しさを感じとって表す 作品の構想を練る ・形、色、生命感を考えて表す 自分の表したい感じを表現する ・表現意図に適した表現方法で表 ・見通しを持って表す	表現の工夫や方法 基礎的技能を身に付ける ・美しく表す、生き生き表す ・思うように形が表せる ・思うように色がつくれる ・遠近感や立体表現ができる ・必要な用具が適切に使える 材料・道具の特性を生かして 表現しようとする ・材料を生かして表す ・空間を生かして表す ・想像して表す ・混色を生かして表す	造形要素を学び、生 ・形、色、材料、光などの材料を 造形感覚を働かせて表現 生活を豊かにしようとする ・美的感覚を働かせて構 ・美的感覚を働かせて装 ・自然や生活をデザイン ・日本の伝統的な装飾や美意 伝達、交流する ・表現したものを伝え合 ・効果的に美しく伝える ・発表会や批評会で意見
	ものの見方や考え方を深める ・様々な角度から見る ・深く見る ・客観的に見る ・深くかかわる ・内面的価値を探る	感性や想像力を働かせて構想を練る ・自己の内面を探る ・憧れをもつ ・想像や感情を表す ・心の世界を表す 自分の視点から発想する ・道筋を見通せる ・計画性を持つ ・計画性を持つ 創造的な構想を工夫する ・思いや考えをまとめる ・表現方法やそれらの組み合わせ方を考える ・創意工夫して総合的にまとめあげる 自分だけの表現を追求する ・自分独自の発想や構想、表現方法を工夫する ・伝統的なものから新しいものを生み出す	創意工夫して表す ・美的感覚を生かして表す ・光や影を生かして表す ・立体感や量感を生かして表す ・バランスを生かして表す ・動きを生かして表す ・遠近法透視法を生かして表す ・強調 ・省略 ・単純化 ・知的構成 ・単純化	造形要素を生かし、 独自の表現をする ・表現意図に応じた材料を選択して ・構成の簡潔化、総合化や取り合 造形感覚を働かせて表現し、 夫してつくり生活を豊か ・用と美の調和を考え、自分 生かしてつくる ・身近な環境や、自然との共 発想したり交流したり ・効果的な伝達手段で伝える ・発表したり提案したり批評 お互いのよさに気づき個性
中2 中3				
【純粋表現】				
【目的表現】				

		協働して学びを生み出す子どもの姿	
	みる楽しみ	もの・こと・場所との関わり	ひととの関わり
む	目にとまったものをみる	・遊びの中で、色、形、材質に親しむ	・友だちが遊んでいることに興味を持つ ・つくったものをあげたり、もらったりする
を楽しむ	みて楽しむ じっくりみる まねする		
て、	動くものを観察する	・好きなものを集めて、並べたり、置きかえたりする	・友達の表し方をみて、よさを取り入れようとする ・気づいたことを伝えあったり、教えあったりする
を紹介する	みる楽しさを味わう		
て、 する	成長するものを見続ける	・安心できる場所を探す	・互いの表現を見て、楽しむ ・互いの表現から影響を受ける ・共同制作では、分担して進めようとする ・共同制作の中でぶつかり合う
行する	よく見ようとする		
活を楽 とする づくり	見方を広げる	・画面上に、納得のいく位置を探して並べようとする	・作品を見たり、発表したりして、よさを見つけようとする ・用意してきた材料を交換する ・共同制作に協働の芽が表れる
るために表 する	・美術館で学ぶ ・見える世界に遊ぶ ・出かけた場所で気になる色や形や材質を見つける ・見て感じたことを話し合う ・アーティストなど専門家に学ぶ		
え、 とする	見方を深める	・自分のこだわりをもとに、構成する	・互いの表現を通じて、その人らしさに気づく ・意図的に共同制作をしようとする ・作品鑑賞会では、互いのよさを伝え合い、助言し合う ・友だちからの影響を次の課題に生かすことができる
くする提案をする 作	・自他の作品や美術作品を様々な方法で鑑賞する(分析、判断、批評) ・自分の表現や作品を分かりやすく説明する(プレゼンテーション) ・作品が生きる場所を見つけ		
】	【鑑賞】		
かす	見方を広げる	・ものをよく見て気づき、発見しようとする ・形、色、量感などを感じとる ・よさや美しさ、情感、雰囲気などを感じとろうとする ・形、色、材料を生かして表現する ・新しいものを考え出そうとする	・互いの作品から、表現の意図や工夫や違いなど自分の価値意識を持って感じとる ・友だちの作品の工夫している点やよさを感じとる
生かして表す	・想像力を働かせる ・心情や意図、表現の工夫を感じとる ・多様な表現のよさや美しさを味わう ・自然のよさや美しさを感じとる ・鑑賞に親しむ ・生活の中の造形、デザインの広がりを感じとる ・豊かな発想と工夫に気づく ・美と機能性の調和に気づく ・作品から伝わる願いを感じとる ・造形的なよさに気づく		
しる			
成する			
飾する			
に生かす			
鑑を生かす			
う			
交換する			
表す	見方を深める	・自分の表したい感じを追求する ・使う人の気持ちを考えようとする ・形、色、材料を工夫して表現する ・自ら課題を見つけて取り組む ・課題解決の方法を考え、組み立てていこうとする ・環境との調和を考え、構想を練る ・自分の作品に愛着を持ち大切に	・互いの作品を鑑賞し、発想の面白さや表現方法などの違いについて汲みとる (自己評価カード) (相互鑑賞カード) ・協力して一つのものをつくりあげる楽しさを知る
せ方を工夫する	自分の価値意識をもって批評し合う		
創意工 にする	・関心を高める ・理解と愛情を深める ・生活の中の造形、デザインの広がりや深く感じとる ・自然のよさや美しさを深く感じとる ・素材の生かし方を感じとる ・洗練された美しさを感じとる ・美的判断力を身につける ・表現の相違と共通性に気づく		
の感性や美意			
生の視点でデ			
する			
したりして を認め合う			

8) からだ・保健体育

①からだ・体育

学びの概要 からだ・保健体育部会

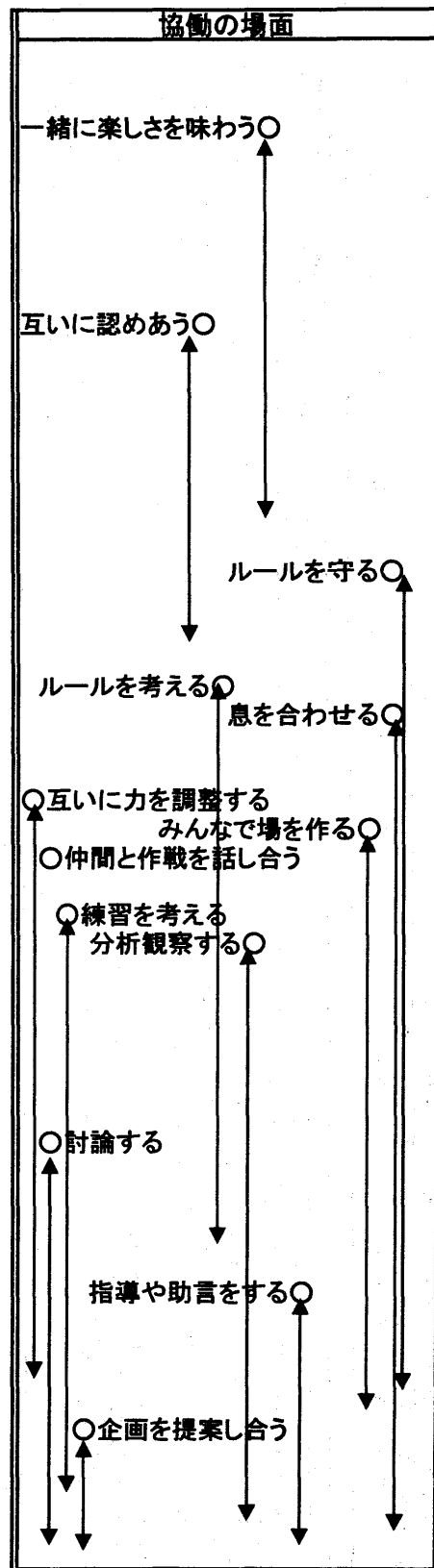
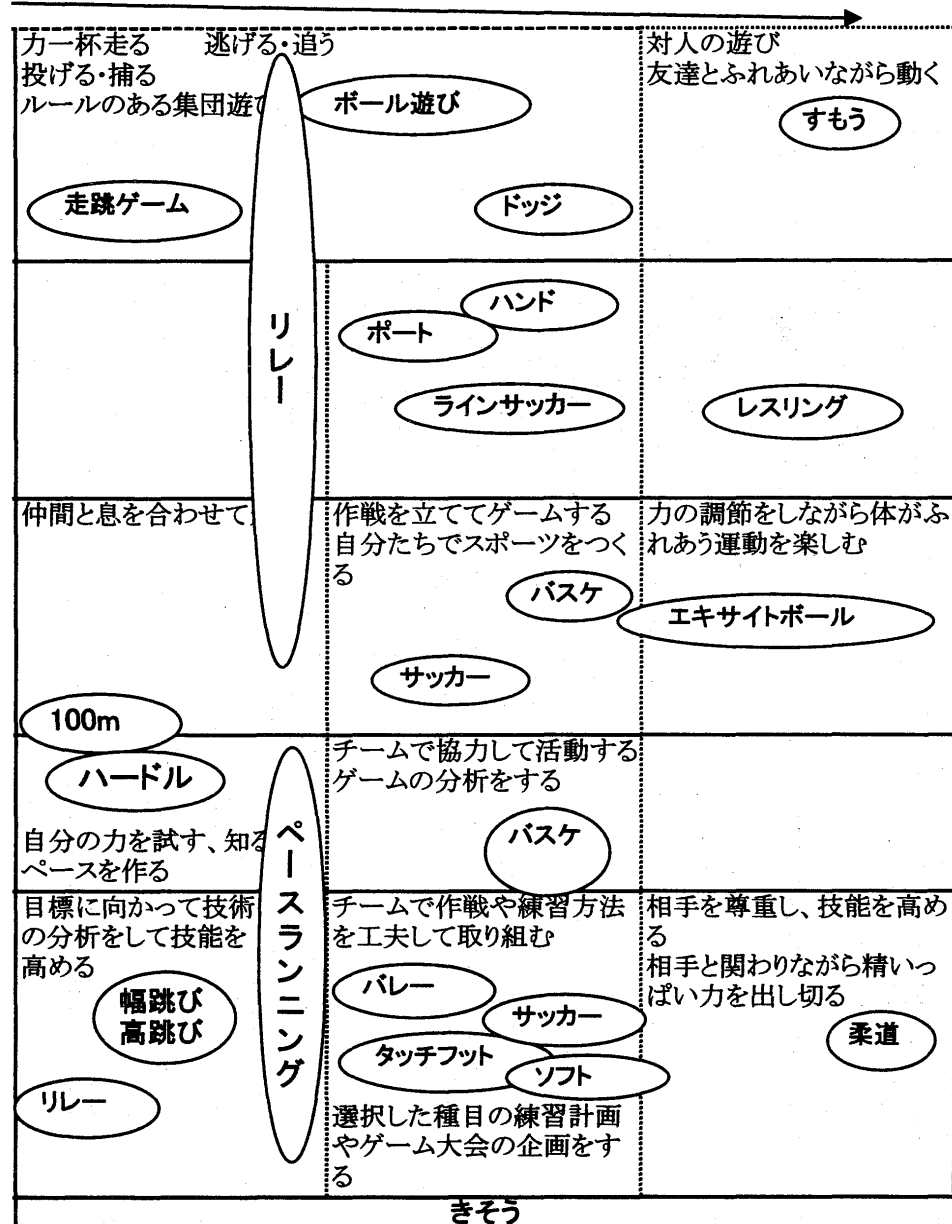
生涯にわたって進んで健康なからだを作り、運動を楽しもうとする態度・技能を育てる
 ・自分の体を向き合い、体力を高める ・多様な経験を通して、からだで表現する ・仲間と関

		感じる	考える	あらわす
歳 見	3 4 園 幼 稚	人やものことに自分から関わり、からだ全体で感じたり、思ったりする		自分の思い、楽しさ、喜びをからだで表す
	5 歳 見 期 接 続 前	友だちとともに活動する事を心地よいと思う みんなの中の自分を感じる 身近なものとの触れ合いから感じる	生活の中の様々なことに気づく 自分のできそうなことをみつける	自分の思いや考えたことを、からだやことばで表す 相手のいることを意識して、相手に分かるように表す
小1	(1学期)	新しい集団の中での自分を感じる		
	後期			
小2		長い時間走る 力一杯走る 基本の運動	感触を楽しむ 水の中で動く 水遊び	バランスをとる 器械・器具を使う 登り棒
		曲げる・伸ばす		とびばこ遊び マット遊び
小3		運動と体の変化 体のしくみと成り立ち 自分の体力	力の入れ方・抜き方 体のゆだね方 クロール	表現運動
小4			平泳ぎ	
小5		個々の体の違い 健康な生活と環境 自分の体力と生活の改善	音に合わせて動く 巧みに泳ぐ 長く泳ぐ 服を着たまま浮く、泳ぐ 着衣水泳	思いや様子を動きで表現する
小6				組み体操
				マット
中1		保健	水と関わり様々な 感覚を磨く 水の事故防止 スキンドライブ	自分のできる技を 組み合わせて演 技を作る 着衣水泳
				ダンス
中2				イメージにふさわしい動きを みつける 仲間と効果的に技 を構成する 集団マット
中3		身体を鍛える方法 を知る トレーニングと身体	自分の体力を知る	応援合戦
からだ・心を、育てる・守る・わかる				あらわす

典型的な教材を示す

わり合うことを通して、創造的に運動を楽しんだり、健康なからだをつくる

きたえる	はたらきかける	みんなと創る
夢中になって取り組む好きなことに繰り返して取り組む	お関心のある人やものに自分の思いをよせる。やってみる	ともだちと一緒にすることを楽しむ
活動の中で自分の役割を見つけ、取り組む	自分たちで出来ることや役立つことをやろうとする。くり返し試す。	なかまと息を合わせ、いっしょに活動する
新しい環境の中で、不安や緊張を乗り越え、自分の在り方を探る	新しい環境の中で新しい友だちと出会い、聞き合おうとする	考えをだしあう



・仲間と関わり合うことを通して、創造的に運動を楽しんだり、健康なからだをつくる

レボリューション・イベント開催
対談イベント・グループ活動

9) 生活文化・技術・家庭科

17年度 生活文化・技術・家庭科 学びの概要

目標 社会との関わりを考えながら主体的に生活をつくる自立した生活者を育てる

・興味関心を持って主体的に生活に関わろうとする態度 ・生活の中から課題を見つけて取り組む意欲 ・主体的に生活をつくるため

生き方を支える力、の学び ：ミニマムエッセンシャルライフスキルを身につけ、選ぶ目を育てる	
学びを通して育てたい資質	
主な学び	
幼稚園 1年 2年 3年 4年	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のことは自分でやろうとする意欲 ・自分の体をコントロールする力 ・自分を取りまくもの（ヒト、モノ、コト）に気づき、関わろうとする気持 ・モノを大事にする心（選ぶ目の芽生え） ・学習としての集団化の意識 * ヒトやモノや自分のからだと出会い、関わる時間をたっぷり取ることで耕される底力・原体験
	<ul style="list-style-type: none"> ○生活の依存から自立（食領域） <ul style="list-style-type: none"> ・好き嫌いをせず残さず食べる （衛生・生活習慣） <ul style="list-style-type: none"> ・ハンカチの携帯と手洗いの習慣 ・健康な生活のリズムを身につける （衣領域） <ul style="list-style-type: none"> ・着替え ・たたむ （手業） <ul style="list-style-type: none"> ・はさみなどの用具を使う ・グループ学習
	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の生活に関心を持ち、自分の力で取り組もうとする意欲 ・自分を取りまくもの（ヒト、モノ、コト）との関わりを考え、自分の生活を振り返る ・家族の一員としての自覚を持ち、進んで役割分担を実行する ・自分の生活と社会との関わりを考える ・自分の食生活を振り返り、健康で元気に生きるための知識・知恵・技を体験を通して学ぶ ・How toに止まらず、文化的、科学的な見方や捉え方ができる ・仲間と協力して作業に取り組む ・身につけた知識・知恵・技を生活に生かす ・目的に合わせて選ぶ目を育てる
	<ul style="list-style-type: none"> ○生活の自立レベル1（導入：生活文化で何を何故学ぶのかを考える）（食領域） <ul style="list-style-type: none"> ○食べることの意味 <ul style="list-style-type: none"> ・体と栄養 ・食事調査 ・調理実習（計る、切る、ゆでる） （衣領域） <ul style="list-style-type: none"> ○縫い方の基礎基本 <ul style="list-style-type: none"> ・糸の付け ・手技の練習（手縫いで作品作り） ・布の性質 （家族・住領域） <ul style="list-style-type: none"> ○自分を取りまくもの <ul style="list-style-type: none"> ・生活時間調査 ・雑巾の洗い方、絞り方 <p>←（消費者教育） ○グリーンコンシューマの視点 → ・ゴミ問題を考える ・布の選び方 ・布の買い方</p>
6年	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な関心のあるモノ（おやつ、食事）から課題を追求する ・表示を読んで選ぶ目を育てる ・自分の力で作るためのミニマムエッセンシャル・ライフスキル ・自分の食生活と水環境や食糧自給率について考える ・実用性のある物を構成を理解して丁寧に作る ・これからの生活課題に目を向け関心を持つ ・社会との関わりを考えながら選ぶ目を育てる * 自分の力で生活をつくらう、選ぶ目を育てよう、とする気持ち
	<ul style="list-style-type: none"> ○生活の自立レベル2（発展：生活者としての課題を考えて、学習した事を生活に生かす）（食領域） <ul style="list-style-type: none"> ○主体的に食べる <ul style="list-style-type: none"> ・食品表示 ・献立を考える ・米、味噌調べ ・調理実習（炒める、煮る、炊く） （衣領域） <ul style="list-style-type: none"> ○ミシン縫いの基礎基本 <ul style="list-style-type: none"> ・型紙作り ・作品制作活動 ○衣料表示 <ul style="list-style-type: none"> ・洗濯表示 ・洗剤と洗濯 <p>←（消費者教育） ○グリーンコンシューマの視点 → ・表示を読んで選ぶ・水環境を考える・自給率ハ・チャルワーカー、ハガ・マップ</p>
中1	<ul style="list-style-type: none"> ・健康な食生活・住生活・衣生活・家族生活を維持する意欲を高める ・健康な住・衣生活・家族生活を維持する知識・知恵・技を学ぶ ・消費生活を経済面や環境問題から考え、知識・知恵・技を学ぶ ・生活を見通す力 ・コンピュータを使った情報処理能力を適切に行う能力 * お客様ではなく、家庭に於いて家族の一員である事を自覚
	<ul style="list-style-type: none"> ○生活の自立レベル3（発展：生活者としての自立を意識する）（衣領域） <ul style="list-style-type: none"> ・健康と衣服 ・衣環境を整える知識・知恵・技 （家族・住・消費者領域） <ul style="list-style-type: none"> ・健康と家族と暮らし ・住環境を整える知識・知恵・技 （情報領域） <ul style="list-style-type: none"> ・情報処理 ・コンピュータの基本操作 <p>←（消費者教育） ○グリーンコンシューマの視点 → ・消費生活環境を整える知識・知恵・技</p>
中2	<ul style="list-style-type: none"> ・食に関する知識・知恵・技を身につけ、生活に活かす実践力を更に高める。 ・調理実習といった体験を通して、見通す力・段取り力・創造力・忍耐力 ・仲間と協力して作業に取り組む中で、（声を掛け 合い、確認 あい、思いやり、感謝しあう）コミュニケーション力を高めたり、仲間から学び自分らしい学びを創造したり、場にあった動きがスムーズになる。 ・食全般を学ぶことから、文化・科学・環境・健康 について知識・理解・関心を深める ・ものづくりに関する基礎的な知識と技術を習得し、それらを適切に活用する能力
	<ul style="list-style-type: none"> ○生活の自立レベル4（発展：生活者としての食の自立を意識する）（食領域） <ul style="list-style-type: none"> ・食と安全、衛生・食品と安全 ・栄養 ・調理の基礎基本 ・調理実習10回（煮こむ、炊き込む、焼く、炒める、炒め蒸し） ・食文化、食とマナー ・食に関わる学、食と環境 ・食と健康と生活全般 （ものづくり） <ul style="list-style-type: none"> ・製品の機能と構造・材料の資質と特徴・製図・組み立て <p>←（消費者教育） ○グリーンコンシューマの視点 → ・食材購入や調理法や片づけやゴミの始末など一連を考える</p>
中3	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児に関する事柄を学び、保育・家族について理解する。 ・保育に必要な知識・知恵・技を身につける。 ・幼児をとりまく家族・社会への興味関心を高める。 ・友人の考え（価値観）を知り自分の考え（価値観）を深める。 ・自分や社会に目を向け、よりよく生きるとはといった生活を見通す力。（男女共同参画） ・電気エネルギー利用に関する基礎的な知識・技術の習得と保守点検能力 * 完全保護下の子どもではなく、社会の一員である事を自覚
	<ul style="list-style-type: none"> ○生活の自立レベル5（発展：今までの学習を基に幼児・家族を考える）（保育・家族） <ul style="list-style-type: none"> ・自然な日常の姿の幼児、幼児の発達段階 ・幼児服の素材・デザインおもちゃ・遊び ・幼児の食・安全な暮らし ・幼児をとりまく人的環境・家族・男女共同参画、幼児に関わる法律、施設 ・これからの生活 （電気） <ul style="list-style-type: none"> ・電気エネルギーの変換と利用 ・技術の習得と保守点検 ・3人グループ編成で学習・製作をする。（道具、工具、の準備、後片づけ、清掃を含む） <p>・幼児をとりまく消費生活環境を整える知識・知恵・技</p>

協働して学ぶポイント

主体的に学ぶ (知る・行う・学ぶ)	他者と関わり合い学ぶ、支援 (見る・知る・考える・思いやる・行う・学ぶ)	新たに広がり深まる学び (考え選ぶ・見通す・実践する)
<div>遊び 片付け</div> <div>基本的な生活習慣</div> <div>身体を使った活動</div>	<div>創造活動 仲間と遊ぶ</div> <div>生活のルール</div> <div>身体や手を使う作業</div> <div>給食やお弁当と一緒に食べる</div> <div>・自由に心を開いて遊びに没頭できる環境を作る</div> <div>・保護者と連携し学習観教育観を共有</div> <div>・学びにつながるよう集団化を図りながらも、自己が発揮できるように配慮する</div> <div>・技能面の指導、活動手順マニュアル</div>	<div>自分一人では生きていけないだから？</div> <div>周りのヒト・モノ・コトとは？</div>
<div>★キーワード</div> <div>じっくり考える</div> <div>わかるまで確認する</div> <div>落ち着いて行動する</div> <div>★キーワード</div> <div>協力、加減、賢い消費者</div> <div>(生活レポートを書く)</div> <div>学習の手引きを書く</div> <div>学習のめあて</div> <div>学んだ知恵や技</div> <div>学習のまとめ</div> <div>生活文化新聞作り</div> <div>おやつ新聞</div> <div>米みそ新聞</div> <div>家族の一員として家事分担</div>	<div>生活レポートの発表を聞き、質疑応答を行う</div> <div>おやつ会：班毎に相談しお菓子を買い、表示についてまとめる</div> <div>調理実習：4名の固定メンバーで数多く行う</div> <div>調理実習：班実習</div> <div>チェック表、保護者ボランティア</div> <div>針と糸を使って：4名のファミリー(班)</div> <div>ミシンを使って：2名のバディー</div> <div>・生活レポートの発表を聞き、質疑応答を行う場を設定する</div> <div>・実習後に班で話しあったことを発表する</div> <div>・作品を見合う</div> <div>・学習のめあてやまとめの発表を聞き合う</div> <div>・仲間の新聞を読みあう</div> <div>・お家の方コメントを聞きあう場設定</div> <div>・共有の道具・スペースを考え行うよう声かけ、教えあい学習を促す</div> <div>・キーワードを掲示しておく</div> <div>・保護者ボランティアとの連携</div> <div>・ゴミを減らす、生ゴミの水分をしぼる水や火を無駄にしないなど賢い消費者への意識を行動につなげる声かけをする</div>	<div>周りのヒト・モノ・コトにより自分とは？</div> <div>考え選ぶ権利、よりよく生きていく意味とは？</div> <div>社会との関わりを考えながら選りとり知識と技と知恵とは？</div> <div>学んだことを生活に生かすとは？</div>
<div>生活に関する課題を</div> <div>見つけレポートする</div> <div>直して着る、綺麗に着る、を知る</div> <div>家事実践後、課題を持つ</div> <div>情報基礎を知る</div> <div>実験</div> <div>(食：調理を学ぶ)</div> <div>幼児を観察し・遊んでみてレポートする</div> <div>幼児の衣食住を実験実習等で知る。</div> <div>幼児をとりまく人的環境・男女共同参画を知る</div> <div>(電気を知る)</div> <div>電気の特性を生かした作品創り</div>	<div>生活レポートの発表を聞き、質疑応答を行う</div> <div>家事実践後、体験などについて話し合う</div> <div>環境双六、環境生活レポート発表会</div> <div>光の明暗を使った通信実験を行う</div> <div>調理実習を協働して、数多く行う</div> <div>エコエコクッキングレポート</div> <div>食生活レポート発表会</div> <div>作品創り</div> <div>道具、工具、の準備、後片づけ、清掃を行う</div> <div>・ガイダンスでねらい・流れなどを確認する。</div> <div>・家庭での実践を促すべく、保護者向けに便利を出し、実践の協力を依頼する。</div> <div>・中学生として、生活の自立を意識させるべくできる事を増やし、自己肯定感を高めるよう場面を設定する。</div> <div>・環境と生活を結びつけて考えられるよう、技を伝達しあう。</div> <div>・生活に関わる仕事の多さに気付くその方法を選ぶ目を養う。</div> <div>・観察、実験、プログラミングは2～4人のグループ学習で協働を促す。</div> <div>・調理実習中、お互い言葉がけを行うよう声かけする。(確認を言葉に出して行う)</div> <div>・安全と衛生を第一に注意を促す。</div> <div>・食品を選ぶ目、食生活を選ぶ姿勢について意図的に学ぶ機会を設ける。</div> <div>・3人グループ編成で学習・製作を促す。(道具、工具、の準備、後片づけ、清掃を含む)</div> <div>・レポート回覧発表を設定する。</div>	<div>自分にとり、家族・社会とは？</div> <div>家族・社会にとり自分とは？</div> <div>考え選ぶ権利、よりよい生き方社会とは？</div> <div>考え選りとり知識と技と知恵とは？</div> <div>“生活”から何を発見し何を学ぶのか？</div>

(11) 【考察】「学びの概要」から見えてくるもの

「H13幼・小連携研究」において小学校では従来の教科を「学習分野」に改めた。幼稚園の保育の考え方を生かして、子どもの生活の中から「学びの芽」を見出し、子どもの思いや願いに応じて学習を組み立てようと考えたからである。そこでは、研究主題として特に「関わりあって学ぶ力」に焦点をあて、一人ひとりの学びが、共に学ぶ相手や学ぶ場との相互作用によって成立するととらえた。各分野で関わりあって学ぶ子どもの姿を資質・能力の面から分析して、これまでの学習指導要領にかわるものとして「学びの概要」を策定した。

本年度はこれに中学校3年間につなげ、「H13幼・小連携研究」における「関わりあって学ぶ力」を発展させて「協働して学びを生み出す子どもを育てる」を研究主題としたことを受け、〈協働〉の3つの柱「公共性」「共同性」「知性・身体性」を視野に入れて、「幼・小・中12年間の学びの概要（初年度案）」を作成した。研究に新たに中学校の教科の視点が加わったことで、相手や学ぶ場との相互作用に力点があった「学びの概要」に、時間的・空間的な文化的価値をもった学習内容を自ら獲得するという面が意識されるようになった。こうして作られたのが、本項(1)～(9)に保育分野、学習分野・教科ごとに示した1年次案である。

「学びの概要」の形式は、大きくとらえると縦軸は学年を示し、横軸には〈資質・能力〉〈協働する姿・場面〉が記されている。以下各分野・教科が作成している「学びの概要」の分析から見えてくるものを記述する。

1) 学習分野・教科の特性

各学習分野・教科が作成中の「学びの概要」は、表し方によって三つの群に分けられる。

A群：「ことば・国語」、「市民・社会」は育てたい資質・能力の中に〈協働〉を織り込む形で書かれている。例えば「ことば・国語」の「応答」の項目には、小5～中1「賛成・反対など立場を明らかにして応答する」とあるが、相手や場に対する意識を資質・能力の大事な部分ととらえていることがわかる。また「市民・社会」の「話し合い・考えの修正」の項目に小5・6「同じ主張をする他者、または違う主張をする他者と意見交換をしながら、お互いの考えを補強し合う」とあり、「ことば・国語」と同様に協働し合う場で形成される力を、学習分野・教科で育てる資質・能力として重視していることがわかる。

B群：「算数・数学」、「自然・理科」は資質・能力として文化的価値をもった学習内容の獲得していく面を重視し、「協働して学ぶこと」はおもに方法面からとらえて別枠で表示している。「自然・理科」では例えば「関わりあう学び」という項目を設け、小5・6・中1では「検証方法や考察を伝え合い、意見を対立させながら課題を解決する」と記述している。

C群：「うた・音楽」、「アート・美術」、「生活文化・技術・家庭」、「からだ・保健体育」は、資質・能力の部分にも〈協働〉が含まれ、なおかつ別の欄を設けて〈協働〉して学ぶ場やポイントを記述している。例えば音楽では、「聴く・受けとめる」の項目に高学年「各パートの響きを聴きながら自分の響きを豊かにする」とあるが、さらに「協働して学ぶポイント」として、「互いに工夫し、よりよい表現を探究する」とあり、場の設定を重視していることがわかる。

A B C三つの群は、それぞれの学習分野・教科の特性（例えば、育てたい資質・能力と学習内容との関係といったこと）を表している。すなわち学びのとらえかたが分野によって異なり、方法と内容の獲得を一体化して資質・能力ととらえる分野と、おもに内容の獲得を資質・能力としてとらえる分野があ

るということである。「関わりあって学ぶ力」の研究経緯から考えれば〈協働〉は学びそのものだが、分野によって〈協働〉のはたらきかたに違いがあることが認識された。

2) 発達のとらえかた

各学習分野・教科で、どの学年を発達の区切りと見取って指導を進めているのかが学びの概要に表れている。適時性・連続性の研究においては、学びの概要の中に区切れを教師がどのように意識するかは指導に直結する重要な課題である。これらを読み取ってまとめたものが次の表である。

分野・教科	12年間の学習分野・教科における学びの概要での区切れの時期（※「/」が区切れを表している）
ことば・国語 市民・社会 算数・数学 自然・理科 音楽 アート 生活文化・技家 からだ・保体	3～5才／5才接続前中期／後期・小1・2／小3・4／小5～中1／中2・3 幼接続期・小1・2／小3・4／小5・6／中1／中2／中3（項目によって小3／4／5／6） 3～5才接続前期／後期／小1(2学期～)・2／小3・4／小5・6／中1／中2・3（項目によって小6・中1） 幼接続期・小1・2／小3・4／小5～中1／中2・3 3才～小2／小3～6(～2学期)／小6(3学期～)中2前期／中2後期～中3 3才～接続前期／中後期／小1・2／小3・4／小5・6／中1／中2・3 幼接続期小1～4／小5／小6／中1／中2／中3（項目によって小5・6／中1・2・3） 3・4才／接続期／小1・2／小3・4／小5・6／中1／中2・3

このように、各学習分野・教科を通してみると、小学校5年が共通の区切れになっていることが読みとれる。さらに、中2と中3をひとまとまりで捉えている分野・教科が多いこともわかった。これらから、小5から中1までの発達をどのように捉えて学習を組み立てればよいのかが来年度の課題になろう。小・中の連続性を考え、接続期を位置づけるためにも重要な時期であることがわかった。

3) 2年次の研究に向けて

従来、発達心理学においては、中学校段階では思春期の子どもの精神発達に目が向けられ、学習面は知識量の増加が起ころだけと思われてきた。しかし、近年の研究で、「協同での問題解決」の視点が注目されてきており¹⁾、こうした活動を通しての発達は続くと考えられ、適時性の研究は意味あるものと考えられている。「協働」から生み出される学びが、「適時性・連続性」と相互作用しながら、子どもたちにさらによい学びを促し続けることになると考えてよいだろう。また、学びにおける適時性を「見極める方法」については、教師が一人ひとりの子どもに対応して接する場面を分析することで分かってくるのではないかと考えるが、まだ具体的な手法を見いだせない。この点を、2年次以降には実践を通して検証する必要があると考えている。

「適時性・連続性」にもとづいてカリキュラムを開発するためには、発達の中身を仮定する必要がある1)。そのためには、先行研究³⁾や、脳科学の研究動向を視野に入れ、適時性を見極めに新しい手法を取り入れて進めていきたい。²⁾

【参考文献】

- 1) 「教育内容と学習の適時性に関する研究」文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」（平成14～18年度）新世紀型理数科系教育の展開研究（14022101）A 0 1 班，2005，3，深田昭三 pp.5～10
- 2) 「脳を育むー学習と教育の科学」，OECD教育研究革新センター：編著，[訳] 小泉英明・小山麻紀，明石書店，2005.2
- 3) 「乳幼児の発達にふさわしい教育実践」〈誕生から小学校低学年にかけて〉，全米乳幼児教育協会，DAP研究会訳，東洋館出版社，2000，12

【資料】

各分野・教科の重点目標と研究仮説（平成17年度）

分野・教科	重点目標		研究仮説
	協働に関して	適時性・連続性に関して	3年間
保育	一人ひとりの特長や違いを活かし、認め合い、役割を担い合う集団の育ちを支える教師の働きかけと環境構成を明らかにする	幼児の興味・関心を広げ・深める活動内容と教師の働きかけを明らかにする 1人の子どもの中での経験の連続性、活動の連続性を探る	
ことば・国語・英語	聞いて応じる姿を追究する	応じる力の実態把握・共通の題材での授業実践 (小1から中3で比較検討)	発達段階を見通し、応じる力を高める学習をめざすことで、関わり合いながらことばの学習を創る12年間のカリキュラムを作る。
市民・社会	社会的価値判断力の育成	スパイラルに学習する単元（歴史・地理）	歴史的な内容：小学校は、人物とそこから見える景観を、中学校は時代の因果関係を考える、という小中ねらいの明確化によって小中の連続性を図れるだろう。地理的な内容：中学校の都道府県の学習では、小学校の提案”する、“経営的な視点”、“意思決定”“選択”のなどに取り組むことによって、地理的な見方を深められるであろう。（適時性、連続性に関して）
算数・数学	思考過程を振り返り、自ら課題を見つける	各発達段階に応じた数学的に論理的な思考	
自然・理科		適時性・連続性を考慮した化学分野の「学びの概要」を作製、実践する	小中スタッフが、異なる学年や校種における効果的な学習の積み重ねを検討・実践することで、身につけた概念や科学リテラシーを学習時と異なった場面で適用させることができる
音楽	多様な協働が営まれる学習形態・環境の工夫	自律した表現者を育てていくための学習環境の設定 日本音楽を中心とした12年間の流れ	音楽を幅広くとらえる（ミュージッキング）ことが、個々の子どもの表現意欲を高め、さらに集団としても質の高いものがうまれる。」
アート・美術	表現力を高めるためのコミュニケーションを育む	発達を考えた造形要素の取り入れ方の工夫	指導観の違いを明らかにし、個々の適時性に応じた学びが実現すれば、自ら表現力を高める子どもを育てることができる
からだ・保健体育	一人一人の違いが相互作用しあい、葛藤場面を超えて新しいものを創造する	スパイラルな学習と積み重ねの学習（身体接触）	異学年や異質のグループを生かした授業作りと教材開発を行い実践することにより、個々の相互作用が生かされ、関わり合いながら創造的に運動に取り組む力がつく。 保健分野では、自己表現の仕方や他者との関わり方を学ぶことが、協働した学びを創り出すことにつながり、より豊かな自己や他者と出会う力を獲得することになる。
生活文化・技術家庭	関わり合う中で、協働の意味をつかみ、生活課題解決の力を養う	主体的に生活をつくるためのミニマムエッセンシャル・ライフスキルと選ぶ目を育てる指導内容等の開発	学校や家庭で自分を取りまくものと関わりながら、生活の知識と知恵と技を学び、選ぶ目を育てることで、社会との関わりを考えながら主体的に生活をつくる力が育つのではないかと考える。

今年度	今年度の成果と課題
<ul style="list-style-type: none"> ・発達を押さえた体験の積み重ねが協働的な学びを支える ・協働的な学びを生み出すためには教師の働きかけ、環境の構成に工夫を要する 	<p>成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ○研究の柱「協働」「適時性・連続性」についてH13年度の方向性をさらに進め明らかにすることを確認できた。 ○実践事例をもとに各ステージの教師の働きかけ、環境構成についてまとめた。 ○「学びの芽」を保育分野を視点にしたもの、学習分野ごとに分類したものを作成した。 <p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ●各ステージの積み重ねを考慮した教師の働きかけ、環境の構成の要点の整理。 ●「学びの芽」を学びの概要にいかせるように、小中学校教師との連携。 ●幼小連携での学びを小中連携に活かす工夫。
<p>調査や実践事例を通し、応じる力の実態を把握し応じる力の質を明らかにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・中学までの学びの概要を作成した・小から中への接続期のとらえとカリキュラムの検討・「聞く力」の調査結果の分析と授業に生かす方策の検討・関係把握の力について英語科へのつながりを視野に検討・協働する姿を授業実践の中でさらに探る
<p>社会的価値判断力は、異なる価値観を知り、ぶつけあい、自分で判断し、視野を広げることを繰り返すことによって伸びるだろう(協働に関して)。</p>	<p>中学校での地理的分野の学習(特に身近な地域の調査、都道府県の調査)では、地理的な見方や考え方に基づいて根拠を示すという、意思決定力や価値判断力の基本となる部分は実践化を通して子どもの姿から成果を確認できた。今後は、小学校の学習との関連を考慮しながら、とりわけ「経営的な視点」「意思決定」をどのように連続、発展させるか、おそびそのための場面設定の内容をどうするかが課題である。また、意思決定力をどのように評価し、判断するか、その基準についても一層検討したい。</p>
<p>個の考えを深めるために、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題に対し、自分で見通しを持ち自分なりの考えで解決し、図や式、ことばで説明する。 ・自分の考えと友達の考えを比較し、共通点や相違点を見つける。 ・出された様々な解法の中から、課題場面に適したより良い方法を、話し合いを通して選び出し、数学的な考え方を見いだす。 	<p>小中で話し合いを進め、学びの概要を作成したことは成果である。そして、中学校の入学後に「接続期プログラム」を設定した。今後は、この「接続期プログラム」にどんな内容を盛り込むか、また、学びの概要を実践を通して、検証し深めていくことが必要である。さらに、教員が交流し授業研究をすることも考えていきたい。</p>
	<p>成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ○合同授業により学習動機向上、知識観の変容などの「協働」作用が見られた ○小中を通して適時性・連続性をふまえて学習内容を再構成し、「学びの概要」を作成することができた <p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ●化学以外の分野の「学びの概要」の作成、実践 ●評価の策定 ●学習の時期の妥当性の検証
<p>それぞれの音楽分野のプロとして活躍する人との出会い・交流の場が表現の質を高める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・実際の授業を省察し、子どもの変容や協働する姿を捉えることができた。 ・日本音楽の12年間通しての流れを実践し、確認できた。 ・プロの方や異学年との交流が音楽表現を豊かにすることが実践で明らかになった。 ・小中交換授業も含めて接続期前後の研究を深めることが課題
	<p>小中の指導感の違いが徐々に見えてきた段階である。互いに発達の特徴を伝え合う中で、その段階に見合う造形要素の取り入れ方を工夫してきた。また、小中合同授業を行い、発達の違いを生かした学びを試みる事ができた。個々の適時性に関しては抽出児を決めるなど、さらに踏み込んだ研究が必要である。</p>
<p>身体接触をともなう内容に着目して、異学年や異質グループを生かした教材を行うことにより、関わり合う力を高め、創造的に運動に取り組む力がつく。身体接触を生かした取り組みには、適時性の問題が大きく存在する。</p> <p>保健分野は、より正確な実態把握によって、他者の気持ちを踏まえつつ、効果的な自己主張のあり方(アサーショナリティ・コミュニケーションスキル)を獲得させるための保育・学習内容の必要性を認識できる。</p>	<p>公開保育や研究授業での相互の交流から、園児・児童・生徒の様子や指導に関わる担当教員の環境をみる事ができた。各担当教員の相互理解を作る基盤ができたといえる。その上で、学びの概要を作成し、育てたい資質能力とめざしたい子ども像を明確にすることができた。12年間の各教材の系統性を再考するために有効な作業となった。今後は12年間の効果的な学習内容や時期、学習の積み重ね方を仮説的に提示することが課題になる。</p>
<p>①事前実態調査②消費者教育の視点を入れたミニマムエッセンシャル・ライフスキルPart1と選ぶ目を育てる学習内容等の開発</p>	<p>協働の姿については実習後に実施したアンケートからもある程度伺うことができるが、課題は学びを日々の生活の中に生かす、実践を促す手だての検討と、ミニマムエッセンシャル・ライフスキルを子どもの主体的な学びにする教材の開発</p>

3. なかま・創造活動・総合学習における研究と「学びの概要」

本校園では、体験を重んじ、生活に根ざしたテーマを友だちと深く関わりながら、総合的に学んでいくことを目指した時間をそれぞれの教育課程の中に位置づけて、幼・小の「なかま」分野、小学校高学年の学習分野「創造活動」、中学の「総合」領域を設定した。これらの分野・領域で子ども達が学ぶ資質・能力について、適時性・連続性を考慮しながらカリキュラム化のあり方を検討した。

(1) なかま・創造活動・総合学習、それぞれの位置づけと目標

幼稚園「なかま」：保育分野の一つ。接続期以前が「ともだち」、接続期 から「なかま」に。

「ともだち」…好きな遊びを通して出会った相手との関係を育てていく分野

「なかま」…なかよしの人間関係から一歩踏み出して、目的を共有した多様な集団活動の中で互いの違いを認めあい、いかしあうような関係を育てていく分野

小学校「なかま」：小学校1（接続中期）～2年。

幼稚園生活との接続を意識し、関わりあいに重点をおいた総合的な学びを育てていく学習分野

【目標】・一人ひとりが安心して自分らしさを生かし、やりたいことが実現できる。

・まわりの人の存在を意識し、みんなで取りくむ心地よさや充実感を味わう

小学校「創造活動」：小学校3年生以上。学年体制で課題学習・テーマ学習・縦割り活動等。

体験を重んじ生活に根ざした総合的な学習を進める学習分野

【目標】・活動の中でさまざまな人と関わりながら豊かな人間性を養う。

・仲間と協働して活動する中で、互恵的に学ぶ力を養う。

・興味関心に基づき、学び方を身につけ、探究心を養う。

創造活動の運用は学年体制で行い、主に次のような活動が設定される。

○大テーマのもと学級・グループ等で展開する課題学習。○異学年で行う縦割り学習。

○一人一人がテーマをもって調べ学習に取り組む探究学習。

中学校「総合学習」：総合ⅠとⅡから編成。学びの統合の場としての総合的な学習の時間。

総合Ⅰ（協働学習による課題解決 学年総合）

【目的】・社会のニーズと自分たちの興味・関心に応じたテーマをみつけ、人や社会と関わり創造的に未来に生きていく力を身につける。

・目的に向かって、必要な情報を集め、教科や様々な場での学びを活かし、確かな個に支えられたグループ活動を通して、触発しあい、知恵や工夫を尽くして課題解決に向かってチャレンジする。

総合Ⅱ（個別課題の探究学習 自主研究）

【目的】・探求方法を学びながら、2年半にわたる個人研究を継続する。

・自分にとって意味ある課題を見つけ、意欲的に課題を追求する。課題にあった探求方法を選び、必要な情報を集め、教科やさまざまな場での学びを活かし、計画的に研究を進める。研究内容を効果的にまとめ、工夫して発表する。

上述の——部分が個から立ち上がる興味・関心を重視する「個の軸」であり、~~~~部分がなかまとともに活動する中で、個の課題・共通の課題に関わりあいながら探求していく「協働の軸」である。「なかま」「創造活動」「総合学習」においては、この二軸が絡まりあって活動が創り出されていくという共通の特徴がある。また「創造活動」「総合学習」の中に、子どもたちが各々のテーマを追究する小学校「自学」、中学校「自主研究」がともに内包される点も本附属の特徴である。

(2) 「なかま」「創造活動」「総合学習」のカリキュラム化の方向性

子どもの興味・関心から「なかま」「創造活動」「総合学習」の学習活動を創り出していくとすると、その年のメンバーの興味・関心、それまでの活動履歴によって、当然毎年活動内容は異なってくるはずである。従って、各学年のテーマ・内容等を固定化してカリキュラム化することは目指さない。その上で、年度ごとに異なり多岐にわたる学習活動を通して、子どもたちに身につけてほしい資質・能力（以下、資質・能力と略）には発達に応じて何らかの共通の指標があるべきだと考えた。そこで、幼・小・中12年間の系統性、適時性、連続性を考慮してこの資質・能力の一覧を作り、活動の指標にしていくことにした。

1) 体験・活動を通して身につけさせたい資質・能力の観点の抽出

まず昨年度の小学校の創造活動部会で作成した「学びの概要」をもとにして、「感じる」「表す」「考える」「きたえる」「はたらく」「みんなと創る」の6観点で、幼稚園、中学校まで広げて検討し、観点・及び配列に修正を加えた。また、6年生に期待する資質・能力が、中学1年生のそれより高い要求となっている点が見いだされ、連続性を考慮して修正を試みた。

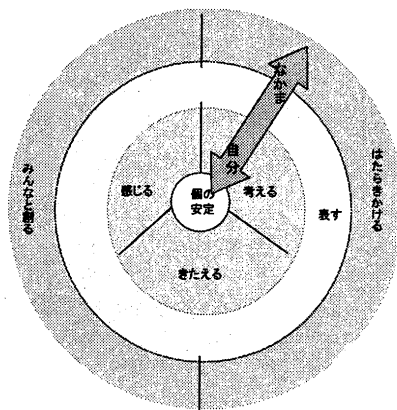
2) 6つの観点のその関係性

「なかま」「創造活動」「総合学習」で育てたい資質・能力の6観点は、以下のように規定した。

『感じる』……………出合った人やもの・ことから自分の心が動いたり、深めていこうとする。
『考える』……………活動を通して考えを深めたり、活動したことから視野を広げていく。
『きたえる』……………こだわりをもって、追求する 自分の活動を吟味して追究し、やり抜く。
『表す』……………活動の中で、自分の思いや考えを表出する。
活動を通して、自分の思いや考えを相手を意識して表現する。
『はたらきかける』…自分の役割を自覚し、責任をもつ。
活動を通して、人やもの・こと、社会へ向かって働きかけをしていく。
『みんなと創る』……友だちとのかかわりを大切に、新たな活動を生み出していく。
集団の中での自分を見つめ、自分を高めていく

この6観点相互の関係は左図のように考えられる。

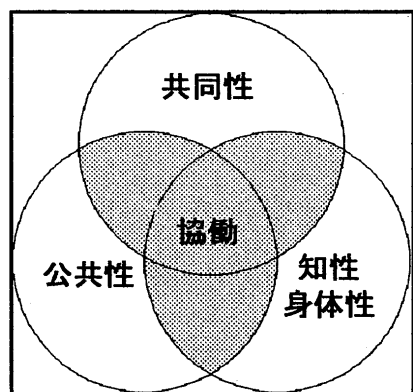
子どもたちが人やもの・ことに出会い、「おもしろそう」「自分もやってみよう」と心を動かす(『感じる』)ことから、学びは立ち上がる。「なぜだろう」「もっと知りたい」と考えを深めたり、追究していく(『考える』『きたえる』)ことで、学びが深まっていく。このとき、個の学びが、個の中に留まることなく、なかまと目的を共有して活動する中で、なかまの学びに出会い、影響しあう(『はたらきかける』『みんなと創る』)ことで、新たな面が引き出されていくのである。この



個の学びと集団の学びをつなぐ意味で、『表す』という子どもたちの資質が大きな役割を果たしていくといえよう。

なお、この図は、発達に応じて同心円状に広がっていくのではなく、幼・小・中12年間の「なかま」「創造活動」「総合学習」の学びにおいて、どの段階においても6つがこのような関係で存在していることを示すものである。

3) 「なかま」・「創造活動」・「総合学習」における協働する学びについて



「なかま」・「創造活動」・「総合学習」においては、学習分野・教科以上に、協働する学びが占める割合が高い。全ての活動のプロセスが協働する学びで成り立っているといってもよいほどである。そこで、「協働WG」が導き出してきた「協働して学び生み出す子ども」を具体化していくための3つの視点（公共性・知性と身体性・共同性）に対応させて考え、「なかま」・「創造活動」・「総合」における協働する学びを以下のように押さえることとした。様々な人・もの・ことと関わりながら、下記の3つの姿を往還しつつ、協働して学びを生み出す営みが創り出されていくように工夫したい。

共同性 一つの目的に向かってなかまと協力して活動を創り出す
 公共性 自分の考えにとどまらず、違いを認めより良いものを創り出す
 知性と身体性 経験や様々な学習から学んだことを活動に結びつけていく

協働
 互いに関わりあってよりよい活動を創り上げる。

(3) 成果と今後の課題

本学習分野・領域の実際の活動は、12年間に渡って、個の軸と協働の軸に支えられながら連続していることが確認できた。さらに、各学年の独自性・多様性を保証しながらも、12年間を通した系統性・適時性・連続性を保証するために、共通の指標「学びの概要」を、6観点を柱として提案した。また、今年度の各学年の具体的な実践に照らしてこの指標の妥当性を検討、修正した。

提案した6つの柱「感じる」「考える」「きたえる」「表す」「働きかける」「みんなと作る」に基づいて整理すると、学校種や学年に必ずしもよらない連続性や区切れが存在していると推測できた。次年度は、この指標に基づき、具体的な実践とのフィードバックにより、区切れや連続性の検討をさらにすすめるとともに、つながりが深い学習分野の学びの概要との整合性の検討もすすめていくことが課題となる。

「なかま」・「創造活動」・「総合」における学びの概要（具体的な活動を通して子どもたちに身につけてほしい資質・能力）

幼稚園	感じる	考える	きたえる	表す	はたらきかける	みんなと創る
1年・2年	人やものごとに自分から関わり、からだ全体で感じたり、思ったりする	夢中になって取り組む好きなことに繰り返し取り組む	自分の思い、楽しさ、喜びをからだで表す	関心のある人やものについて自分の思いをよせる。やってみる	自分たちで出来ることや役立つことをやろうとする。くり返し試す。	なかまと息を合わせ、いっしょに活動する
	友だちとともに活動する事を心地よいと思う みんなの中の自分を感 じる 身近なものとの触れ合 いから感じる	生活の中の様々なこと に気づく 自分のできそうなこと をみつける 生活の流れや見通しを 感じて行動する	活動の中で自分の役割 を見つけ、取り組む 新しい環境の中で、不安 や緊張を乗り越え、自分 の在り方を探る	自分の思いや考えたこ とを、からだやことばで 表す 相手のいることを意識 して、相手に分かるよう に表す	新しい環境の中で新し い友だちと出会い、聞き 合おうとする	
3年	実際に見る、動くなど、 身近な人や物との関わり から感動、興味、疑問 などをもつ	不思議に思ったり疑問 に思ったりする 自分なりの方法で活動 を思い描く	自分から活動に参加し、 自分から学ぶ姿勢を持 つ	活動を通して思ったこ とや考えたことを言葉 や絵、文などの作品で、 自分らしく表す 身近な他者に受け入れ られることを意識した 表現を行う	自分の考えを出し、意見 を交換し合う	考えをだしあう
4年	友だちとの違い・共通点 に気づく 自分の関心にこだわ りをもつ	やりたいことを決めて 活動する 活動したことから、伝え たいことをはっ きりさせる	たてた計画に沿って、活 動を進める	活動を通して思ったこ とや考えたことを言葉 や絵、文などの作品で、 自分らしく表す 身近な他者に受け入れ られることを意識した 表現を行う	自分の役割を果し、ぶつ かり合いや働き合いを くり返しながらなかま と共に目標 に向かう	なかまと1つのものを創 りあげ、活動 を進めていく なかまと協力しあい、活動 を進めていく
5年	人のためになることに 自分から取り組み、やり がい・達成感を感じる	活動を通して、自分の考 えを深める	見通しを持ちながら、ね ばり強く最後までやり ぬく	活動を通して学んだこ とをもとにして、自分の 意見や考えを身近な他 者にわかりやすい言葉 で表現する	なかまとの関わりあ いを通して、自分がやるべ きことを見つけ、実行す る	なかまの中における自分 を意識しながら、よりよい ものを作り上げていく

6 年	自分の生活と周囲の環境のつながりを感じる 見たり、聞いたり、触ったりして、実際に自分のからだを動かして、環境とのつながりを肌で感じる	活動したことから、視野を広げ、判断したり、吟味をする目を持つ 自分の活動を振り返り、次の活動にいかす	自分の活動を吟味し、自ら追求していく 自分にとって価値ある課題を見だし、意欲的に課題を追求する	他者による表現の理解を通して、自己の表現を深める	自分の役割を自覚し果しつつ、お互いの考えを広く伝えあい、行動する	なかまとともに活動をし合う中で、自分を振り返り、視野を広げていく
中学 1 年				学習の成果や伝えたいこと、自分の感情をさまざまな方法で表現する	お互いの意見を聞き入れ、話し合ったり譲り合ったりしながら、成果に向かって自分の役割を果たす	一人ひとりの力をどう生かすか、考えながらより価値あるものを創造する
中学 2 年		集まった情報や、人との出会いから得たことがらについて、なかまと意見を交換しながら考えを深めていく	課題にあった探究方法を選び、必要な情報を集め、教科や様々な場での学びを生かし計画的に活動・研究を進める	相手を意識して多様な表現方法の中から、伝えたいことや主張を的確に示す方法を選択し、表現する	社会の一員としての自覚を持ち、積極的に友人や他の人と意見や考えを交流する	
中学 3 年					活動から得たことを生かして、具体的に社会に働きかける、また、よりよい社会を創るために、貢献する	活動の中で生じる葛藤を乗り越え、合意を形成しながら、お互いの力を生かしてより価値あるものを創造する

4. 生活・学びの環境・学ぶ心のサポートに関する研究と「基本的生活力」

(1) 「基本的生活力のめやす表」の作成

子どもたちの生活実態を見てみると、学校の集団生活の中で、自分の身の回りのことができなかったり、友達や教師等と適切に関われなかったりする子を数多く目にする。子どもたちがよい方向に変わらなければ研究として本物とはいえない。そこで、基本的な生活を見直して改善を図り、心身ともに健康な子どもを育てることを研究の根底に置くとともに、人と関わりあって生活を創り出していくことを大事にするための環境整備を進めていくことにした。

1) 「基本的生活力のめやす表」の見方

「基本的生活力のめやす表」は、中学校卒業までに身につけたい基本的生活力を12年間を見通してまとめたものである。各段階終了時で身につけたい目標を、内容を「自律的生活習慣」(栄養・睡眠・安全など)と「社会的生活習慣」(関わりあい)の2つに大きく分け、中学校・小学校(高・中・低)・幼稚園の順に示した。さらに、表の項目には協働の3視点から見ての分類(知性身体性・公共性・共同性)を付記し、めやすとして分かりやすく表すことを心がけた。

基本的には、これらの内容は生活習慣であるので、日常的に慣れること、つまり繰り返しスパイラルに行っていく必要があるものと考え、一覧化にあたっては、発達(校種学年段階)に応じて、特にその時期に重点的に培う必要があると考えた内容を取り出して表している。

2) 表を作成してみて見えてきたこと

この表は、あくまでも本校園の子どもの実態から見た目標の一覧である。実態とは、例えば中学生の一部に、授業中我慢して座ってられない子がいるとか、弁当箱を持ったまま歩いても当たり前で、食べ残しがそのままだでも平気な様子が見られるなどである。この問題意識を、各校種間の共通理解が可能になるように、表の中に具体的な目標として表そうと試みた。

例えば「弁当の食べ方」は、「自律的生活習慣」の「食」・「栄養」の項目で次のように読み取れる。まず、幼稚園では「自分のための食事を快く食べる」ことを目指す。小学校低学年では「食事時のマナーを身につける」ことも加えて目標にする。そして中学校では、これらの定着の上に「活動に十分な睡眠・栄養をとり、体調を自分で管理する」と包括的に押さえようと考えて配列した。これは、例えば幼稚園では、手を洗うことの心地よさを身体で感じ、覚えることで習慣として身につけていくが、成長するに伴い、同じ行動でも自分でその必要性を判断して行えるよう、習慣化してきたものを自ら整理し直し、自分の意思で実践できるようにという考え方に基づいている。そのため表を縦に見ると、幼稚園では「自律的生活習慣」の項目が多く、発達を追うに従い項目数としては減っていく。

「社会的生活習慣」としては、関わり合いの視点から「共同性」に関わる内容が多く含まれるが、発達に応じて「公共性」の比重がやや増えていく。幼稚園から小学校低学年のうちは、身体を通して関わり合いの楽しさを感じさせること、小学校高学年から中学校への時期は、共同から公共への意識の移行がポイントと考えられる。

3) 活用の可能性 ～基本的生活力向上を目指して～

まだ試作・試行段階であるが、この表をめやすにして生活指導などの習慣形成への活用や教材化を図っていききたい。例えば、「今月のめあて」「今週の目標」の視点として活かしたり、道徳や学級活動などの課題として教材化し、子どもたちが自らの生活を振り返るときの具体的めやすとするなどの活用が考えられよう。

また、各校種間で教師が生活に関する評価の視点として共有することも有効だろう。この一覧をラミ

ネットして常備し、日常の生活指導や、通知票・指導要録の行動欄の記述の際に参照するなどの形で活用していこうと考えている。また、基本的生活力の向上には保護者の協力が不可欠であり、この表をもとに保護者とも連携して、子どもの実態に即した助言を行うことにより、基本的生活力の向上が図れるものと考えている。

(2) ケース研究による問題性の検討

1) 抽出児研究のねらい

こうした基本的生活力の育成におけるめやすの共有を進める一方で、ケース研究による問題性の分析を行った。ねらいは次の2点である。

① 幼・小・中の指導記録等をまとめることで、抽出児が過去の各年齢期に、どのような生活や学習行動をとっていたのかを一覧することで、いつどのような課題を抱えていたのかを把握し、その子が今抱える課題がどのような履歴を有しているかを理解しようとした。これは、各学年でどこに力点をおいて指導すべきかという、各校種における教師の働きかけを見直す機会にもなる。

② 子ども理解の視点を幼・小・中でできるだけ共有し、学習面だけでなく生活面においても指導に連続性を持たせていくことである。抽出児の記録をまとめることで、子どもを見る視点や記録のまとめ方、使用されている言葉が、校種や教師により大きく異なることに気づかされる。その気づきを手がかりに、子どもを見る視点の共有化を図ろうと考えた。

2) データの作成の方法

現中学生および卒業生の中から、同学年の生徒に比べて教師の目から見て課題を感じる生徒を、「自律的生活習慣」と「社会的生活習慣」の両面から数十名抽出し、その指導記録類から「出欠状況」「学習成績」「行動記録」「各種所見」「メンタルヘルス調査」等の記述を収集した。これをデータとして、学年ごとに抽出児一人一人の分析し、記載頻度の高い語句を幼稚園・小学校低学年・小学校中学年・小学校高学年・中学校の段階で抜き出し、一覧表に書き込んでいった。

3) データから見えてきたもの

例えば、A男児（「自律的生活習慣」の面から抽出）の場合「身の回りの整理整頓」という語句が、小2・小3・小5に出てくる。「発想が独創的」という語句が、小1・小2・小4・小6に出てくる。そして、中1には「よいセンスを発揮する一方で、自分の関心のないことには…」という表記があり、成長途上の子ども像が浮かび上がってくる。「身の回りの整理整頓」には関心が薄く、小学校段階では生活習慣として身につけていないことがわかる。さらに中学校でも、この傾向が続いているようなので、具体的な指導の小・中間や学年間の引き継ぎの重要性が見えてくる。

「自律的生活習慣」の面から抽出した生徒には、「集中力、持続力の欠如」「けじめがない」「私語が多い」「提出物が悪い」「整理整頓ができない」「欠席や遅刻が多い」などの記載語句のいずれか（あるいは複数）が、小学校低学年から継続して見られた。そして、学年が上がるにつれてこうした問題傾向が強くなるというより、むしろどの学年でも記録はほぼ同じトーンで書かれているといえる。毎年のように、「改善すべき点」として教師が指導を重ねていたことがわかるが、働きかけの工夫や引き継ぎの充実が一層求められるといえよう。

「自律的生活習慣」「社会的生活習慣」の両面で抽出された生徒は、「衝動的、抑制がきかない」「トラブルが多い」等の語句が加わってくる。特に男子では、中学校段階で身体が急速に成長するのに伴って心身のアンバランスが生じ、粗暴な行動などに結びつくケースがあった。

一方、「社会的生活習慣」の面で挙げられた生徒は、比較的成绩も良く「自律的生活習慣」では課題

を持たないケースが多い。「交友関係が狭い」「慎重すぎる」「几帳面」「人前に出られない」などの語句記載が小学校低学年から継続して見られるものの、教師側が課題としては捉えていなかったケースも見られる。幼少期にも萌芽的には見え隠れするものの、中学校段階で個の自立が迫られる時期にきて、問題が顕在化するケースが見られた。予防策となる積極的生活指導も必要となる。

4) データの活用

人間にはそれぞれ個性があり、個性の差は、学校という教育的配慮のある緩やかな環境の中で温かく見守られるべきである。しかし、その子どもの抱えている問題性が、将来の社会生活につながる中で、本人もそのことで損失を受けることも危惧される。保護者や担当する教師も先行きを心配してしまうような場合、発達各段階で環境の整備や教師の積極的な働きかけが必要となってくる。

だが、校種間や学年間の連絡が不十分だと、子どもの変化を連続して見るができない。また、教師側の働きかけの履歴（どういう状態に対してどう働きかけてどうなったか。結果も良い変化が見られたのか改善は見られなかったのか等も含めて）も必要となる。指導の連続性を維持するためには、なるべく次学年や次の校種の担当者にも分かりやすい、客観的な記録を残していくことが求められる。

今後は、子どもの連続性を見るときに有効活用できる指導記録等の項目を再度検討し、それについては記載の仕方自体に一定の基準や共通理解を設けるなど、指導の連続性を維持する上で有用なデータとして活用しやすくする工夫が必要である。

また一方で、「適切な時期の適切な対応」となると、すぐに成果主義に陥ったり、その子を無理にでも変えることが達成目標のようになってしまったりしがちである。だが、教育は結果がすぐに現れるものではないので、結果を急ぐことなく、10年くらいの長いスパンで、子どもの変化や成長を見ていく持続力も必要であろう。

(3) 成果と今後の課題

以上のように本年度は研究の初年度として、基本的生活力のめやす表の作成と抽出児の記録のとりまとめを中心的に実施した。これらはいずれも基本的生活力を幼・小・中で連続的に指導していく上では不可欠の作業であり、今年度にこの作業に区切りをつけることができたことで、次年度からの実践プログラム開発の土台を築くことができた。

抽出児研究から見てきたのは、自律的生活習慣については、幼少期に目についた課題を繰り返し指導していくことで、その後の生活習慣が改善される可能性が大きいことであろう。また、社会的生活習慣は、思春期になって初めて顕在化するケースが多いということであるが、その芽は幼少期にある可能性があるのと同時に、メンタルヘルスの観点からの理解も必要であろう。

次年度の課題の1つはこの点にあり、そのためには本学の四附属保健部会や四附属指導部会などとの連携が必要となってくる。その中から、社会的生活習慣面を幼・小・中で連続的に指導していく際の指針を得ることを目指したい。また、特に幼児期の指導においては、保護者の協力を仰ぐことがきわめて重要であり、今後は保護者との連携についても取り組んでいく必要がある。

さらに次年度は、本WGに課されたもう1つの課題である「接続期に目を向けた環境作り」に関して、試行的な実践を実施して行く必要がある。その際にも、「基本的生活力のめやす表」は環境を通じた支援を構築するための基礎資料として、有効に活用していくことになる。

以上の作業を通じて、校種の異なる教師同士であっても、指導観や子ども観に関してできるだけ多く共通理解が図れるように目指したい。

基本的生活力のめやす表

	自律的生活習慣 衣・食・住・マナー・安全 栄養・睡眠・衛生・心（メンタルヘルス）	社会的生活習慣 関わり合い 自分・友達・親・社会・自然
中学校	<ul style="list-style-type: none"> * 心（我慢） <ul style="list-style-type: none"> ・ TPOに応じて自分の行動や発言をコントロールできる。（知身・公） * 睡眠・栄養 <ul style="list-style-type: none"> ・ 活動に十分な睡眠・栄養をとり、体調を自分で管理する。（知身） * 安全・リスク管理 <ul style="list-style-type: none"> ・ 安全に気をつけ、周囲の状況を判断して行動する。（知身） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 必要な場合に口頭で自分の意志を相手に伝える。（自分の進退問題、断りなど）（知身） ・ 特に進路の問題で、自分の本音を話せる。（知身） ・ 保護者の意のままでなく適当な距離を置いて自分で行動しようとする（知身） ・ 自分の言い分や人の言い分を相対化しようとすることができる。（共） ・ 問題解決のために人に働きかけることができる（共） ・ 短期的なグルーピングなどで、個人的なつきあいを越えて、作業ができる。（共） ・ 周囲の話を聞いたり、動きを見たりして、適切な判断し、行動できる。（知身・公）
小学校（高）	<ul style="list-style-type: none"> * 心 <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の感情をコントロールする。（知身） ・ 年下の子の面倒をみる。（知身） * 睡眠・栄養 <ul style="list-style-type: none"> ・ 活動に十分な睡眠・栄養をとり、体調を管理する。（知身） * 安全・リスク管理 <ul style="list-style-type: none"> ・ 安全に気をつけ、周囲の状況を見て行動する。（知身） * 衣 ・ 場に応じた服装・態度をする。（知身・公） * 住 ・ 進んで生活環境を整える。（公） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ いろいろな人とかかわる。（共） ・ 仲間とのかかわり合いを楽しむ。（共） ・ 様々な人間関係の中で、自尊心を養う。（共） ・ 相手の話をきちんと聞こうとする。（共） ・ 必要なことをきちんと伝えあえる。（共） ・ 正直に話ができる。（共） ・ 目上の人に接する礼儀をわきまえる。（親、先生、周囲の大人）（公） ・ 全体を見通す力、まとめる力。（公） ・ 学校のリーダーであるという意識をもつ。（公） ・ 話し合いのルールを理解し、進める。（公）
小学校（中）	<ul style="list-style-type: none"> * 心 <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の感情がある程度コントロールできる。（知身・公） * 睡眠・栄養 <ul style="list-style-type: none"> ・ 十分な睡眠と栄養をとる。（知身） ・ 自分の適量の加減ができる。（知身） * 安全・リスク管理 <ul style="list-style-type: none"> ・ 危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方がわかる。（知身） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ かかわることが楽しい体験を多くする。（共） ・ みんなで分け合うことを心地よく感じる。（共） ・ 自分が必要とされている体験を積み重ねる。（共） ・ 相手の話を最後まできちんと聞く。（共） ・ 必要なことをきちんと伝える。（共） ・ 友達との関わりに必要な言葉をきちんと使う。（共） ・ 身体的な接触も大事にする。（知身・共） ・ 目上の人に接する礼儀をわきまえる。（公）

	<ul style="list-style-type: none"> * 住 ・自分の物の管理ができる。(公) 	<ul style="list-style-type: none"> ・年下の子の面倒を見る。(公) ・話し合いのルールを守る。(共・公)
小 学 校 (低)	<ul style="list-style-type: none"> * 心 ・安心・安定して学校に通える。(知身・公) ・体を動かすことを快く感じる。(知身) * 睡眠 ・十分な睡眠をとる。(知身) * 衛生 ・排泄のコントロールができる。(知身) ・身体を清潔にする。(知身) * 栄養 ・好き嫌いなく食べる。(知身) * 食 ・食事を楽しむ。(知身) ・ある程度の配膳ができる。(知身・公) ・食事時のマナーを身につける。(手洗い, 身だしなみ, 食べ方, 箸の持ち方, 話し方, 片づけ方)(知身・公) * 衣 ・衣服の着脱がしっかりできる。(知身) * 住 ・後かたづけがしっかりできる。(公) * 安全・リスク管理 ・危険な場所, 危険な遊び方, 災害時などの行動の仕方がわかる。(知身) 	<ul style="list-style-type: none"> ・誰とでも自然にかかわる体験を楽しむ。(知身・共) ・からだ全体で相手とかかわる体験を重ねる。(知身・共) ・相手のことを考えて我慢する。(共) ・信頼感をベースに教師と接する。(共) ・生き物とのふれあい(知身) ・責任や役割を果たす心地よさを感じる。(公) ・少しずつルールを決め, ルールを守ることができる。(共・公)
幼 稚 園	<ul style="list-style-type: none"> * 心 ・安定して自分の好きな遊びに取り組む。(知身) ・戸外で体を動かして遊ぶ楽しさを知っている。(知身) * 睡眠 ・健康な生活のリズムを身につける。(知身) * 衛生 ・清潔…うがい, 手洗いを自分でする。(知身) ハンカチ, ティッシュを持ち, 使う。(知身) ・排泄…自分で用便を済ます。(和・洋式)(知身) 活動の切れ目に用便を済ます。(知身・公) * 食・栄養 ・食事…自分のための食事を快く食べる。(知身) * 衣 ・自分の衣服は自分で着脱する。(知身) ・脱いだものを畳み置き場所にしまう。(知身) * 住 ・身の回りのものの始末を自分で行う。(知身) * 安全・リスク管理 ・危険なものや場所, 危険な遊び方, 災害時などの行動に気をつけようとする(知身) 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の動きを見たり, 場の状況を受けとめたりしながら, 自分なりに考えて行動しようとする。(知身) ・全体に話されることばを, 自分に語られていることばとして聞く。(知身) ・学級や学年での活動を通して, 一つのことに取り組む心地よさや充実感を味わう。(知身) ・友達や教師に対して共に生活しているなかまという気持ちをもつ。(共) ・友達一人ひとりの持ち味, 興味生活の違いがわかり, それぞれ認め合うようになる。(公) ・役割を担い, 人の役に立つうれしさや, 生活をつくっていく気持ちをもつ。(共) ・自分のものも人のものも, みんなのものも大切に思える。(公)

注：() 内は「協働」の三視点【知身：知性身体性 共：共同性 公：公共性】を表す

5. 各校園における初年度の研究

(1) 接続期に関する実践・研究

1) 幼小の接続を考慮した学びをつくる（小学校1年）

子どもたちは、大きな期待と小さな不安を抱えて小学校に入学してくる。教師が真っ先に配慮することは一人ひとりの子どもに「安心感」を持たせることである。友達がいて教師がいる教室という「小さな社会」をどうつくるかが重要である。教師の仕事は教室の中での「関わりあい」をどう組織するかということから始まる。そのために、子どもと教師の関わりよりも子どもと子どもの関わりを大切にしていきたい。まずは「ファミリー」と呼ぶ男女2人ずつの4人グループ作りをする。日常生活の対話はファミリー周辺から始まる。何でも言える環境から、その場所での安心感が生まれる。

自由に表現できるようになると、当然意見のぶつかり合いが出てくる。相手の考えを受け入れたり、自分の考えを主張したりしながら、「折り合い」のつけ方を学ばせたい。しかし、現状は言いたいことは言うが、聞く耳を持たない子が多い。友達の考えをよく聞き、それを踏まえて建設的な考えが持てる子どもを育てようと考えている。

子どもたちは、幼稚園卒園から数週間のうちに、遊び中心の生活から、学習中心の生活へと切り替えられるものだろうか。このギャップの大きさに戸惑いを感じ、成長が停滞する子どもが出てきても不思議ではない。そこで、平成13年より幼小連携研究として、幼稚園の年長後半から小学校の一年生の一学期までが特に大事な時期であるにとらえ「接続期」と名付けてカリキュラムを作り、実践を進めている。今年度は、これまでの研究を継続するとともに、具体的な手立てとして、教室やワークスペースの生活・学習環境の工夫や、先に述べたようなグループ編成の工夫・活用をしてきた。

教師や友だちとの距離を近くすることに配慮し、入学時から机の配置をコの字型にしてスタートした。教室中央に広い空間がとれることで、いつでも40人が集まり床に座って話し合えるようにしたため、入学時の緊張が和らいで安心している姿が見られた。学習の内容や形態によって、ファミリー4人組で向かい合ったり全員が中央を向いたりを繰り返し、GW明け（接続後期）からは、前向きとコの字型とを適宜使い分けながら過ごしてきた。個々の学習に取り組むときは、一人一人の机があり、友だちや教師と少し距離を置くことが安定と集中を促すことがわかった。安定した学校生活を送りつつも、安心してかわりを広げながら学習に取り組むためには、教室内に近い距離と遠い距離を織り交ぜることが重要であるということが明らかになってきた。

また、からだに染み込む体験活動を多くしながら学習分野へのスムーズな移行を目指してきた。そのために、学習への親の共同参画も多く取り入れてきた。学習時間を弾力的に扱いゆったりとした生活を送れるように配慮し、子どもの生活の中から出てくる学習の素材を適宜拾い上げ、学習分野につながる活動として組織するように工夫した。友だちとともに活動する中で心とからだ動き出し、次の学習課題が生まれるようにしてきている。

例えば、4人が床に座り向き合って話し聞き合う「ファミリーでお話」という時間を設けたことで、4人の関係が密になり、自ずと自己表現することができた。近くにいる人とフランクに話すことを経て大勢の前で話すことへの移行も無理なくできた。また、自然の中に繰り返し連れ出すことで、実物を媒介に友だちが広がり、また友だちの影響で自然への関心も高まった。自分で育てたアサガオやギンナンを数えたり、保護者の田舎からいただいた実のついた柿の枝を使って、「14個の柿の実から、6個もぎ取る」場面を実際に行いながら引き算の学習をしたりするなど、タイムリーな学習を展開した。

2) 中学校につなぐ子どもの学び (小学校 6 年)

① 6 年生が置かれている時期的な位置 (適時性と連続性)

6 年生の置かれている時期的な位置は、当然のことながら彼らの学びのあり方を考える上での大前提となりうる。すなわち、6 年生は、小学校と中学校の狭間にあり、今後のための意味ある学びを考えれば、中学校への接続を考慮せざるを得ない。どの学年においても、その学年の中だけで完結するような学びのあり方は考えられず、その前後をふまえた上での学びの「適時性・連続性」のはずである。ことに、中学校という新しい環境への進級を間もなくに控えた 6 年生としては、今の学びのあり方を考える上で、中学校への接続ということが重点的に考慮されなければならないと考える。言い換えれば、現在、いかなる学びのあり方を求めるべきかという課題 (適時性) は、多分に、中学校とどう接続を果たすかという課題 (連続性) と結びついているということである。

② 中学校とどう接続を果たすか (連続性)

中学校とどう接続を果たすかという課題を追求する上で、最も考慮されなければならないことは、この接続の中で、児童・生徒が学習意欲を持続し、教師の側からは十分な教育効果が上げられるということだろう。そのための接続の方向として、なだらかな接続と段差のある接続の 2 つを意識して実践に当たってきた。

6 年生部会としては、上記どちらの接続も必要ととらえ、教育的な意図に応じて適用されるべきものと考えている。一例を上げれば、児童・生徒の心理的な安定のためには、なだらかな接続の意義が大きいき、学習活動への強い目的意識を培うためには、段差のある接続の可能性も期待している。

③ どのような面での接続を考えるか (児童の協働の姿とともに)

前項では、中学校への接続に関して、基本的な 2 つの方向について示した。次に、児童の生活や学習のどのような営みにおいて接続が図られるかを示したい。児童の営みについては、児童の人格の中に、階層的な構造に似たものを想定することにより、①心理的な安定 ②認知的な営み(学習) ③ものの見方 ④実体験 の面から分析した。これらは、児童の実際の営みと対応し、その中で、児童の協働の姿も検討することができた。

④ 接続の仕方の深化について

これまで、附属中学校との交流を通じて、中学校との接続は児童の進級によっていきなりなされるのではなく、6 年生児童に、中学校生活の当事者としての意識に至る、中学校との関わりの深化というものが期待できるのではないかと考えるようになった。その深化の過程が示せれば、今後の具体的な活動のガイドライン作成にも生かせるかもしれない。

⑤ 今後の研究について

以上で、6 年生部会の研究の骨子について示したが、今後はさらに、以下の視点からも中学校との接続を研究していく必要を感じる。

ア 小学校と中学校間における、発達上の段差についての検討と、カリキュラム上での対応

- ・大きな段差の存在が認められれば、接続期カリキュラムで「軟着陸」を図る。
- ・段差が非常に小さいものであれば、小・中で、重複を避けたカリキュラム編成を。

イ 小・中教師の、児童像・指導観の調整

ウ 小学校から中学校への提言、または、その逆の場合

(2) 協働して学びを生み出す子どもを育てる実践・研究

1) 協働的な学びを育む(幼稚園)

① 4つの保育分野と協働的な学びについて

本園では、「H13 幼・小連携研究」において、幼稚園の生活における「関わりあい」を成り立たせている構成要素を探る中で、「からだ」「もの」「ことば」「ともだち・なかま」を実践を組み立てていく上での「保育分野」として位置づけ、教育課程を編成した。4つの「保育分野」の内容は、園生活において子どもが様々な体験・活動を選び取って積み重ねる中で、総合的に指導するものである。

今回の幼小中の研究では、「協働して学びを生み出す子ども」の育成にあたり、「共同性」「公共性」「知性・身体性」という3つの資質・能力を重点的に育てようとしている。

4つの保育分野の根幹を成す「心と一体化したからだ」は、「協働」の3つの資質・能力のうちの「知性・身体性」の「身体性」とそのまま重なる内容である。子どもたちが幼稚園生活の中で学びをひろげていく上で、心と体が一体となり、安定していることが、何よりも大切なことだと、私たちは考えている。それは幼児期だけのことではなく、その後の子どもたちの学びを支えていくとても大事な基盤となっていくものである。「ともだち・なかま」の分野では、人との関わりの中で、力を合わせたり、心を通わせ合ったりすること、あるいは、友だちと自分との違いに気づき、その上で、互いに認め合えるようになることを内容としているが、「共同性」や「公共性」にそのままつながるものだといえる。また、「ことば」や「もの」の分野については、「知性・身体性」の「知性」の部分につながると考えられる。さらに、「ことば」「もの」の分野には、知識・概念としてだけでなく、関わりをつなぐ媒体としての役割も含められており、「共同性」「公共性」にも密接に関わった分野だといえる。

② 幼稚園教育における適時性・連続性について

幼稚園教育は、常に適時性・連続性を最重要のこととしている教育である。これまで家庭で生活している子どもたちの生活経験、発達、興味・関心はそれぞれに違っている。教師は、その子どもが何に興味を持っているか、何に意欲的に取り組んでいるか、あるいは何に行き詰っているかを見極め、そのことに充分取り組むことがその子どもにとっての適時性のある学びにつながっていくと考え、一人ひとりに応じて教育をすすめている。また、幼稚園生活における子どもたちの学びは、短いスパンでとらえていくことはできない。来る日も来る日も同じ遊びを繰り返したり、同じような生活経験を積み重ねることによって、子どもたちは学びを深めたり、確かなものにしていっている。昨日から今日へ、今日から明日へ、子どもたちの学びは日々の連続性の中で培われていく。

本園では、「H13 幼・小連携研究」の際に、入園から修了までの全期間の生活を視野に入れて幼稚園の生活を捉えなおし、それぞれの子どもたちの成長・変容にしたがって、5つのステージを指標に子どもたちの生活を押さえることにした。5つのステージを大きくくくりとして、「出会い・安定」「葛藤・探求」「協力・創造」の3つにまとめて考えている。個々の子どもの発達の状況、生活実態、関心をステージ(それぞれの子どもの生活、活動の舞台)としてとらえ、発達の過程の見通しをもちながらも、「現在進行形」で子どもたちの「今」を肯定的に支え、そこから、その子らしく前向きに生きられる生活を積み重ねていくとするものである。教師がともに生活する者として、個々の子どもの生活の舞台に立ち会い、子どもの中に育ちつつあるもの、その子どもにとって適時なものに焦点をあてて、それぞれの「今」を充実させていくことを通して、一人ひとりの成長・変容、学びの広がり・深まりをうながしていくとするものである。このステージの考え方のもと、本園では、子ども一人ひとりに応じた適時性のある学び、日々の生活の中での連続した学びを導こうとしている。

③今年度の研究の重点

5歳児後半（私たちは、この時期を「接続前期」ととらえている）の協働的な学びは、入園してから幼稚園生活の連続性の中で生みだされていくものである。接続前期に、協働的な活動をより豊かに展開していくためには、「出会い・安定のステージ」、「葛藤・探求のステージ」、「協力・創造のステージ」で何を大事にしてどのような保育を積み重ねていけばよいのか、今年度の実践事例をもとに、協働的な学びへの道筋を明らかにすることに重点を置き、研究をすすめてきた。

④協働的な学びへの道筋 ～各ステージの実践から～

各ステージの保育と、「協働して学びを生み出す子ども」を育てる3つの資質・能力との関係を明らかにしながら、各ステージにおける教師の働きかけ、環境構成の要点についてまとめる。

出会い・安定のステージは、一人ひとりが身の回りにあるものや人に出会い、心を動かし、自分なりに五感を働かせて、からだを通して関わっていくことが、何よりも大事なステージだといえる。3つの資質・能力で言えば、「知性・身体性」の特に「身体性」を重点的に育んでいく時期だと考える。

出会い・安定のステージでの教師の働きかけ、環境構成のポイントは、今回取り上げた事例からは、

- 自分なりにやろうとしたことを認め、教師が安心の拠り所となりながら、楽しさを共感する
- 教師も一緒に動き、からだで感じ共感する
- 新たなものや友だちと出会う機会に寄り添い、支える の3点があげられる。

葛藤・探求のステージは、好きな遊びを通して、ものや友だちとのさまざまな出会いを重ねる中で、次第に自分と友だちとの違いに気づき、戸惑ったり悩んだりすることも多くなるステージで、3つの資質・能力で言えば、「公共性」の芽生えの時期ととらえることができる。

葛藤・探求のステージでの教師の働きかけ、環境構成のポイントは、今回取り上げた事例からは、

- 子どもたちが、自分で考え、判断して生活できるように支える
- 「もの」の活用を工夫する
- 教師もともに楽しみながら、子どもたちといっしょに創り出しいく雰囲気づくりを心がける
- ともに暮らす友だちを意識できる場作りに配慮する の4点があげられる。

協力・創造のステージでは、共通の目的をもって活動することや、なかまと役割を分担したり協力したりして目的に向かって活動することも増えていく。3つの資質・能力の「共同性」に視点をおいた活動を通して、「公共性」・「知性・身体性」の質を充実させていく時期だと考える。

協力・創造のステージでの教師の働きかけ、環境構成のポイントは、今回取り上げた事例からは、

- つながりを意識的に創りあげる
- それぞれが自分の役割、居場所をもてるようにする
- イメージを共有する場をもつ
- 子どもたちと見通しを相談しながら進める の4点があげられる。

「協働的な学び」「協働的な活動」とは、結果が先にあるものではない。上記に示した3つの資質・能力、ポイントを意識しながら、一人ひとりの子どものその時々を受け止め、そこに教師の意図や願いを重ねながら、子どもたちと共に一つひとつの活動や関わりを丁寧に紡いでいく過程を大切にしたいと考えている。そうした過程にこそ、私たちが考える「知性・身体性」「共同性」「公共性」の3つの資質・能力を伴った「協働」が生み出されていくのではないだろうか。

2) コミュニケーションを楽しむ子どもを育てる(小学校2年)

①協働して学びを生み出す子どもたち(発達段階からみた適時性・連続性)

小学校に入学して1年間、子どもたちは友だちも学びも大きく広げてきた。一人で学ぶことより、共に学ぶ仲間がいる時に子どもたちは生き生きと活動する。これは2年生という学年が遊びと学びとを分けて意識するのではなく、同様なものとしてとらえている発達段階であることが大きい。共に活動する仲間がいることが、学びでも遊びでも重要な要素なのだ。協働して学ぶことを積み重ねることで、仲間と共にいる安心感、仲間と共に学ぶ喜びを感じ、次の学びのエネルギーにしていくのだ。このような学びの連続の中で協働して学ぶ子どもたちは育っていく。

上記のような発達段階である2年生であるが、協働した学びがはじめからうまくいくわけではない。本学年の実態を見ても、協働して学ぶことが充分できているとはいえない。友だちに自分の本音を言えない、目を見てはなせない、うまくいかない時に避けてしまうなど、協働して学ぶための基礎となる友だちと関わるのが充分身に付いていないのだ。そこではじめにアンケートを採り協働に関する子どもたちの実態を把握することにした。それをふまえた上で「コミュニケーションを楽しむ子どもを育てる」と研究テーマを設定した。

②実践の視点

コミュニケーションとは、相手の信号、表情や言葉を受け取り、相手に自分の信号を言葉や表情で送ることである。人や家族や友人、周囲の人たちと関わる時に基盤となるのが、言語やからだの五感を使うコミュニケーションである。人間関係の深まりにはこのコミュニケーションが大切になってくる。この研究テーマのもと、子どもたちがコミュニケーションを楽しむ手だてを検討し考察を重ねてきた。手だての視点は「言葉のコミュニケーション」「からだのコミュニケーション」「協働を生み出す学びの場」とした。

子どもたちのなかには、友だちの目を見て話ができない、友だちの話を共感的に聞けない、また友だちと手を握れない、一緒に遊べないなどコミュニケーションの基礎的なことが苦手な児童がいる。このような実態から「言葉のコミュニケーション」「からだのコミュニケーション」の視点を設定した。また、そのコミュニケーションを磨く場として「協働を生み出す学びの場」を設定した。言葉やからだのコミュニケーションが、ある限られた場面だけでできるのではなく、友だちとぶつかりながら、一つのものを協働して創り上げる学びの中で生きて働いてこそ本当の力となる。このような場で自分のコミュニケーションを磨き、楽しむ子どもたちに育てたいと考えた。

③実践の考察

言葉のコミュニケーションでは、小集団でのさまざまな話し合い場面を取り入れてきた。話すこと、聞くことに対する抵抗感はなくなり、コミュニケーションを楽しむようになった。ただ形式にたよるあまり子どもの言葉が自分の言葉でなく、原稿を読む言葉になってしまったり、聞く子どももメモして聞くなどしたためか、目を見て聞くことができないことがあった。このような反省から来年度は自分たちの話したいことをもう少し自由に話す場面を多く作っていきたい。

からだのコミュニケーションは体の時間中心に行い、子どもたちも楽しんで取り組んだ。これからはからだの時間以外でも子どもたちが体を使ったコミュニケーションを楽しめるようにしたい。

協働を生み出す学びの場は学習の要所で設定し、子どもたちはその中で友だちと協力して学ぶことができるようになってきた。このような学習場面は大切であり、このような学習を積み重ね経験することで協働して学ぶことが出来るようになってくることも分かった。来年度も子どもの発達に合わせて研究を進めたい。

3) 表現が行き交う教室（小学校3年）

①協働して学ぶ～公共圏での学び～

3年生は、こだわりを持って自分の興味の世界へどんどん進もうとするエネルギーを持つ。仲間をつくって行動したがるが、その集団は流動的で、他者との新たな関わりあいが始まる節目と捉える。

興味や関心が異なるひとり一人が、教室の中で対話し、互いに影響を受けながら学びあうことが協働の姿である。それは何気ない日常の授業の中で幾つも表れ、ことばだけでなく、表情やからだ・雰囲気からも感じ取ることができる。私たちは協働した学びを育むために次の3点を大切に考えた。

- ・誰もがその学習に参加していけること
- ・異なる考え、異質な人々が、排除されずに尊重される環境を整えること
- ・一つ一つの小さなできごとを積み重ね、長いスパンの中で子どもの変容をとらえること

②「表現が行き交う教室」を目指して

ア. 「聴きあう」ことが表現の源

「聴く」という行為は、他者の言葉や行動をからだで受けとめ、自分の内面にある言葉や感覚と結びつけながら、新たな思いを持つ能動的な表現行動である。表現が行き交うためには、まず教師自身が子どもの声を「聴く」こと、そして教師同士が対話し、互いを尊重し「聴きあう」姿勢を持つことが大事だと共通に確認した。学年全体の授業をデザインする上では、次の2点を考慮した。

- ・学習分野をつなぐ
- ・ちょっと未知の世界・背伸びとジャンプの環境を設定する

イ. 実践例からの考察

教師の専門性を生かしながら、学びが学習分野ごとにとぎれずに、子どものなかでつながっていくような学習構成を工夫した。創造活動「大江戸発見ウォーキング」では一斉学習だけでなく自分たちが選んだ19の課題のもと実際に職人さんに会ったりして多くを学んだ。興味はさらに膨らみ、他の学習分野の学習とも関わり合って、多様な表現行動が生まれた。

A. 職人さんとの触れあいを始め、少し距離のある他者とのよき出会い（江戸囃子、江戸伝統工芸の職人、相撲見学など）は、個々の表現を触発する。「聴きたい」という思いが生まれ、他者を受け止め、感じたことを外に表す表現行動（アクション）となって表れた。このような学びの連鎖が、個人の表現を豊かにするとともに、そこに集う集団の表現を高めていくことを実感した。

B. 学びは創造活動に留まらず、学習分野と深く関わった。例えば、音楽で太鼓を楽しんだ経験はからだに蓄えられ、大相撲の跳ね太鼓に反応して聞こえたままに口ずさんだり、「太鼓博物館」を訪れ世界の太鼓に目を向けたりした。また、等尺年表で江戸という昔までの時間を感じたり、市民の見学でインタビューの仕方を学んだり、ことばの時間に他者に向けての発信の仕方を学んだりしたことは、大江戸発見ウォーキングの学習をまとめていくときに、大きな支えとなった。

C. 聴き手の好意的な反応が、さらによりよく伝えたいという次への表現意欲をひきだした。

③学年研究の評価

事例を話し合うなかで、子どもの様々な表現行動を共通に理解することができた。それぞれの実践に少し柔軟性がでてきたように思う。異なる語り口の教師のビジョンと実践。「聴きあう」ことを意識するようになって、教師一人ひとりの表現が、学年の中で行き交うようになったところである。

今後の課題としては以下の点が挙げられる。

ア. 教室の中で「聴きあう」ことを深めるために必要な静けさと息づかいを感じ取るからだづくり。

イ. 学習環境（学習材・内容・方法）の工夫と子どもの表現行動の源（why）に心を配る教師の姿勢。

4) 安心して思いを表現できる仲間作り（小学校4年）

①協働して学びを生み出す子どもの姿をめざして～テーマ設定の理由と取り組み

ア.「安心して思いを表現できる仲間作り」～「安心して」とは葛藤を乗り越える姿を含む

学年当初、子ども達の様子から「安心して居心地のよい」場が必要と感じていたが、実践研究を進めるにつれ「安心して」とは葛藤を乗り越えることのできる集団を支え、支えられる状態と考えるようになった。そこで自分とちがう他者の存在を意識しながら相手の反応を受けとめ、ちがいを意味あるものとしてとらえられる仲間づくりをめざそうと考えた。

イ. 協働して学びを生み出す子どもとは～互恵的な学びを

中学年になると友達の発言や発表をよく聞き、情報を共有するという互恵的な学習も自覚的にできるようになる。友達のことが気になり、葛藤も生じる時期だけに、「協働して学びを生み出す子ども」を、みんなが集まった場での発言や発表を大事にし、みんなの学びの共有物として活用し、意見のちがいやぶつかりあいを経て活動を生み出す子どもととらえ、高学年への接続としても大事な時期として、思いや考えを出し合う場面を多く設け、場でのやりとりから学ぶという姿勢を育てたいと考えた。実践研究は学年協力担任のよさを生かせる創造活動を中心に、各分野の学習との関連も図りながら、活動の積み重ねによる子どもたちの変化を見守ることにした。

②今年度の取り組みと子どもたちの変化

ア. 創造活動「紙」

創造活動は他の学習分野にも増して、子どもとともに活動を作る部分が大い。今年度のテーマは「紙」である。相談の上「紙を知ろう」「紙を作ろう」「紙で作ろう」というアプローチを計画した。

イ.「紙を知ろう」（1学期）

「紙を知ろう」では、「紙」について調べたい事柄を出し合い、グループで調べる活動を行った。発表会の場では、相手の発表を受け止め、質問できちんと返すために「キャッチボール」をめあてにした。つまり「相手との間で一つのボールが行き来する（質問の内容がずれない）」「一往復にとどまらない（何回質問してもいい）」「ピッチャーとキャッチャーは味方どうしである（自分たちのために質問してくれている）」。子どもたちは情報を共有することの有効性、情報は受け手がいてこそ生かされること、情報の発信者にも利益があることを学んだ。

ウ.「紙を作ろう」（2学期）

次に和紙をすく体験に出かけた。すると子どもたちの間に「自分たちも紙を作りたい」という意欲が高まり、実際に行った。紙作りは、2週間おきに3回。活動の間には「情報交換会」を行った。ここでは失敗の体験も重要な情報と認識させ、安心して伝えられるよう配慮した。この情報交換は、その後の活動に大きな効果があったといえる。3回目を終えて子どもは「みんなでするのは大変。一人でやったほうが楽。でもみんなで考えてすることは大切とわかった」と書いていた。

③成果と課題～次のステップに向けて

違うことを肯定的に「違う」と認め受け止めること、そこから仲間作りを見直すことをめざしてきた。特に意図してきたのは、お互いに自分の思いや考えを発表し、聞き合う機会を作ることであり、それを積み重ねることである。2学期の「紙作り」でとった方法「活動と、その活動に直接結びつく工夫や体験から得た情報の交換を繰り返す」ことにより、子どもたちがお互いの情報や考え、こだわりを肯定的に受け止め、生かし合おうとする姿が見られたこと。これは関わり合うものの異質性を容認し、ぶつかり合いによりお互いを高め合おうとする「協働」の視点に通じる成長であると捉えている。さらに様々な場面を通して自分の思いや考えを伝え、受け取れる仲間作りへの模索を続けたい。

5) 自立(律)する子に寄り添って(小学校5年)

①「協働して学びを生み出す子ども」全体研究テーマとの関連

5年生は、担任4名・副担任1名で、児童129名(帰国児童12名を含む)4クラス編成でスタートした。4年生のとき帰国児童は単独学級だったが、5年生では各クラスに数名ずつ分散した合同学級方式である。彼らが海外で学んだことを生かすとともに日本の学習環境への適応を図り、さまざまな体験を通して帰国・一般双方に互恵的な学習・生活を展開することが、5年生合同学級の年間を通じた大きな目標である。そこで、協働をどのような実践課題につなげるのか、まず担任団でよく話し合った。

- ・協働して学びを生み出すには、そこに関わる人がそれぞれ自分を表現することが大切だ。
- ・差異を恐れたり隠したりする精神からは、自分の考えや意思を表現する力は生まれない。
- ・違いを忌避しないためには、各自が自分の存在に自信をもち、意志をもつことだ。

こうして、協働の基盤であると思われる自立(律)を、実践のテーマにすることになった。

②子どもの実態から、自立(律)を定義し、指導の方針を決めた

子ども達の特徴として、知識や情報を増やすことにはかなり積極的だが、新たな問いを生み出すこと、知識をもとに自分なりの解釈や判断をして集団の一員として自覚的に行動することに弱い。「自律(自分をコントロールすることができるようになること)」を支える自立の三要素として、生物的な自立(食事・着替え・排泄など)、社会的な自立(きまりを守る・仲良くするなど身の回りの集団作り、その一員としてどう考え、生きるか)、政治的な自立(自分が所属していない他の集団とどのように関わるか、異質な意見とどう関わるか)があると私たちは考えた。一部の学習分野に研究対象を絞るのではなく、さまざまな学習や生活の場において、子どもが主体的・対話的に、意思決定・判断・実行を行えるよう、各担任が責任をもって自分の実践を工夫した。

③実践例からの考察

からだ「エキサイティングボール」では、身体接触を伴わざるを得ない新しいゲームを、個々の対戦だけでなくチームとして組み立てていく知恵の出し合いのなかで、自立と協働が生まれる様子がよく見えた。運動量や技術の高めあいというような「体育科」の視点以上に、下記のような自立を促す活動の保障や、教師の意図的な声かけが重要であることがわかった。

- | | |
|---------------------|-----------------|
| ○自分一人で行動する場面を乗り切る | ○自分たちの手で活動を進行する |
| ○自分の行為に夢中(徹底できる)になる | ○自分の感情や力を調整する |

なお、他分野での実践もふりかえり、自立(律)を促す指導のポイントを洗い出してみた。

- ファシリテーター(促進者)としての教師の力量をつけること
- どうしても夢中になってしまう、熱中する学習内容の工夫
- 子ども自身の試行錯誤をプラスに見取って励ますこと
- 学習終了時に、子ども自身による学習の意味づけ、ふりかえりの言語化を習慣にすること

④学年研究の評価

教師が「子どもの自立(律)」を意識することによって、子どもの学習活動は対話的なものが増えた。特に弱いとされる「異なる意見・立場とどう関わるか」の部分で、対話や話し合いは効果がある。自分の考えに責任を持つこと、自分の考えをきちんと説明でき、それに対する批判的意見を受け入れられること、つまり自立は批判的他者があってこそ育まれることがわかった。価値判断や意志決定のものさしを協働的な学習のなかで創ることが、自立への道筋であり、そのための授業や単元の工夫にはさらなる開発の余地があることもわかった。今後の課題としたい。

(3) 中学校における新教科構想

1) 新教科設置に向けて一現行カリキュラムと生徒の実態を踏まえて

現行学習指導要領においては、総合的な学習の時間のねらいとして、「各教科、道德及び特別活動で身につけた知識や技能等を相互に関連づけ、学習や生活において活かし、それらが総合的に働くようにすること。」とあるが、現状では実施においては難しい実態も報告されている。

中学校では「総合」領域において、「道德・特別活動」「総合Ⅰ（学年総合）」、「総合Ⅱ（自主研究）」を設定し、内容を「総合カリキュラム」として計画し、前期・後期で組み立てながら実施している。

そのなかで「総合Ⅰ」を、学年主体で取り組むことが多いので「学年総合」と呼び、目標を次のように設定している。

自分たちが生きている社会のニーズと自分たちの興味・関心に応じたテーマを見つけ、人や社会と関わり、創造的に未来を生きていく力を身につける。目的に向かって、必要な情報を集め、教科や様々な場での学びを活かし、確かな個に支えられたグループ活動を通して、触発し合い、知恵や工夫を尽くして課題解決に向かってチャレンジする。(2002年)

各学年における「学年総合」において、取り組むテーマについては教師側である程度設定しながらも、活動の中心になる「総合学習係」や「総合学習実行委員」といった生徒が推進役となり検討し、当該学年の生徒の総意で最終的に決定し取り組むという形態をとる場合が多い。生徒の主体的な活動を中心としてすすめる形をとりながら、本校では一定の成果を上げてきた。

しかし、生徒の推進する力も変化しており、教師が求める子どもの資質能力が十分に育てきれないために、任せられる部分が増えている実態もある。

前述の目標を達成するためには、教師の手立てを再検討する時期にきていると考えた。すなわち、「教科」領域で生徒全体に力をつけ、どの生徒も意欲がもてるような手立てを施し、役割を積極的に遂行できるような基礎的な力と、活躍できるような基盤作りが必要と考えた。

その構想作りのために、教員で話し合いを持ち、基本的な考え方としての「異質の他者とのコミュニケーション能力を育てる。」「現代社会を生きる生徒を育てる。」「実践を支える論理的思考力、判断力、批判力を育てる。」もふまえて話合った。方向性としては「学年総合」のある部分を教科として取り組めるように位置づける形をとることにした。課題として、学習集団の作りの方法や、目標の設定などについても上げられた。

さらに、学力保証の面で保護者等の理解を十分得る必要性も課題として出された。

これらを考え、目標と内容を明確にして教科として設定することで、どの生徒にも力をつけることができると考えた。そこで、中学校では既存の教科に加えて、新教科を設置する意味を「現行の教科で扱われているが、教科を超えて組み直した方が新しい時代に生きる子どもたちに必要な資質能力を育てられる内容」、「社会と関わりを持つために、中学生としてまたは中学生から身につけておかなければならないこと。」「中学生でないと身につけられないこと」を学べる教科として進めることにした。さらに「楽しい、おもしろい、わかる、納得できる」を要素として盛り込み、形態としては活動が目的ではないが、「座学と活動を組み合わせたもの」で、グループ活動などを多く取り入れて、協働して学びを生み出す場面を設定できることを合わせて提案した。

2) 新教科「つなぐ科」設置に向けて

以上のような経過から、次のような目標を持つ新教科「つなぐ科」を設置し、試行することにした。

第1 目標 変化する社会に対する関心を高め、メディアや事象に対し論理的・科学的に思考し判断する能力と態度を育てるとともに、生活に関わる技術や社会の仕組みについての理解を深め、具体的な活動を通して実践的コミュニケーション能力や、新しい社会の形成者としての創造的・協働的資質の基礎を養う。

教科の名称であるが、これまでの教科間の橋渡しをするもの（Trans-disciplinarity）と同時に、学校のみにとどまらず、現代の社会生活や人との関わり（Network）を今まで以上に強く意識し、広い視点（Global）で学習できる教科であることを込めて、

「つなぐ（TNAG:Trans-disciplinarity,Network And Global）」
とした。目標を実現するために、4分野程度での構成を考えている。

3) 運用について

「つなぐ科」の運用については、次のように考えている。

年間35時間設定。平成18年度は後期を中心に実施する。一部は時期を集中して実施する。各分野における単元は4～6時間程度で構成する。指導する教員は「つなぐ科」専任ではなく、教科の専門性を生かしながら、できるだけ多くのものが関わることにする。コミュニケーション能力、協働的問題解決能力、論理的思考力などについては「つなぐ科」全体で育成する方向で構成する。

4) 今年度の具体的な取り組み

2年次における単元開発への可能性を探るため、国語科・数学科で試行的な実践を行った。

①国語科での実践例から

[単元名]「メディアとコミュニケーション・シリーズ（その1）」

表現と意図 ―ポスターを読み解こう！―（2単位時間＋自宅学習1扱い）

[単元名]「メディアとコミュニケーション・シリーズ（その2）」

言語表現と視点論 ―3匹の子ぶたの本当のお話―（1単位時間扱い）

生活に密着し、現代的な学ぶ意味が見えやすい内容で、生徒の反応は好評であった。

②数学における実践例から

[単元名]「宇宙人と交信しよう」（2単位時間扱い）

二進数に関わる単元であるが、情報と生活に関わる例と考えるが、扱う学年も含め、単元として位置づけることができると考える。

5) 今後の課題

「つなぐ科」については、多くはまだ構想の段階であるが、2年次における教科としての実施に向けて推進するために、各分野構成およびそれぞれにおける目標と内容について具体的に検討するとともに、評価のあり方についてもさらに進める必要があると考えている。

今後、単元開発をしながら、より適切な形態を目指していきたいと考えている。また、各分野間の相互の関連、指導学年のくくりなど整備すべき事項は多くあるが、実証的に取り組んでいきたい。